訂正
增補

枕草子春曙抄

中

訂正増補枕草子春曙抄中巻目録

巻五

○四十五段一丁オ めでたきもの
○四十六段二丁ウ なまめかしきもの
○四十七段八丁ウ ねたきもの
○四十八段十丁オ かたはらいたきもの
○四十九段十丁ウ あさましきもの
○五十段十一丁オ くちをしきもの

巻六

○五十一段廿四丁オ はるかなるもの
○五十二段廿五丁ウ 關は
○五十三段廿六丁オ 森は
○五十四段廿六丁ウ 湯は
○五十五段廿六丁ウ つねよりもことに聞ゆるもの
○五十六段廿七丁オ 繪にかきておとる物
○五十七段廿七丁オ かきまさりするもの
○五十八段廿七丁オ あはれなるもの
○五十九段三十二丁オ 心つきなきもの
○六十段三十二丁オ わびしげに見ゆるもの
○六十一段三十二丁ウ あつげなるもの
○六十二段三十三丁オ はづかしきもの

巻七

○六十三段三十四丁オ むさくなるもの
○六十四段三十四丁ウ はしたなきもの
○六十五段四十三丁ウ つれ〳〵なる物
○六十六段四十四丁オ つれ〳〵なぐさむる物

九曜文庫 日明

○六十七段四十四丁オ　さり所なきもの
○六十九段五十一丁オ　おそろしきもの
○七十一段五十一丁オ　きたなげなるもの

巻八

○七十二段五十二丁オ　いやしげなる物
○七十四段五十二丁ウ　うつくしきもの
○七十六段五十四丁オ　名おそろしきもの
○七十八段五十四丁ウ　むづかしげなる物
○八十段五十五丁ウ　くるしげなるもの
○八十二段五十七丁オ　さくゆかしきもの
○八十四段六十三丁オ　昔おぼえてふやうなる物
○八十六段六十三丁ウ　近くてとほきもの
○八十八段六十四丁オ　非は
○九十段六十四丁オ　やさりのつかさの櫺の守は
○六十八段四十四丁ウ　なほ世にめでたきもの
○七十段五十一丁オ　きよしと見ゆるもの
○七十三段五十二丁オ　むれつぶるゝもの
○七十五段五十三丁ウ　人ばへするもの
○七十七段五十四丁オ　みるに異なる事なき物
○七十九段五十四丁ウ　えせ物の所うる折の事
○八十一段五十六丁オ　うらやましきもの
○八十三段五十七丁ウ　心もとなきもの
○八十五段六十三丁ウ　たのもしげなきもの
○八十七段六十三丁ウ　遠くてちかきもの
○八十九段六十四丁オ　受領は
○九十一段六十四丁ウ　大夫は

中巻目録終

めでたき物　見事なるこ

[増]めでは愛こ。たきはいたきこ。甚の字にあたれり。めでたきものとは。甚ダ愛セラルヽモノといふに同ト

からにしき　唐錦、蜀錦などなり

かざりだち　延喜式彈正云。凡雷鎗太刀五位以上聽レ之。桃華葉葉云。鎗劔三節會。内宴。御禊。行幸等王卿用レ之云々

むかしは二宮の大饗にも公卿以下鎗劔を用。近代樋螺劔を着ス江次第に有

六位藏人　官位不審問答。六位の時地下の者も藏人に補し候へは昇殿禁色をゆるされ候云々

ざふしき　藏人所雜色こ。禁秘抄云。本員八人。代々皆轉二藏人一。仍公卿子孫又可レ然諸太夫多補レ之。職原抄云。其家子補レ之云々

せんトもてまゐり　内侍宣として藏人奉勅の宣旨を六位藏人の持參こ。宣旨とは給ふむれとよむこ。天子の仰せを藏人頭承りて其旨を直に宣下するを内侍宣とはいふこ。河海にあり

大饗のあまくりのつかひ　大臣の大饗に蘇甘栗の使としてあるに。六位藏人參る事こ。大臣大饗とは大臣に任ぜられたる人。大納言以下。辨。少納言。官外記史などまで饗應せらるゝ事こ。江次第二曰。大臣家大饗饗正月四日左大臣藤氏一大臣用二朱器甕盤一。以二其日一可レ行由以二職事一達二天聽一。是非二式日一時依レ可レ遣二蘇甘栗使並饗祿樂部等事一歟。藏人到二中門一。以二家司一令レ奉二

めでたきもの

からにしき。かざりだち。つくり佛のもく。いろあひよく花ふさながくさきたる藤の松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみしき君達なれども。えしもき給はぬあやおりものを心にまかせてきたる。何をいろすがたなどいとめでたきなり。所のしう。ざふしき。たゞの人の子どもなどにて。殿原の四位五位六位もつかさあるが下に藏人になればめでたきこ

うちゐて。何と見えざりしも。藏人になりぬれば。えもいはずぞあさましくめでたきや。せんじもてまゐり。大饗のあまくりのつかひなどにまゐりたるを。もてなしきやうよ

にあひて蘇給ふ事あり江次第云

うち給ふさま。いづこなりし天人にやこ六位藏人の事こあまくたり人おらんと。こそおぼゆれ。御むすめの女御后におはします。まだひめ君など聞ゆるも。御使にてまゐりたるに。御文とりいるゝより

蘇甘栗等」
盛二折櫃二合一合　蘇大二　一合　甘栗大八中八　各小二
居二土高坏一入二外居一荷一小舎人二人衣冠相具。仕丁二人著二荒染一持レ之。蔵人著二青色袍一於二對庇一可レ進歟
［増］源云。江次第抄云。蘇牛乳也。甘栗平栗也。西宮記云。蘇四壺（大二小二）平栗子十六籠（上八中八）此蘇甘栗の使。この前文にも蘇甘栗を給ふ事みえたれども。この蘇宴の序に給はるなれば使はなきなり。荷田在満が江次第割記に。蘇甘栗使は大饗をいふ大臣家蘇甘栗を下使と見ゆ

御使にて　蔵人のまゐると。禁秘抄云。御使事。依レ人依レ事有二差別一。蔵人頭。近衛將。五位蔵人。六位蔵人等也下畧

御文とりいるゝより　女御后まだ姫君の方へ取いるゝと。禁秘抄云。御書事。后女御以下於二女房一無二定子細一勿論歟。料紙女房許多瀧樣。後々檀紙也上下畧

かうふりえておりん事近く　六位蔵人巡爵して五位に叙して。蔵人をさりて。地下におるゝ事と前註

其御たまはりなど申て　御給と。巡爵のゝち受領など申す事と

うちはじめ。まとねさし出る袖ぐちなど。御使にまゐれる六位蔵人への會釋と　あけくれ見しものとも　おぼえず。下がさねの裾と　まりひきちらして。衛府蔵人にて衛門兵衛など兼たると　ゐふなる　ぱいますこしをかしう見ゆ。みづから盃さしなど　まる給ふ　六位蔵人が心にもと　を。我心にもおぼゆらん。いみしうかしこまり。日比地下にてありし間一所にも居ず畏たる人々にも蔵人に成ては同下やうにつれありくと　家の君たちをもけしきばかりこそ　かしこまりたれ。おなじやうにうちつれありく。うへのちかくつかはせ給ふさまなと見るぱ。ねたくさへこそおぼゆれ。御文か、せ給へば。御すゞりのすみすり。御うちぱなどまゐる給へば。われつかふまつるに。みとせよとせばかりのほどを。なりあまく。物のいろよろしうてまじろぱんぱいふかひなきもの　なり。かうふりえておりんことちかくならんだに。いのちは御前へまゐる事もなくなれば古今に命にもまさりてをしくある物はとよめる詞と　よりぱまさりておしかるべき事を。其たまはりなど申て　まどひける　こそ口をしけれ。昔の藏人ぱことしの春より　とそなきたちけれ。今の世にハぱしりくらへをなんする」

はかせのさえある　儒家に紀傳明經などあり。環翠云。明經道は十三經を以家業とす。紀傳道は三史史記漢書後漢書文選等を家業とす

下らうなれども　官位ひくき事と。文章博士は從五位下。大學博士は正六位下の相當と。官位令にあり

御ふみの師にて　帝の御師範と。御侍讀とて候すると。禁秘抄云。紀傳御侍讀能々可レ有二清撰一世之所レ許明書也

願文　御祈禱追善等にかく文也本朝文粹。菅家文草などに願文數多有

いづら御どきやうあふらおそし　くらくて人はよみやみたるに才ある法師はそらに覺えて一人讀誦する也

貴行啓春宮后宮の御ありきを行啓といふと

みやはじめのさほうしく　立后の左法禁中のごとく狛犬大床子などしつらふる事と。こゝは定子の皇后宮に立給ひしはじめの左法しき事にや。正暦元年六月一日なるべし。榮花物語かゝやく藤壺の卷に。上東門院立后の所云。此たびは藤壺の御しつらひ大床子たて。御帳の前のこま犬なども常の事ながらめとどまりたり云々

内膳御へついわたし奉り

博士の才智ある花鳥云博士は博達の士といふ事と　ぱかせのさえあるぱいとめでたしといふもおろかなり。

かほもいとにくげにけらうなれども世にやんごとなき物オ智ゆゑに世にたふとまるにおもぱれ。かしこき御前にちかづきまゐり。禁裏春宮などをさしていふと　さるべき事などとぱせ給ふ御文の師にてさふらふぱめでたくこそおぼゆれ。願文も。さるべきものゝ序つくり出してほめらるゝいとめでたし。法師のさえあるすべていふべきにあらず。持經者のひとりしてよむよりも。あまたが中にて。時ななどに經よむ事と　どさだまりたる御讀經と　どきやうなどに。なほいとめでたき也。オある法師ぱ猶と　くらうなりていづら御灯明おそしと心と　どきやうあふらおそしなどといひてよみやみたるほどまのびやかにつゞけゐたるよ。后のひるのぎやうけい。御うふや。みやはじめのさほうまく。こまいぬ。大まやうじなどもてまゐりて。御ちやうのまへにまつらひする。内膳御へついわたしたてまつりなどまたる。句

ひめぎみなど聞えしたゞ人とこそ露見えさせ給ぱね。一

百寮訓要云。内膳司天子の供御を奉行する所之。たとへば膳部所など申所同事之。昔は内膳の御飯ならでは主上はきこしめさぬ事之。およそもろ〳〵の御膳の具は。此所におかる云々。立后有ては禁中の義式をうつすさまなるべし

今上一の宮キンジヤウイチノミヤ或ハゴン上一條院の第一の皇子敦康親王の御事にや。御母后宮定子なれば御叔父に内大臣伊周中納言隆家卿など上達部あり

なまめかしき物
優美なる心之

きんだち　公達とは攝家の子息清華などを申之

うへのはかま　表袴之

攝政關白を申之

の人の御ありき。藤原の祖神なれば必一の人參詣ある事之　春日まうで。えびぞめのおりもの。すべて蒲萄染は紫なるにつけて之　紫なるはなにも〳〵めでたくこそあれ。花もいとゝもかみも。句　むらさきの花の中にはかきつばたぞすこしにくき。いと是　六位藏人の宿直姿之　禁色をゆるされにたし。六位のとのゐすがたのをかしきにもむらさきのゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりたきたる。今上一のみやまだわらはにておはしますが。御をぢに上達部などのわかやかにきよげなるにいだかれさせ給ひて。殿上人などめしつかひ。御馬ひかせて御覽じあそばせ給へる。思ふ事おはせじと覺る」

なまめかしきもの

ほそやかにきよげなるきんだちのなほしすがた。直衣きたる姿之　をかしげなる童女のうへのはかまなどわざとにはあらで。句　ほころびがちなる高欄之らんかんのもとにあふぎさしかへしてゐたる。汗衫前に註　かうらんかんの女房の着たる物之　顔にさしかざしたる之　若き女房之　わかき人のをかしげなる。夏のきちやうのすたうちかけて。ふたあひ引かさねて。手ならひたる。薄樣にて書し草紙之　うすやうのさうし。むらごの村濃之糸をてをかしくとちたる。柳のもえたるに。青きうすやうにかきたる文つけたる。ひげこのをかしうそめたる。五えふの枝につけたる。三重　みへがさねのあふぎいつへはあまりあつくなりて。五重　檜扇の手もと厚之　もとなどにくげ也。よくしたるひわりご。檜破子之　しろきくみのほそき。組糸のほそきの之　あたらしくもなくていたくふりてもなきひはだ屋にさうぶうるはしくふきわたしたる。檜皮屋之　菖蒲　あをやかなるみすのしたより。くちきがたのイルヲのくちきかたの　びかされたるもをかし。夏のもかうのあぎやかなるすのとのかうらんのわたりに。いとをかしげなるねこの。あかきくびつなに。首綱之猫の引つなの之　白きふだつきて。猫の名など書て札付しにや　いかりのをくひつきてひきありくもなまめいたり。五月のせちのあやめの藏人。さ

夏のきちやう

几帳の帷夏は生を用。ふたうちかけてとは。几帳のかたびらのすそを帳臺にうちかけたる之

ひげこのをかしうそめたる

霧籠の竹を繪のくなどにてそめて五葉の松にゆひつけし之

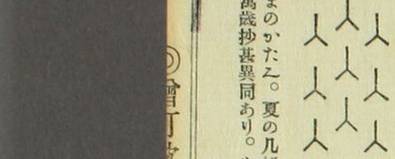
みへがさねのあふき

河海抄云。檜扇の兩方の上三重づゝ薄樣にてつゝみて。色々の糸にてとぢて。あはひむすびにしておきたる之。五重もおなじ風情なり

くちきがたの

冬の几帳の繪之。禁秘抄清涼殿の所にいはく。四面有二几帳一帷夏生以二胡粉一畫二蒼雀一冬朽木形云々

[增]源云。くちき形とは



かゝるさまのかたの。夏の几帳に用る形之

[訂]此所は萬歲抄甚異同あり。心みに左にいふべし

「くちきがたのあさやかにて。ひもの風にふきなびかされつゝやかなるもいとをかし」

いづれにも意は同ト事なれど。原本にはひもいとつやかにてとありて又。ひものふきなびかされとあれば。異本によりて上のひもを省きつ

猫の綱に碇をつけて物にかけていかりのを

猫を引とゝめんためにしたるこ。其緒を猫の食ひされたるさまこ

[訂]濵按。碇の緒なにとも心得がたし。いかりなぞとありしをかきひがめたるなるべし。怒る氣色はなくてたゞされてくひつつゝひきありくならん

弘按。のはなの誤ならんか。然らば猶こ。此書にはなほをなをと悉くかけり。意は濵按の如くなるべし

五月のせちのあやめの藏人　五月五日の節に内侍女藏人。續命縷を群臣に給ふと花鳥餘情にあり。前註是をあやめの藏人といふにや

あかひもの色にはあらぬ　赤紐は五節などの時紗みたゝみてあはびむすびをして泥繪などかきて。右の肩に二筋つくる事あり。菖蒲のかづらはひれくたいなどして　領巾。裙帶也。順和名云。領巾。日本紀私記云。比禮婦人項上飾也。裙帶和名云。白氏文集云。青羅裙帶　裙帶。如字

ひとりのわらは　五節の舞姫まゐる時薰爐をもつ童女こ。江次第十云。舞姫等次第參入。先童女一人持二火取一次童女一人持レ筥。五節帳臺試并御前試の所にもあり

をみの君達　是豐明の節會に小忌衣着したる君達こ。江次第に小忌王卿。小忌大夫なといへるこれ也。如の卷。五せちの比の所に。頭中將藏人少將などをみにあをすりのすがたきよげにめやすくてとあり。河海云。小忌青摺山藍摺也。花鳥云。十一月中卯日新嘗會。辰日豐明節會には。山あゐにてすれる小忌といふ物を着するこ。一代一度の大嘗會にもかくのごとし云々

りんドのまつりの舞人　賀茂八幡などの臨時の祭に舞人あり　前註江次第等委

五せちのわらは　五節の舞妓の童こ。善相公異見曰。五節舞妓者大嘗會時五人。皆預二叙位一。其後年々新嘗會時四人。又曰擬二良家女未レ嫁者一置爲二五節妓一云々

宮の五せち出させ給ふに

后宮定子の御方よりこ。常は公卿受領より

○宮の五せち出させ給ふに。かしづき十二人。句ととところにうぶのかづらあかひもの色にはあらぬを。領巾裙帶ひれくたいなどして。くすだまを。みこだち。かんだちめなどのたちなみ立並こたちなを給へるに奉るもいみしうなまめかし。王卿樂玉をとりてこ

つけて。ふたうしばいし給ふもいとをかし。舞蹈也前註拜こ　ひとりのわらは。をみの君たちもいとなまめかし。六位藏人こ前註六位のあをいろのとのゐすがた。りんじのまつりの舞人。五節のわらはなまめかし」

出す事なれども。又かやうの御方よりも取持給ふ事にや。乙女卷に源氏の五節を出し給ひし事あり

かしづき十二人　乙女卷にもかしづきなどゝあり。抄に。かいしやくの人をいふべしこ云々。江次第十。五節の所に。童女傳といへる是こ

みやす所の人を　源氏に。桐壺更衣光君をうみ給ひて後。御息所といへり。細流云。御子を生奉て後御息所と號するやうに此物語にはいづくにもいへり。一條禪閤御說云。又東宮の正室は必御息所といふ是后がねこ云々。然ば此草紙のみやす所は御子うみ給ふ說によらば定子の御事にや。又東宮の正室とならば淑景舍なるべけれど。此草紙の趣は定子の御事可然こ

女院　東三條院詮子こ一條院の母后。法興院攝政兼家公の御女。河海云。東三條院正曆二年七月一日院號依レ爲二國母一也。定子の伯母こ

しげいさ　三條院の女御。中關白道隆公の御むすめ。母高内侍。清少納言も後は此御かたに候するよし榮花物語に見ゆ。定子の御妹こ。淑景舍は桐壺の事こ。五間四面の御殿こ

たつの日の青すりのからきぬかざみ　花鳥餘情云。舞妓の裝束丑日は赤色の唐衣。寅日は青色唐衣。辰日は青摺唐衣。赤紐。日蓬鬘等也。あをすりは小忌の事也云々。雲圖抄云。十一月五節事丑日帳臺試。寅日淵醉并御前試。卯日童御覽。辰日節會云々。公事根源にも粗しるさる

[訂]濵云。イ本にえうしたるとあり。こは瑩したるこ。みがくことこ

やうしたる　しろききぬにかた木のかたるにかきたる。[增]濵云。かた木は板木こ。かたは蝶鳥などこ。板

しろききぬにかた木のかたる物こ。大かた狩衣のごとし云々。こゝには白き絹とあり。女房の服には絹を用るにや

イ女御みやす所のはみやす所の人出すをば。わろき事にぞするときくに。いかにおぼすにか。宮の女房を十人出させ給ふ。今ふたりは[訂]イ本にもトあり女院の御方の人こ叔景舍の御方の兄弟こばらから成けり。たつの日の女院にょうゐんきげいしやの人やがてあをずりのからきぬかざみをきせ給へり。女房にだにかねてさしもきらせず。殿上人にはましていみしうかくして。みなさうぞくしたちて。くらうなりたるほどにもてきて。舞妓かしつきなどのこきます。あかひもいみしうむすびさげて。いみしくやうし樣子したるこ赤紐前註

たるしろききぬに。かた木のかたるにかきたる。小忌のさまこ　おり物の唐衣のうへにかの小忌を着たるなるべし

からきぬのうへにきたるはまことにめづらしき中に。わ舞妓こ

らはゝいますこしなまめきたり。下づかへまでつゞきたイニからきぬうへに傳シモヅカヘ江次第によりて十二人のかしづきにゃ

ちいでぬるに。かんだちめ殿上人おどろき興じて。をみの小忌の君達隱して云給へはこはけう

女ばうとつけたり」

木がたを螢したる白き衣に畫かきたるこ
をみのきんだち
[增]濵云。小忌は役名こ。大忌といふもあり。
それをつとむる人は多く青摺をきる故に。
上文にも青摺きたる女房を見たてゝをみの
女房といへり。青摺のことを小忌衣といふ
は。後世まで誤れる名こ。源氏にをみにて
青摺すがたなるもありと見えたるにて思ふ
べし
五せちのつぼねをみなこぼちすかして
辰日の儀式事はてゝの事なるべし
其夜まではなほうるはしくこそあらめとのた
まはせて　此儀式を猶あかすおぼす故
に。局などこぼちても。猶夜までは舞妓の
さまやつさでうるはしくてあれとて。さも
いたくしなさせ給はぬとこ。后宮の御はか
らひなるべし
小兵衛といふが
是后宮の女房こ。前に常陸介が事を右近内
侍にまれバせし人こ。かしづき十人の内に
や
されかたの中將　勘物云。貿方正暦二年九
月右中將元右馬頭五年九月八日左中將
あし引の山井の歌
足引は山の枕詞こ。我思ひのむすぼゝれた
るを山井の氷にそへたり。下句は彼赤紐の
とけしを。氷をひもといふによせてよめり。
此歌後拾遺集雜五に實方の歌こ。彼集にて
は雜のうたなれど。此草紙にはたゞならず
とあれば戀にや

をみのきんだちはとにる(外こ)て。ものいひなどす。五せちのつ
ぼねをみなこぼちすかして。いとあやしくてあらする(舞妓ごもをこ)。い
とことやうなり。其夜まではなほうるはしくこそあらめ
とのたまはせて。さもまどはさず。きちやうどものほころ
びゆひつゝ(つくろふさまこ)。こぼれ出たり(袖口などなるべし)。小兵衛といふがあかひものと
けたるを。これをむすばゞやといへば。さねかたの中將よ
りてつくろふにたゞならず(心けざうし給へるにや)
實方の歌こ
あし引の山ゐの水はこほれるを
いかなるひものとくるなるらん
いかゝ。年わかき人のさるけそうのほどなれば。いひ
(小兵衛が事こ)(顯證あらはに晴がましき所なればはづかしき)
にくきにやあらん。返しもせず。そのかたはらなるおきな
(にやとの心こ)(此うたの返しにとりあへぬこ)(おさなしき)
女はうだちこ
人たちもうちすてつゝともかくもいはぬを。みやつかさ
(中宮大夫以下の宮司こ)
などはみゝとゞめてきゝけるに。久しくなりにけるかた
(返歌なくて笑止さに人の見ぬかたより入て清少などに返歌を宮司のそゝのかすこ)
はらいたさに。ことかたよりいりて。女はうのもとにより
て。(宮司の詞こいかてかく返哥し給はぬぞとこ)などかうはおはするなどぞさゝめくなるに。四人ばか
りをへだてゝゐたれば(是より清少の心こ)よく思ひえたらんにもいひにく
し。まして哥よむとしりたらん人の。おほろけからざらん
(實方をさしていふこ)(大かたならぬうたにはさこ)(宮司の清少などにはげまし)
はいかでかとつゝましきこそはわろけれ。よむ人はさや
(宮司の詞こいかてかとこ)
はある。いとめでたからねど。ねたふとこそはいへと。つま
はじきをしてありくも。いとをかしければ
(清少返哥千載集にはうはこほりあはにさあり)
うすこほりあわにむすべるひもなれば
かざす日かげにゆるふばかりそ
(さくる心こ)(イ本を)
(是も后宮の女房こ)
と辨のおもととといふにつたへさすれば。きえいりつゝえも
(辨恥たるさまこ)(辨のおもとこ)
いひやらず。などかゝとみゝをかたぶけてとふに。すこ
(宮司えきかぬこ又實方の聞とり給はぬにてもあらんにや)
しことゞもりする人の。いみしうつくろひ(こゝろをつくろふこ)。めでたしとき
もさこもる人こ
かせんと思ひければ。えもいひつゞけずなりぬるこそ。中
(かの返哥をよくいひきかせざりしは清少のはぢをかくすなりしと卑下の詞こ)
りしは清少のはぢをかくすなりしと卑下の詞こ
〳〵はぢかくす心ちしてよかりしか。おりのぼるおくり
などに。なやましといひいれぬる人をも。の給はせしかば。
(后宮の仰せつけられしかば)

あわなりし瀧の白糸ふゆくればさくべくも
あらす氷むすべり
榮花歌合に
さくれどもあわにもあらぬ瀧の糸と常によ
りてもみまほしきかな
こどもりする人
痴コトヽモリ法華經譬喩品云。若得レ爲二人
聾盲瘖瘂一諸二斯經一故獲レ罪如レ是中略
おりのぼるおくりなどに
五節の帳臺の試。御前の試などに下り上る
其送りに。或は所勞など申入し女房をも。
后宮の懇にの給ひしかば。各のこらず群立
て女房おほくあまりうるさきまで有しと
そめどの〻式部卿
紹運錄村上天皇の皇子爲平親王を染殿式部
卿と號す云々
はての夜もおひかづきいくにもさわがず
助正のむすめの十二歳なるを負かづき打つれ行にも。うちしづまりておとなしくをかしき人さん。はての夜とは辰日節會の時にや。但卯日童御
覽の事にや。公事根源に卯日は童御覽す清涼殿に召て御覽す云々
ほうだちのひらを
細釼平緒。此一節と次の段も五節の事に連
續せず。只なまめかしき物をいふなるべし
とのもりづかさなどのいろ〳〵のさいくを
雲圖抄裏書に御前の試みの夜。主殿の官人
庭中に列立て炬火を擧る事あり。又辰日の
節會に。舞姫參上シテ於二第三間一列舞。主
殿女孺四人乘レ燭照レ舞云々。此時主殿の女
孺の出立に。さやうの事あるなるべし。未
レ及二管見一追而可レ考
うへざふしわらはべ
上雜仕童にや
いみしき色ふしと
五節の比の事を面白き事に思ふさまと
山あゐ日かげなど
山藍にてすれる物や。日陸の糸など。五節
の用意に柳筥にいれありくにや
やないばこ　柳筥
公家衆の冠香短册など萬の物をすうる物
と。今僧家の送り經をのする物と
[增]濱云。此註は今いふやないばこのことに
て。此所にかなはす。物すうるも入るゝも
柳箱とかきてわからねど臺はやないばこと
いひてわくると
なほしぬきたれ
直衣を脫垂と
行事の藏人
雲圖抄十一月五節事云。一藏人爲二行事。
有二故障一之時二三藏勉レ事。いま案ルニ行事
の藏人とは。舞の間亂入を禁する奉行と。
江次第有
しとれなどしきたれど
女中より行事の藏人のために酒をさし出せ
ど憚りたるさまと
ちやうだいの夜
公事根源云。中丑日なれば五節の帳臺試と云。
常寧殿にて主上御覽あり。五節の舞姫は五
人也。まゐりの儀式あり。內に參るなれば曉
のそりはしに。髻村濃
もとゆひのむらごいとけぎやかにていで
あたるも。さま〴〵につけてをかしうのみ。うへざふしわ
らはべども。いみじき色ふしと　おもひたるいと　ことわり
と。山あゐ日かげなど。やないばこにいれて。かうふりした
るをのこもてありく　いとをかしう見ゆ。殿上人のなほし
ぬぎたれて。扇やなにやとひやうしにして。つかさまされ
どしきおみぞたつといふうたをうたひて。つぼねどもの
まへわたるほどはいみしく。そひたちたらん人の心さわ
ぎぬべしかし。ましてさと一度にわらひなどしたるいと
おそろし。行事の藏人のかひねりがさね。ものよりことに
きよらに見ゆ。しとねなどしきたれど。中〳〵えものぼり
ゐず。女房の出たるさまほめそしり。此ごろはこと事はな
かめり。ちやうだいの夜。行事の藏人いときびしうもてな
して。かいつくろひ二人。わらはよりほかはいるまじとお

女孺などのさまなるべし
扇拍子筋びやうしなどして
五節にそひたるかしつきと
心さきめ
助字と
巡と
拙練重さうぞくと
萬物よりことにこと
五節の沙汰ばかりと
藏人が褒貶すると
帳臺試
是江次第にいへる童女なるべし蘇燈茵など持ものと
后宮の五節と
誰と來勘
是后宮の五節助正のむすめの母と
仁壽殿と
此五節の道筋雲圖抄圖有
后宮の上局と是も清
彩色付たるにや
紫紙の文なるべし
封と
是より又五節の事を立か
細工せし物にや物忌つけたるやうにせし
髮結とかしくしなどしてと
藏人が褒貶すると
五節の沙汰ばかりと
是江次第にいへる童女なるべし蘇燈茵など持ものと

座といふ。皆まゐり調りて帳臺に出御なる。殿上人ども脂燭に侍ふ。主上御直衣に指貫にて御沓を召る。主上御指貫なめさるゝ事此時の外はなし。但御鞠の時は帳臺試に准下て召るゝこと。帳臺におはしますほど歌舞あり。びんたゝらなどうたふ。大哥小哥などいふ事あり下略猶江次第委。圖は雲圖抄にあり

行事の藏人いときびしうもてなして

物見る人などの亂入を禁ずるさまこと。江次第帳臺試云。藏人頭行事藏人立二舞殿東戸下一開闔。舞間禁二亂入一理髮童女陪從下仕之外不レ可レ入。頭若行事藏人之外不レ能レ伺二戸外一 上下略

かいつくろひ二人　五節のかしづきのたぐひこと。後拾遺の詞書に一條院御時。皇后宮五節奉り給ひけるに。かいつくろひつかうまつりける人の。つけて侍けるあか紐のとけて云々。これ江次第に理髮一人とある物なるべし

猶これひとりはなどの給ふ　殿上人の物見る人を具しきたりて。是一人はいれよと侘るさまなり

こと〳〵しくいひつる藏人　殿上人などにはきびしくいひし藏人の。后宮の御かたの人々には何ともえいはざりしこと

むみやうといふびはの

無名は。拾芥云。上東門院名物也。或說蟬丸琵琶。上東門院令レ坐二濟時亭一之時爲二面祿一燒失畢。愚案せみ丸のといふ說もあれば。むかしより禁中に有しゆゑ。定子の御方へもてわたらせ給へるなるべし。さてのち上東門院の名物とはなれるにや

さへて。おもにくきまでいへば。殿上人など。猶これひとりばかりはなどのたまふ。うらやみあり。いかでかなどかたくいふに。宮の御かたの女房二十人ばかりおしこりて。とと〳〵しう いひたる藏人なにともせず。戸をおしあけてさゝめきいれば。あきれて。いとことばすゞなき世かなとてたてるもをかし。それにつきてぞかしづきともみないる。けしきいとねたけなり。うへもおはしまして。いとをかしと御覽じおはしますらんかし。わらはまひの夜はいとをかし。とうだいにむかひたるかほどもいとらうたげにをかしかりき」

むみやうといふびはの御ことを。うへのもてわたらせ給へるを。見などしてかきならしなどすといへば。引にはあらずをなどをてまさぐりにして。これが名よ。いかにとかやなどきこえさするにたゝいとはかなくなもなしとのたまはせたるは。猶いとめでたくこそ覺えしか」

しけいしや

淑景舍女御之后宮の御いもうとこと

ことのゝえさせ給へり

故殿とはかくれ給へる父君の御事こと。中關白のしげいさへまゐらさせ給こと

僧都のきみ

勘物云。隆圓、隆家、兄弟正暦四年權少僧都十不レ經二律師一。寛弘八年四月權大僧都。卅長和四年二月卒卅七

いなかへゝとおぼい

其笙を琴にはかへまゝきとしげいしやのおぼしたる物をとこと。江淡云。不不レ替是笙名也。唐人賣レ之千石ニ買ントニ云。イナカヘシト云ケレバ。以レ之爲レ名云々。拾芥名物部にもあり

[訂]原本にはおぼひとあり。一本にはおぼいとあり。こはおぼいの方よろし。いはしの音便にて。敬語におぼしといふべきを。音便にておぼいといふこと。此例源氏などに多し

此御ふえの名を

此不不レ替といふ笙の名を隆圓知給はれば。此后宮の御詞の秀句をしらで。只御あいさつなきと恨み給ふこと

びはゝげんゝやう

古今著聞云。玄象が撥面の繪はきえて久し

無名と名をのたまはんよりは猶とこと

后宮の御かたへこと

僧都のしひて望む心ばへこと

后宮のしけいさの心を察しての詞こと

笙の事こと管の類を皆ふえと云こと

僧都の詞こと　隆圓

琴こと

しけいさ同心ならぬさまこと

いもまぎらはすこと

禁中の御事こと是いなかへゝの事を譯

主上

無名といふ琵琶なればこと

く成にたればしれる人なし。二條故教通公仰られけるは。玄象が撥面の繪やうは。馬上にてたまをうつ物。腰にたまをさして舞たる姿也下略紫秘抄云。或曰玄象呑二青鉢之水一所レ謂號二玄象一。又玄上宰相獻二延喜帝一。仍號二玄上一。但妙音院入道付二玄上一說一歟

[增]玄上は人名より名付たる說然るべし

ぼくば　拾芥云牧馬與二玄上一一雙名物也下略

ぬゝへ　井上は。拾芥に。和琴の名也。毫及翁の勘物に井手とあり。拾芥に在二宇治寶藏一云々琵琶之

[訂]弘按。井上は略してはぬへといふべきなり。口拍子にてぬゝへとやうにいひ來りし訛なるべし

ぬきやう　拾芥云。渭橋。三條式部卿琵琶。一名爲堯

[訂]原本にはいけうとあれども誤也。渭橋も爲堯もぬきやうの假名也。因て今改めつ

くちめ　拾芥和琴部云。朽目或朽部

しほかま　毫及勘物云。鹽竈和琴云々。但拾芥名物部には。箏の名也。和琴にも此名あるか可尋之

二貫　勘物和琴云々

すゐろう　こすゐろう

水龍。拾芥名物笛部云。大水龍。江記云。天曆御宇寶物。小水龍同

うたのほうし

拾芥和琴部云。宇多法師寬平法皇貴重餘有二此名一。河海云。宇陀法師和琴名物也。以レ檜作之。一條院御時內裏燒亡之時燒失云々

くぎうち　拾芥笛部。釘打。

はふたつ

又玄象　牧馬

やう。ぼくば。ゐゝへ。ゐきやう　渭橋　むみやうなど。無名前註　又わごんなど　和琴

も。くちめ。しほかま。朽目　鹽竈　二貫などぞきこゆ。是よりさまゝくの樂器をいふこと　すゐろう。こすゐ

ろう。うだのほうし。宇多法師　くぎうち。釘打　ばふたつ。葉二　なにくれとおほく　何やかやと

きこえしかどわすれにけり。宜陽殿之　ぎやうでんの一のたなにと

いふことぐさは。頭中將こそ志たまひしか」　とうのちうじやう齊信卿にや

又主象　牧馬

やう。ぼくば。ゐゝへ。ゐきやう　渭橋　むみやうなど。無名前註　又わごんなど　和琴

も。くちめ。しほかま。朽目　鹽竈　二貫などぞきこゆ。是よりさまゝくの樂器をいふこと　すゐろう。こすゐ

ろう。うだのほうし。宇多法師　くぎうち。釘打　ばふたつ。葉二　なにくれとおほく　何やかやと

きこえしかどわすれにけり。宜陽殿之　ぎやうでんの一のたなにと

いふことぐさは。頭中將こそ志たまひしか」　とうのちうじやう齊信卿にや

うへの御つぼねのみすのまへにて。殿上人日ひとひこと　是より別の物かたりこと

ふえふきあそびくらしてまかで　退出こと　わかるゝほど。またかう　うしおろさぬこと

しをまゐらぬに。おほとなぶらをさし出たれば。とのあき　みしかき灯臺こと　イさりいれ

たるがあらばなれば。びばの御ことを。たゝぎまにもたせ　后宮の琵琶引ておはせしか火影あらはなれは引やみて只にも

給へり。くれなゐの御ぞのいふもよのつねなる。うちき。又　たせ給ふこと　句紅の御袿こと　また

張たる物などめしたるも　あまた奉りて。いとくろくつやゝかなる御び　琵琶をこと

ばりたるもあまた奉りて。いとくろくつやゝかなる御び　琵琶をこと

ばに。御ぞの袖をうちかけてとらへさせ給へるめでたき　傍こと

に。そばより御ひたひのほどまろくけざやかにて。わづか　あざやかなること　かたはらより

に見えさせ給へるぱ。たとふべきかたなくめでたし。ちか　ほのかに見え給へること　清少のほ

とりちかき女房にこと

くゐ給へる人にさしよりて。清少のいふ詞こと琵琶行の詞こかしら書にあり　なかばかくしたりけんもえ

かうばあらざりけんかし。倡家のむすめなればこれは后宮なればいふこと　それはたゞ人にこそありけめ

といふをきゝて。彼女房は琵琶行をきゝしらざること　こゝちもなきを。わりなくわけいりてけ

らずして申せしなるべし　中宮に直に申すにはあ

いすれば。わらばせ給ひて。我ぱまりたりやとなんおほせ

彼取次の人こ清少に傳ること

らるゝとつたふるもをかし」　是より別の物かたりこと　日向

御めのとのたゆふの。げふひうがへくだるに。たまばする

あふきどものなかに。かたつかたには日いと花やかにさ　誰としらず

しいでゝたび人のあるところ。井手の中將のたち館こと　などい

ふさまいとをかしうかきて。いまかたつかたには京のか

た雨いみしうふりたるに。ながめたる人などかきたるに

后宮の御うたこと

あかねさす日にむかひても思ひいでよ

みやこハはれぬながめすらんと

哥のやうにもあらず后宮の自筆にあらはせしこと　さやうの君をこと

ことばに御手づからかゝせ給ひしあはれこき。さるきみ　此乳母の日向へゆくをあやしみとがめたる詞こと

をおきたてまつりてとぼくこそえいくまじけれ」

鬼笛。又號二青葉一。歟。猶江談委

ぎやうでんの一のたな

よき樂器をほむる詞に。頭中將のいへるなるべし。源氏若菜上云。此御琴は宜陽殿の御物にて。代々に第一の名ありし御琴云々。細流云。宜陽殿。昔は樂器書籍等をおかるゝ所こ。河海云。西宮抄云。納殿累代御物在二宜陽殿一。恒例御物納二藏人所一

なかばかくしたりけんも　琵琶行云。千呼万喚始出來。猶抱二琵琶一半遮レ面云々。是かの倡家のむすめのありさまこ。それをおもひよせていへるなるべし

御めのとの大輔

后宮の御乳母なるべし。道隆公隱れ玉ひ。伊周公左遷などの比。心みにかきめのとにて見捨まゐらするにや

[增]濱按。大鏡云。今はたゞ兵部大輔周家の君ばかりほのめき給ふこ。小一條院の御宮達の御乳母の夫にて院の格勤してさふらひ給ふいとかしこし。又井手の少將とありし君は。出家とか云々

萬歲抄云。今はめのとの大輔といふは中宮の御兄弟周家のつまこ。系圖前に見ゆ

たまはする扇ども

むかしは錢別に扇をつかはせしにや。うぢの隣家つくしへ下向の錢に扇をつかはして枇杷の皇太后宮

「涼しさはいきの松原まさるともそふる扇の風な忘れそ」新古今にあり。源氏夕顏卷にも。空蟬が伊豫へ下るに。源氏君より扇をつかはされし事あり

あかれさす日に哥

赤根さすとは。日出るに赤き光さすをいふ

之。日に向てもといふに。日向をよみ給へり。ながめは長雨をそへて之。日向に行ても我が部にて思ひ晴すかたなく詠る事を思ひ出よと之。詞花集入　[訂]弘云。あかれさすの註は非之。あかれは赤照之。さすはたつ之。赤く照り立つの義にて。日にかゝる冠辭となれる之

れたきもの
[增]濵云。れたきはくやしき意之
人のいひたる返しも
人の哥いひおこせしに返哥する事之
おもひなほしたる
かやうによむべきものをと思ひ出たる之

みなみのゐんに　南院は四條の北壬生の西に有。是忠親王の家なりし。又六條の北。烏丸の西にもあり。小一條院の御領と拾芥にあり。此草紙にいへるは中關白道隆公の家ときこゆ。奥に道隆公の積善寺にて。一切經供養の所にも出づ
ふれあそびをし　女房達立そひあそぶことなり
[增]今の俗にも女兒の遊戯にする鬼事などの類なるべし
時かはさず　不二時替一時をかへず之。時をうつさずのこゝろ之
ひらぬき
[訂]濵云。平袷は平絹の誤歟。雅亮抄五節所條。平絹のかざみうへのはかまうちきぬ。又つれのこと之とあり。又同抄平絹のうら

ねたきもの

哥の事之

これよりやるも。人のいひたる返しも。かきてやりつるのち。もじてにをはなどもじひとつふたつなどおもひなほしたる。急ける心之とみの物ぬもとより之ふに。ぬひはてつと思ひて。ぱりをひきぬきたれば。ぱやうしりをむすぱ。ぎりけり。又かへさまにぬひたるもいとねたし」

是より向へさまにぬひたる物かたり之

みなみのゐんに　おぱします比。西對之にしのたいに殿のおぱしさうゝしければ。ふれあそびをし。わたどのにあつまりるなどしてあるに。これ只今とみのものゝ。誰もたれもあつまりて。時かぱさずぬひてまゐらせよとて。ひらぬきの御ぞを給ぱせたれば。みなみおもてにあつまりゐて。御ぞ

后宮よりのおほせ之急に御用の衣裳ぞと之

定子之

平縫ヒラヌキ之

片身

かたみづゝ。誰かとくぬひ出るといどみつゝ。ちかくもむ

そうそくこのさだめに數あるつれのこと之とあり
眞云。誤に非ず。平縫は平絹とは異之。平縫はぬき糸をこめて織りたる絹のこと之
ちかくもむかぱず
女房めゝにはなれぬて縫さま之。人に見合させまじきのためと之
命婦のめのと　后宮の御かたの人なるべし
御せあぱせん　衣の背を合せんとするなり

あやなどならば。こそうちを見ざらんぬひたがへの人のげになさめ
綾は紋ありうちおもても見分やすき物なれば。ぬひたがへたる人のあやまりにてぬひなほすべき事と之
きゝもいれねば
ぬひなほせといふをきゝもいれぬ命婦のめのとのさま之

源少納言。新中納言
此兩人系圖等考がたし　[增]女房の名之
かほ見やりて　兩人のいひほさるゝ顔を清少の見やると之。下心命婦をあざわらふ心あり

人をおもふとおほせられしか
[訂]原本には。人をおもふとしらんとおほせられしか」とあり。今万歳抄に從ふ。濵云。おほせられしかの上にこその二字おちしなるべし

かぱず。ぬふさまもいと物ぐるぱし。命婦のめのといとくぬひぱてゝうちおきつる。ぬひたがへたると。そむきざまなるを見つけず。とぢめもしあへず。はやくさしおきしと之どひおきてたちぬるに。御せあぱせんとすれば。ぱやうたがひにけり。わらひのゝしりてこれぬひなぱせといふを。命婦のめのと陳していへる詞之たれがあしう。ぬひたりとしりてかなぱさん。あやなどならぱこそ。うらを見ざらんぬひたがへの人のげになぱさめ。むもんの御ぞなり。なにをしるしにてか。なぱす人たれかあらん。命婦まけす口にいふ詞之たゞまだぬひ給ぱざらん人になぱさせよとて。命婦がさまと之きゝもいれねば。さいひてあらんやとて。源少納言。新中納言など。命婦があやまりをさまゝくいひなぱしあいさつし給ふと之いひなぱし給ひしかぱ見やりてゐたりしこそをかしかりしか。今夜參内あるべき其御料のぬひ物と之これぱよさりのぱらせ給ぱんとて。とくぬひたらん人をおもふとおぱせられしか
是より又ねたきもの之
みすまじき人に。ぱかへやりたる文とりたがへてもてゆ

げにあやまちてけりとはいはで
使のあやまりてこと所へもてゆきて。我あやまりたるとはいはで。清少のそこへもてゆけといひ付給ひしと口かたくあちがふさまゝ
ながひつもたる物
萩などほりうゑんとてなるべし。爲仲朝臣。陸奥の任果て上洛の時。宮城野の萩を長櫃十二合にいれて入京の事。長明無名抄に有り

いみしくせいすれど
清少などやうの女ども有ていみしくせいしいへどもおぢさるさまゝ

なめげに物いひ
受領の身のいきほひにおごりて無禮なる心ゝ

さりとて我をばいかゞ
さやうに無禮にいふとも我を何とせんとおごりたるけしきゝ。清少は后宮の御方の人にて。受領をいやしむる事多論ゝ。されども受領はいきほひあればゝ
おひてゆけど句　文をとりかへさまほしくて追て行けども。簾の外まではえ出ねば。すのもとに立さまりて。飛も出まほしくて見ぬたるさまゝ
すゞろなる事云々
[訂]弘云。是より以下段落に至る數行は。猥褻がましければ。學校などにては省くべしひて引よすれど

きたるねたし。げにあやまちてけりとはいはで。口かたうあらがひたる。人めをだにおもはずハはしりもうちつべし。おもしろき萩すゝきなどをうゑて見るほどに。ながびつもたる物働すきなどひきさげてたゞほりにほりていぬる提ゝとそわひしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをり制すべき男などのある折はさやうにほりてもえはさもせぬものを。いみしうせいすれど。たゞすこしなどいひていぬるいとふがひなくねたし。ずりやうなどのきて。受領國司の事ゝなめげに物いひ。さりとて我をばいかゞと思ひたるけばひにいひ出たるいとねたげ也。見すまじき人の。文をひきたゞひとりて。庭におりて見たてるいとわびしうねたく。おひてとりて。立ゝ句ゆけど。すのもとにとまりて見るこそ。とびもいでぬべきとゝちすれ」。すざる事なき事を女のはらだちてゝすゞろなる事はらだちて。女のさまゝおなじ所にもねず。身よろき出るゝみじくり出るを。ゑひてひきよすれど。わりなく心ことぬゝ女の同心せなればあまりになりて。人もさはよかなりとゑじて。ふすまなかい

[訂]原本忍て引よすれどとある也。夫の女を引よすれどゝ。今イ本に從ひつ
人もさはよかなりとえゝ下て
あまり女の心こはければ。男もはらだちて。さあらばよし〳〵と怨下うらみて衾など引かづきてふしたるゝ
あやにくがりて　同所ながらに別々にうむきぬて。あやにくに寒くなりたればゝ
さすがにおきぬらんあやしくて　人は皆れたるに女一人おきぬたらんもさすがにあやしければ。其まゝふしたるさまゝ。ぬらんは居たらんゝ「春たてば花とや見らんも見たるらんの心ゝ。其詞と同下
やをらまろびより　寒く物おそろしさに念下わびてやがてそろりと男の方へころびよりてゝ
なほこそこはがり給はめなど
此上にも猶心こはくし給はんよと女をこらしめいふゝ
かたはらいたき　はづかしくをかしく氣味
あしき心ゝ
[增]瀧云。旁痛の義ゝ。今俗にいふ氣のどくによくかなへり
せいせできく　客あるにないひそともいはでゝ。客の前にてはしかられればゝ
きゝぬたるをもしらで　其ぬしのきゝぬるをしらでうはさを隆ごとするゝ
旅たちたる所ちかき所
旅宿又は我がきく近所にて。下人のおのが同志男女ざれかはすゝ

ご身にまさひたるゝ
くゝみてふしぬるのち。いとさむきをりなどに。只ひとへ女のさまゝ漸さむくなりしさまなるべし
ぎぬばかりにて。あやにくがりて。句大かたみな人もねたる下々などはれたるゝ
にさすがにおきぬらんあやしくて。夜のふくるまゝにねたくおきてぞいぬべかりける。など思ひふしたるに。おく女のかたより忍びきたる人なるべし
にもとにも物うちなりなどしておそろしければ。やをら外ゝ物の音しておそろしきゝ
女のさまゝ
まろびよりて。きぬひきあぐるに。そらねしたるこそいと男のさまゝ
ねたけれ。なほこそことばがり給はめなどうちいひたる男の詞
所まで省くべしよ」

○かたはらいたきもの

まらうとなどにあひて物いふに。おくのかたにうちとけでゝ人のいふを。せいせできくこゝちぢ。おもふ人のいたくゑひておなじ事したる。きゝゐたるをもしらで人のうへいひたる。それは何ほどのはづかりもあるまじき心なりばかりならぬつかひ人なれど。かたはらいたし。旅だちたる所ちかき所などにて。げすどものぞ

おのれが心ろにかなしとおもふ　いとほしく思ふ心なり。伊勢物語。ひとつごにさへありければいとかなしうし給けり云々

ことによしともおぼえぬわがうた　きく人はよしともおぼえぬおのが哥を乙。又の義さのみよしともおぼえぬ清少のうたを。友達のあいさつに。人のほめしなど人にかたる乙。但初の義可然なり

まだれもひきさゝのへぬ琴　よくしらべさゝのへぬ事乙

心ひとつをやりて

人もゆるさぬ不堪の所作を。おのが心ひとつにまんゝて彈する乙

いとゞしう　前々のかたはらいたき物の品々をうけて。是らさへあるに。ましてなどいふこゝろ乙

さしぐしみがくほど

白氏文集樂府云。石上磨三玉簪。玉簪欲レ成中央折

おほのか

[増]弘云。おほどかといふに同ト

とこころせく久しくなどや

車などのゆたかなる物はくつがへるも所狹れかはしたる。にくげなるちごをおのれがこゝちにかなしとおもふまゝに。うつくしみあそばし。これがこゝろのまねにて。いひける事などかたりたる。さえある人のまへにてざえなき人の。物おぼえがほに人の名などいひたる。ことによしともおぼえぬ我うたを人にかたりきかせて。人のほめし事などいふもかたはらいたし。ひとのおきて物がたりなどするかたはらに。あさましううちとけてねたる人。まだねもひきとゝのへぬ琴を。心一つやりてさやうのかたしりつる人のまへにてひく。いとゞしう。すまぬむとのさるべき所にてしうとに逢たる」

琴の調子よく知たる人乙

にかよはぬむこ乙

あさましきもの

さしぐしみがくほどに。物にさへて折たる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物はところせく久しくなどやあらんとこそおもひしか。只夢の心ちして淺ましうあ

くものにつかへなどして。しつかにほどへてこそたふれめと思むしに急にたふれて。夢のやうにあさましと乙

からすのいとちかくかうと鳴

纒詞花集二十戯咲部　大僧正覺忠

「逢ことはかたおさりする山がらす今はかうとぞれはなかれける

のり弓　河海抄云。賭射。清和天皇の貞觀二年正月十八日始レ之。賭弓は天子弓場殿に幸して弓を御覽ずる乙。仲春の月弓を見る事禮記より出たり。四府左右近衛左右兵衛の舍人射レ之左右の大將射手の奏をとる。事果て饗を給ふ乙。近衛の管領なる故乙。猶江次第委。雲圖抄に圖あり

くちをしき

[増]弘云。今俗にいふ殘念の意によくかなへり

せちゑ　正月の三節會。十一月豐明の節會など乙

佛名　前註四の卷にあり

御物いみにあたりたる

御物忌には。四方拜などの外は主上出御なければ乙。禁秘抄云。御物忌之時總不レ出二御他殿舍中一。諸事於二簾中一有レ之。或出二御廣

やなし。人のためにはづかしき事。つゝしみもなく乙　見にてもおとなにても乙

となもいひたる。かならずきなんとおもふ人をまちあかして。あかつきがたにたゞいさゝかわすれてねいりたるに。からすのいとちかくかうとなくにうち見あげたれば重目うちて人に筒をさしてひるになりたるいとあさましし。てうばみにどうとられたれし乙

る。むげにしらず見ずきかぬ事を人のさしむかひてあら無實をしひていひおほする乙

がはすべくもなくいひたる。ものうちこぼしたるもあさましし。のり弓に賭弓　正月十八日乙　ふるひ〳〵射たる乙わなくわなゝくひさしうありてはづしたる矢の。もてはなれてことかたへ行たる。」

くちをしきもの

せちゑ。佛名に雪ふらで雨のかきくらしふりたる。せちゑ其外可然義式の折乙

さるべきをりの御物いみにあたりたる。いとなみいつしらんとまちまうくる心乙

かとおもひたる事。寵愛する女乙

いみしうする人の子うまでとしごろぐしたる。音樂乙　あそびを

地誌栞朝倉文庫藏

廂ニ不レ固之時例也。凡如ニ四方拜一者雖ニ御物忌ニ或出ニ御東庭一於ニ小朝拜一不ニ出御一。是臣房卿申。依レ敬ニ神明天道一也。然者如ニ御禊一多出ニ御廣廂一也。同記云元三御物忌如ニ女官後取等一參籠。他人外宿候ニ殿上一不レ參ニ御前一也下略

みやづかへ所などにおなじやうなる人
宮仕する所などにて位おとらぬ人なり

わびては　我がさまをあまり見せまほしきにうち詫てほの心ゑ

[增]弘云。小町が「わびぬれば身をうき草のねをたえてさそふ水あらばいなんとぞ思ふ」などいへるをも思ふべし。人の心もわびぬればさまゝになるものゑとの意を示せるゑ

すきゝしからんけすなどにても　物すきなる下衆などにても見せまほしきとゑ。下衆に見せんは本意ならねどさるべき人の見ざりしが口をしさにうち詫ていふ詞ゑ

五月の御さうじのほど

年三とて正五月には精進などする事ゑ。河海云。長齋經云。若有ニ善男女等一修ニ年三之齋戒一忽脫ニ諸難等一獲ニ殊勝福利一又曰天帝以ニ正月五月九月一巡ニ三向南列ニ註ニ記衆生作業ニ云々

ぬりごめの　稱名院云。塗籠は帳臺のやうにしておく所ゑ。文庫などのやうなる躰ゑ。

もし見すべき事もあるに。必きなんと思ひてよびにやりつる人の。さはる事有てなどいひてこぬくちをし。男も女もみやづかへ所などに。おなじやうなる人もろともに寺へまうで。物へもゆくにこのもしうこぼれ出て。よういはへば。閑に優なるゑげしからず。あまり見ぐるしとも見つべくばあらぬに。さ人ゑるべき人の馬にても車にても行あひ。見ずなりぬるいと口をし。わびてはすきゝしからんげすなどにても。人にかたりつべからんにてもがなとおもふもけしからぬなめりかし」

是より清少の郭公聞に行し物語ゑ

五月の御さうじのほど。しきにおはしますに。ぬりごめの　細流云二間本尊など安置する所なるべし猶禁秘抄委

まへ。ふたまなる所をことにまつらひしたれば。れいざまめづらしとゑ

ならぬものをかし。ついたちより雨がちにてくもりくらす。つれ〳〵なるを。郭公の聲尋ありかばやといふをきゝて。清少に儘されてゑ

われも〳〵と出たつ。賀茂のおくになにがしとかや。七夕

榊卷にあり

なにがしとかや

[訂]萬歲抄には何ざきさかやとあり。萬に云。加茂のおくに鵲川といふ所有にや。古歌に「鵲の川風たちぬ七夕のもみちとばかり波やかくらん」

にくき名ぞきこえし

かさゝぎの橋などやさしき名にはあらでにくき名の橋ありしとゑ

北のぢん　拾芥云。縫殿陣朔平門云ニ北陣一

さみだれはとがめなき物ぞ

よのつねは乘車の法度あれども五月の雨中にはとがめなしとゑ。延喜式云。凡乘車出ニ入宮城門一者妃以下大臣嫡妻已上限ニ宮外一四位已下及內侍者聽レ出ニ入土門一但不レ得レ至ニ陣下一云々。この式を見れば北の陣より乘車つねはゆるさゞるなるべし

うまばといふ所

河海云。左近馬場は一條西洞院。右近馬場は一條大宮也

てつがひにてま弓いるゑ

花鳥餘情云。手結は右近の眞手結也。五月五日にあたれり。又云てつがひは馬弓の時二人づゝつがひて射る事哉。但未レ考レ之云々。猶伊勢物語。ひおりの註諸抄に委。袖中抄云。俊賴朝臣法性寺入道殿にて。五月五日の心を詠るに「永き根も花の秋にかなる也けふや眞弓のひおりなるらん」

右近の中將みなつき給へり

花鳥云。乙殿屋にて左右近の馬場にあり。五月の騎射の時中少將着座す云々

馬のかたきたるさうト

のわたるぱしにぱあらで。にくき名ぞきこえし。そのわたりになん日ごとに郭公なくと人のいへば。郭公にはあらで蜩にこそあれとこたふる人も有しとゑ

りといらふる人もあり。そこへとて。五日のあした。みやづ后宮職の太夫以下車を仰付るゑ

かさ車のことといひて。北のぢんより。大內裏の朔平門ゑ　女房の乘車五月雨にはとがめなしとゑ

さみだれはとがめなき物ぞとて。さしよせて四人ばかりぞのりてゆく。うらや車今一してゑ　后宮の御ゆ

ましがりていまし一つして　我らもゆかまほしきとゑ

おなじくぱなどいへば。いなとるしなきにや　清少のさまゑ

おぼせらるればきゝもいれず。なさけなきさまにて行に。

馬場

うまばといふ所にて。人おぼくさわく。なにごとするぞと車副などのこたへし詞ゑ

とへば。てつがひにてまゆみいるなり。しばし御らんじて

おぱしませとてくるまとゞめたり。右近の中將みなつき左近にや不審　皆ゑ　乙殿屋に

給へるといへば。中將にや

へば。ゆかしからぬことぞ。ぱやくすぎよとて。ゆきもてゆけば。道もまつりのころおもひ出られてをかし。かういふ明順にや高階成忠の男。后宮定子の御母高內侍の兄ゑ

所にぱあきのぶの朝臣のいへあり。そこもやがて見んと

禁中の下侍。鑾盤所などに馬形の障子あり。禁秘抄に馬形號二波爾馬一也とある是也。かやうの事をなぞらへたる障子なるべし

あじろ屏風

椎本卷に。山里びたるあゝろ屏風と有。河海云。普通の網代にて張たる屏風と。昔は山荘などの古めかしき調度には定る事と。漆骨片面を張て細組にて閉合せたる物と遼屏風といふと

はしちかくあさはかなれど　端近く淺くはかなき住居なるべし。イ本ニちうめきてはしぢかなれどとは廊などのやうにて。奥ふかからねど面白き家居と

いねといふ物　清少などへ馳走に去年の稻取出てこがせて見すると。源氏の須磨の卷に三月ばかりに馬に稻を飼し事あり。古は秋の稻を其まゝ置しとみゆ

[増]弘云。和名抄織機部に反轉久流閉枳とある是歟。又田舍の俗に稻をこきて後叛をうつ農具にくるりぎと云ものあり

からみにあるやうなる　唐繪などに書たるごとくうるはしき懸盤なるべし

ひなびたり　田舍ものめきたる心と。憶してくはざるをいさむる詞と

いひて。車よせておりぬ。田舍めきたると　省略したると

たるさうじあじろびやうぶ。三稜草簾と　其製可尋之

らにむかしの事をうつしいでたり。屋のさまもはかなだとめきたると

ちて。イニらうめきてはしちかなれどる心と

かましと　思ふばかりになきあひたるほどゝぎすの聲を。

口をしう　后宮にきかせまゐらせぬ事と彼うらやましがりし人々にもきかせぬをおもふと

御前にきこしめさず。さばかりしたひつる人々

にもなどおもふ。田舍めきし所にしたがひてはと

とて。いねといふものおほくとりいでゝ。わかき女どもの　[訂]万二下女ども活本ニげ　將の字

きたなげならぬ。其わたりの家のむすめをんなどひき　綿糸など繰引かせて見する

すどもトアリ

ゐてきて。五六人してこかせ。見もさらぬくるべきものふ　いつたりむたり

たりしてひかせて。うたうたはせなどするをめづらしく　なるべし

てわらふに。郭公の哥よまんなどしつるわすれぬべし。か　前に催し郭公の

らゑにあるやうなるかけばんなどして物くはせたるを。　歳を取おろしまかなふさまと

見いるゝ人なければ。家あるじ。いとわろくひなびたり。か　誰もくはざると　あきのふの詞と

あるもなどせめ出して

ある物を何にても出せとせめ出てもこそくひ給はめと。イなをもとは猶も出せと。

可然か

とりはやし

とりもてはやすと。馳走するさまなるべし

つきなみてはあらん

着並也。女官などの鑾盤につきならびてくふやうにはいかでかあらんと。行儀うるはしくはえくふまじきと。恥たる心にやさばれみちにても

さもあらばあれ。歸る道すがらもよむべしと

うのはながされ

卯花重。おもて白くうら青き夏の衣と

こゝまだし〳〵ささしあつむ　こゝにまだ指たらず〳〵と卯花をひしとさしたると

ゝる所にきぬる人は。あしくしてとはハ助字とイなを尤可然かようせずはあるもなどせめいだし

てこそまゐるべけれ。無下にかやうにおくしてはこの部人とは見えぬ心と

ひて。とりはやし。此下わらびゐてづからつみつるなどい　清少の詞と　着並と

へば。いかで女官などのやうにつきなみてはあらんなど　歳を取おろしまかなふさまと

いへば。とりおろして。れいのはひぶしにならはせ給へる　遣臥と身を自由にありならぶ心と

おまへたちなればとて。とりおろしまかなひさわぐほど

に。雨ふりぬべしといへばいそぎて車にのるに。さてこの　車ぞひなどのおどろかす詞と　前に催し郭公の

うたはこゝにてこそよまめといへば。さばれみちにても　此所にてよみてこそ矩模ならめと

などいひて。卯花いみしくさきたるを折つゝ。くるまのす　かたはらと　茸指と

だれそばなどに。ながき枝をふきさしたれば。たゝうのは

ながさねをこゝにかけたるやうにぞ見えける。ともなる　車の網代なり　突擊

をのこどもゝいみしうわらひつゝ。あじろをさへつきうち　此うの花車を見せた

がちつゝ。こゝまだしく〳〵とさしあつむなり。人もあばな　心もなげなる物どもと

んとおもふに。さらにあやしき法師。あやしのいふかひな　いやしげなると

たまさかに見ゆるいと口をし
前にさるべき人の馬にてもくるまにても行あひ見ずなりぬるいとくちをしと。此段の題の下にていひし首尾なるべし
此車のさまをだに人に
哥よみて人に語傳へさせむと思ひしに。よまざれば。此車の卯花の風流なだにと乏。前に人にかたりつべからんにてもがなと思ふもけしからぬなめりといひし首尾なるべし
一條殿のもと　拾芥云。一條院。一條南大宮東二町。爲三法住寺大臣爲光家一この爲光を恒德公と云
侍従殿　勘物云。公信。恒德公六男。母謙德公女。長德元年九月十九日侍従
つちみかどざまへ
土御門の方へ乏。正親町の南。鷹司の北にて。東西の小路乏。四位以下内侍など乘車して出入する門也。延喜式前註
しばく〳〵と
[訂]弘云。原本旁註に屢乏とあるは非乏。万歳抄には　しばし〳〵　とあり。是さすべし。さて按るにしば〳〵はしば〳〵といふべきを餘りに急ぐ故にしば〳〵とはいへる乏。其さま見るが如くいと面白し
ざうしきものはかで
[訂]万歳抄并ニイ本には。「ざうしき三人ばかりものはかで」とあり。是もいと委しくて味ひあり
あへぎまどひて
喘息迷也。いきもつきあへず急ぎ來給ふ乏
猶おりて見よ　我かく笑ふゆゑな。清少も下りて見よと乏

可然人には行逢ざる乏
き物のみたまさかに見ゆる。行あふ心乏いとくちをし。職の御曹司近乏ちかうきぬれば。此けふのありさまを人にしられずしてはやまじと乏さりともいとかうてやまんやは。此車のさまをだに人にかたらせてこそやまめとて。一恒德公の家乏條殿のもとにとゞめて。
侍るといはせたる。清少の詞乏公信乏侍従殿やおはします。郭公のこゑきゝていまなんかへりなんのたまへつかひ。清少の使が侍従どのゝ返事を云乏たゞ今まゐる。我君〳〵まち給へとの心乏あがきみ〳〵とつりつといふに。殿上などなるべし間擴まつべきにもあらずとて。はしらせて。つちみかどざまへやらするに。いつのまにかさうぞくしつらん。侍従殿の事乏おびば道のまゝにゆひて。しば〳〵とおひくる。万ニしばし〳〵急に追來る乏供乏とも雜色に。侍ひざうしき。ものはかではしるめる。とくやれどいと三人ばかり万イゞいそがしくて。つちみかどにきつきぬるにぞ。侍従どのゝあへぎまどひておはして。まづ此くるまのさまをいみしくわらひ給ふ。侍従の詞乏物くるほしきさまとの心乏うつゝの人ののりたるとなんさらに見えぬ。猶おりて見よなどわらひ給へば。侍従の供の人々乏ともなりつる人どもゝ興じわ

いまおまへに御覽せさせて
清少の哥はよまざりし事をかくしあざむきていへる乏。先いま后宮に見せ申てこそ侍従殿にも見すべけれと乏
こと御門のやうにあらで
他の御門には屋根有に此土御門にしも屋根もなく作りけんと乏。けふ雨降りすべきやうもなくてにくきさなるべし
こなたざまはたゝおくれト
こゝへ追來るは。追つかんと思ふばかりにて。人目も思はず走りきたると乏
あういかんこそいと冷しけれ
あうは噫と嘆下たる詞乏。すごゝと歸りいなむこそ無興ならめと乏
ゑぼうしにてはいかゝ
侍臣の參内は。衣冠か。義式の折は束帶なるべし。今侍従どのは直衣烏帽子なり下は指貫乏
かさなきをのこどもは
清少の供なる笠もたぬ男ども。雨をいとひて車を急きて土御門を引いれしと乏
うらみつる人々　前にいま一つしておなとくはなどうらやみたる女房達乏
ゑトこゝうがりながら
清少の引ぐしゆかざりしを怨下ながら乏

侍従のこひ給ふこうたはいかゞよみ給へるぞと乏らふ。哥はいかにか。それきかんとのたまへば。清少のこたへ乏いまおまへに御覽ぜさせてこそはなどいふほどに。雨まことにふりぬ。侍従の詞乏などかとと御門のやうにあらで。此つちみかどしも。うへもなくつくりそめけんとけふこそいとにくけれなどいひて。是も侍従の詞乏いかで歸らんずらん。こなたざまは。たゞおくれじと思ひつるに。人めもしらずはしられつるを。あういかんこそいとすさまじけれとのたまへば。清少の詞いざおはせよかし參内あれどいふ。侍従の詞乏それもゑぼうしにてはいかでか。句清少の詞乏冠袍なさとりになどいふに。まめやかにふれば。かさなきをのこどもたゞまことに雨いたくふる乏ひきに引いれつ。一侍従の家より乏條より清少に別かたげなるさま乏かさをもてきたるをさゝせて。うち見かへりうち見かへり。此たびはゆる〳〵と物うげ后宮の御前へ清少にて卯花はかりをとりおはするもをかし。さてまゐりたのかへりまゐりし乏怨乏れば。ありさまなどとはせ給ふ。うらみつる人々ゑじ心うがりながら。藤侍従一條のおほぢはしりつるほど語るに

かう〳〵とけいすれば
かやう〳〵の首尾にて哥はよみ侍らずと申
あぐるこ

其きゝつらん所にてふとこそ
哥よまば當座こそよかるべけれとこ。其郭
公きゝたる所にてこそよむべけれとこ
あまりぎしき事ざめつらん
儀式こ。あまり儀式めきてよまんとするに
よりて哥のおそければ興さめつらんとこ

ありつるうの花に
前に卯花ばかりをとりおはするとありし首
尾こ

ほとゝきすなくれ哥
清少の郭公尋ねゆくとこく聞たらば。我心
なぞへ事つけてやるべき物をとこ

宰相のきみ
后宮の女房こ。おくに北野の三位のむすめ
とあり。輔正卿の女にや
そこに　足下なり。猶清少に返し書給へと
こ

ぞ。みなわらひぬる。哥は何とせしたると后宮の問給ふこ
うとけいすれば。后宮の御詞こ
いかでか　をかしき事なくて　あらん。其きゝつらん所にて
ふとこそよまゝしか。あまりぎしき事ざめつらんぞあや
しきや。こゝにてもよめ。いふかひなしなどのたまはすれ
ば。清少の心こ　げにと思ふにいとわびしきを。哥の談合こかの諸共にゆきし人々になる
どに。藤侍從の。ありつるうの　花につけて卯花のうすや
うに　侍從哥

ほとゝきすなくねたつねに君ゆくと
きかばこゝろをそへもまてまし

使の返哥をまたんとこ
かへしまつらんなどつぼねへすゞりとりにやれば。后宮の御
詞なり
とれしてとくいへとて。御すゞりのふたにかみなどいれ
てたまはせたれば。清少の詞こ是も賀茂へ行し人なればこ　宰相のきみかき給へといふを。宰相ことばこ　なほそ
こになどいふほどに。かきくらし雨ふりて。神もおとろ

しさみをぞみかうしにまゐりわたし
格子のうへにしさみをおろしたるこ
和名云。蔀。周禮註云。音部字亦作レ蔀覆レ曖
障レ光者也
神の事申にまゐり
雷の御見まひに參給へるこ
人はた。さしてえたらん人こそしらめとて
清少ならぬ人は。又其哥を得たる清少など
こそ返哥の事はしるべけれ。こなたはしら
すとて返哥もせざりしこ
うとて
[訂]原本は上のともとを此所にそへてどうと
てとよませて。註に動こ動轉しての心ことあり
如盧子云。春曙抄の註非こ。とは上につけ
て見るべし。すくせなき日なりと。句こ。
うとてこ。うじは倦となるべし
弘云。此説よろし然れどもうとは慍の字な
るべし。竹取物語にうんとて皆かへり給へ
りとあるうんとと同意なるべし
いまはいかでさなんいきたりしとだに人にき
かせと
今はさやうに郭公きゝにゆきしといふ事を
だに沙汰せじとこ
などそれいきたりし人どものいはざらん
今てもいかでか賀茂へ行し人々の哥よま
であらん。讀べき事とこ
すさまとかるべき事かは
かやうに時過すべき事かは。當座によまで
無念の由をの給へば。いまおくれてよむべ

おそろしきこ
〳〵しうなりたれば。物もおぼえず。たゞ御格子をおろすなるべし おろしにおろす。
しきの御ぞうしは。しとみをぞみかうしにまゐりわたし
まどひしほどに。うたのかへりことともわすれぬ。いとひさ
しく鳴てすこしやむほどはくらくなりぬ。たゝ今なほ其
御返事奉らんとてとりかゝるほどに。人々上達部など神
の事申にまゐり給ひつれば。西おもてに出てものなどき
こゆるほどにまぎれぬ。人はたさしてえたらん人こそし
らめとてやみぬ。大かた此事にすくせなき日なりと。うじ
ていまはいかでさなんいきたりしとだに人にきかせじ。
などぞわらふを。いまもなどそれいきたりし人どものい
はざらん。されどもさせじとおもふにこそあらめと物し
興に思召こ　げにおぼしめしたるもいとをかし。されどいまはすさま
じくなりにて侍なりと申す。すさまじかるべき事かはな
どのたまはせしかばやみにき。二日ばかりありて。その日

御格子をおろすなるべし
返事のこと
將こ
清少も人々あへしらふこ
哥に縁なき日こ賀茂にてもよまざればこ
后宮の御心なるべし
哥よむまとと思ふにこそこ
清少の詞こ
后宮の無
時過たる心こ
后宮御詞こさやうに時過すべき事ならとこ
當座にこそよまばよみてめこの心こ
賀茂へゆき

きにもあらでやみたるとゝ

おもひ出ることのさまよ

郭公の哥などの事はおもひも出すして。只くひたりし物を思ひ出しよとゝ

したわらびこそ　清少や密相などの心をおしはかりて后宮の御たばふれゝ

うけばりたりや

孟津抄に。諾。承諾。はゞかる事もなきをいふ也云々。清少のあまりはゞかりなく廉をしたふ事をたはふれての給ふゝ

かけつらん　いひつらんといふとおなし詞ゝ。大和物語に「見きとないひそ人のきかくに」とある哥を。源氏帚木卷には。見きとなかけそとかけり。同し心なればなるべし

[訂]ものにかくるゝ。かけつらんは。心ニカケタデアラウゝ

わらはせ給ふもはづかしながら何かもはづかしながら何かといふ詞なくて。わらはせ給ふ此うたすべてと有　イ本

いかでもゝのかずしらず

卅一字のかずもしらず。時節たがふ事もしらぬやうに。一向に此道しらぬにはあられどもとの心ゝ

うたよむといはれしすゑゝ

清少は彼深養父が曾孫元輔がむすめなれば

し事ゝの事などいひ出るに。宰相のきみ。いかにぞ手づから賀茂の家あるトの云をり

たる事ゝたるといひし下わらびはとの給ふをきかせ給ふて。后宮の御おもひ出ることのさまよとわらはせ給て。紙のちりたるに

詞ゝ

后宮

したわらびこそこひしかりけれ

とかゝせ給ひて。もといへと仰らるゝもをかし

清少納言　上句を申せとゝ　おはせ

ほとゝぎすたつねて聞し聲よりも

とかきてまゐらせれば。いみしうゝけばりたりや。かう　后宮の御詞ゝ　是ほど郭公を思ひすてし事よとゝ

までだにいかで郭公のことをかけつらんとわらはせたまふもはづかしながら。何か。このうたすべてよみ侍らじと　清少の詞ゝ

なんおもひ侍る物を。ものゝをりなど人のよみ侍るにも。

よめなどおほせらるれば。えさふらふまじき心ちなんまた　其座には侍らじとおもふとゝ

侍る。いかでかは。もじのかずしらず。春は冬の哥をよみ。秋は春のをよみ。梅のをりは菊などをよむ事は侍らん。されど哥よむといはれ侍しすゑずゑは。すこし人にまさりて。

なき人のためいとほしく

元輔さしもの哥仙なりしに。其むすめとしてことなる事なくば。父のおもてふせなればゝ

かうとんせさせ給ひて

庚申を守る事ゝ。庚申の夜れれば三尸として惡き虫人の身中に入て瘧際の病をなすゝ。其故に今宵れざる事古今醫統にもあり。拾芥云。庚申夜誦。彭侯子彭常子命兒子。悉入幽冥之中。去離我身。袋双紙云。庚申せで寢誦文「しや虫はいれや去りれや我床なれたれどれぬぞれゝどれたるぞ」

さる事うけ給はりて

前に后宮のさらば心にまかす。我はよめともいはゝとのたまひし事ゝ。さやうの御詞承りてとゝ

其をりの哥はこれ　此人の哥こそよけれとゝ　こそありけれ。末々さはいへゝどそれが子なれはなどいはれたらんこそかひあるこゝちし侍らめ。露てひひてたる事もなくてとゝ清少の卑下ゝ　さしとりわきたるかたもなくて。さすがに哥がましく我はと　最初也人よりさきにさし出たる心ゝ　元輔おもゝへるさまに。さいそによみ出侍らんなん。なき人のためおもてぶせとゝ

めいとはしく侍るなどまめやかにけいすれば。わらはせ　后宮ゝ

給ひて。さらばたゝ心にまかす。われはよめともいはじと　清少の詞ゝ

の給はすれば。いと心やすく成侍ぬ。今は哥の事思ひかけ

侍らじなどいひてある比。かうじんせさせ給て。内大臣殿　庚申ゝ　うちのおほいとの伊周公庚申の御用意ゝ

いみしう心まうけせさせ給へり。夜うち更るほどに題出

して。女はうに哥よませ給へば。みなけしきだちゆるがし　女房達哥よまんけしきに色めくゝ

出すに。宮の御まへに近くさふらひて物けいしなどこと　清少ゝ　清少のうたよまんともせぬゝ　内大臣伊周ゝ

事をのみいふを。おとゝ御らんじて。などか哥はよまでは　詞ゝ

なれゐたる。題とれとの給ふを。さる事承りて。うたよむ　清少の詞ゝうけたまはる　伊周公の詞ゝ格別なる事とゝ

まじくなりて侍れば。思ひかけ侍らず。ことやうなる事。ま

けぎようきゝもいれで
氣清也。いさゝかもうたよむべきけしきなく。潔白にさりあはさりしと

もとすけがのちと
清少は元輔がむすめとして今夜うたよまで
あらばいかゞとの心と

その人の後と
前になき人のためいとほしく侍るなどいへる所の心なり

是よりぞ出まうでこまし
つゝしむ事なくはよめとの仰なくとも此方
よりさし出て千首も讀侍んと

御かたゞ〳〵君達
后宮の御妹の御かたゞ〳〵。伊周公等の君達なるべし。イ本しきにおはします比八月十四日の月あかき夜などいふ事此段の上に

實に御ゆるしにやと后宮へ問給ふ詞と
ことにさる事やは侍る。などかはゆるさせ給。いとあるまじき事也。よしこと時はしらず。ことよひはよめなどせめさせ給へど。けぎようきゝもいれでさふらふに。こと人どもよみ出して。よしあしなどさだめらるゝほどに。いさゝか

是より清少に伊周の詞と
清少のありさまと
后宮より清少に

御文と
なる御文をかきてたまはせたり。あけて見れば

后宮の御うた
もとすけが後といはるゝきみしもや
ことよひのうたにはづれてはをる

とあるを見るに。をかしき事ぞたぐひなきや。いみしく笑へば。何事ぞ〳〵とおとゞもの給ふ

伊周公の問給ふと
清少御返しと
その人の後といはれぬ身なりせば
ことよひのうたはまづぞよまゝし

つゝしむ心と元輔の名をはしむ心なるべし
つゝむ事さふらはずば。千哥なりとも是よりぞ出まうで

后宮へ申上ると
よみ出しまゐり
來んと
ことしとけいしつ」

これより后宮の御前にて有し事共のものがたりと
御かたゞ〳〵君達うへ人など。御まへに人おほくさふらへば。ひさしの柱に

清少と
よりかゝりて。女房と物語してゐたるに。

后宮の清少にと
物をなげ給はせたる。あけて見れば。思ふべしやいなや。だい一ならずばいかゞとはせ給へり。御前にて物語などふ心を註釋する詞と
するついでにも。

清少日比いひし詞と
すべて人には一におもはれずば。更に何にかせん。只いみしうにくまれあしうせられてあらん。二三にてはしぬとも

第一の人にてあらんと
あらじ。一にてをあらんなどいへば。一乘の法なりと人々わらふ事のすちなめり。筆かみ給ばりたれば。九品蓮臺の中には下品といふともとかきてまるらせたれば。むげにおもひくんしにけり。いとわろし。いひそめつる事はさてこそあらめとのたまはすれば。人にたがひてこそと申。それがわろきぞかし。だい一の人に。又一にあもはれんとこそ思はめとおほせらるゝもいとをかし」

紙と清少に
名譽のこと
后宮の御詞
風也あまりおもひくつがれたる事と
清少詞
后宮の御詞と

有。然ども語かさなりてよろしからねば今不レ用也

[增]弘云。此所にイ本とあるは。萬歳抄の事なるべし。萬には此段の上に左の數句あり「しきにおはします比。八月十四日の月あかき夜。右近の内侍にびはひかせてはしちかくおはしまして。是かれ物いひわらひなどするに。ひさしのはしらによりかゝりて。ものもいはてさふらへば。などかうおとともせぬ。ものいへさう〳〵しきにとおほせらるれば。たゞ秋の月の心を見侍るとまうせば。さていひつべしとおほせらる」

思ふべしやいなや
后宮よりなげて給へりし物に書給へる詞と。清少我を思はんやとの戯と

だい一ならずばいかゞ
第一の人に清少をおもはずは。清少も相おもふまじくやとの心と

二三にては　第二第三に思はれては死ずと
もあるまじきと

一乘の法なりと
是方便品の文の心と。一乘の法とは。法華經の事也。最爲第一の經なれば。彼清少の第一に思はれん二三にてはあらじといふにつけて。人々なぞらへいひし事の筋を。今后宮の第一ならずは如何と仰らるゝ也。法華經方便品云。十方佛土中唯有二一乘法一無レ二亦無レ三除二佛方便說一但說二無上道一　頌詠の詞と。后宮の御惠みにかゝらば。たとひ下品にても滿足と也。極樂寺建立願文慶保胤「十方佛土之中以二西方一爲レ勝。九品蓮臺之間難二下品一聽レ足。極樂に生るゝに。其人々により て。上品上生に生れ。或は上品中生上品下生。或は中品上生など。すべて九品の淨土ある事觀無量壽經に委

いひそめつる事はさてこそ　始め第一に思はれんといふほどならば。後まで其心をたがへずこそあるべけれと之。下品といふともといへるをと
がめ給ふ御たはふれ之　人にしたがひてこそ　なみ〳〵の人にこそ第一に思はれんとも申さめ。其人によりて下品にても満足と之。后宮のいとも辱をいはんとて之

○中納言殿まゐらせ給ひて。御扇奉らせ給ふに。（是より別の事之隆家の事之　隆家のみづからの扇の骨之）たかいへと給ふ詞之）そいみしきほねをえて侍れ。それをばらせてまゐらせんとするをおほろけの紙ハばるまじければ。もとめ侍る也（大かたの心之　かくよき骨に大かたの紙は張まゐければ可然紙を尋ると之）と申給ふ。いかやうなるにか あるととひ聞えさせ給へば。（后宮の御詞之）すべていみしく侍る。更にまだ見ぬほねのさま也となん（隆家の詞之見事なるほねと之）人々申。まことにかばかりのは侍ざりつと。ととたかく申（かほどのほねはなしと之　言高く之高上の心之）給へば。さて扇のにはあらでくらげのなりときこゆれば。（清少の詞之　海月の骨ほまれなる心之）の事こそ。かたばらいたき物のうちに入つべけれど。人ごとなおとしそと侍ればいかゞはせん」（隆家の詞之此清少の戯言の面白きをうらやめる詞之　書落しそと之　毎之）

雨のうちばへふるころ。けふもふるに。御使にて式部のぜうのぶつねまゐりたり。例のしとねさし出したるを。つね（是亦別の秀句のものがたり之　中宮へ勅使にまゐりし之藏人なれば之　いつも勅使には褥を出さるれば之　信經憚りて褥にぬざる之）

より遠くおしやりてゐたれば。あれば誰がれうぞといへば。わらひて。かゝる雨にのぼり侍らば。あしがたつきて（清少の詞　料也信經をおかんための褥なるを誰がためぞと之　是より信經が詞之）いとふびんにきたなげになり侍りなんといへば。などせんぞくれうにこそはならめといふを。これば御まへにかしこうおほせらるゝにはあらず。のぶつねがあしがたの事を申さざらましかば。えのたまはざらましとて。返々いひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ほめかなとか（信經が詞之　清少をさしていふ　足跡之　清少の秀句　料也信經をおかんたを云へる詞之　清少にも信經がいはせし事ぞと之）

たばらいたく」（書のこしたる筆法之　前段も自讃の事此段もおなじく自賛なれば之　例の）

ばやうおほきさいの宮に。ゐぬたきといひて名たかきしもづかへなんありける。美濃守にてうせにける藤原の時から。藏人なりける時。下づかへどもある所に立よりて。（是亦別段之はやうは昔といふにおなじ　名は珍しくて形は左も見えぬと心之）

これや此高名のゐぬたき。などさも見えぬといひける。返事に。それはときかからもさも見ゆる名也。といひたりける（時柄が詞之是彼音にきこえしゐぬたきかと之　ゐぬたきが詞之　めつらしく見ゆると之）

なん。かたきにえりてもいかでかさる事はあらん。殿上人（敵也相手之　撰之）

せんぞくれう
氈褥料にや。順和名云。褥氈褥也。今案毛席也。俗猿の皮にて作ると云々中畧記
せんとよくを。せんぞくといひて。足のよごれし事をいふに付て。洗足料にこそならめと秀句に云之

くらげのなり　増賀上人の哥「みつわさす八十餘りの老の波海月のほねにあひにけるかな」

かたばらいたき物の内に
自賛めきたる事いふは此双紙の片腹痛き物の内に入て。こゝには書まゐけれど。人毎にな書落しそといへば。せんかたなくて書しと之

式部のぜうのぶつね
藤原信經は。中納言兼輔の曾孫。雅正の孫。陸奥守爲長の子也。勘物云。信經。長德元年正月十一日藏人。三年正月式部丞云云

かたばらいたく　旁痛く人のいひしと含めし詞之

おほきさいのみや
勘物云。皇后宮安子康保元年四月廿四日崩卅八云々。村上の后。九條右大臣師輔の女。皇太后宮は贈宮也

美濃守にてうせにける藤原のときから　勘物云。時柄康保五年正月廿八日美濃守。長保二年五月三日藏人兵部丞。被補二作物所別當一

かたきにえりても　態相手に撰び出てもいかでさやうに珍名出合べきぞと之。蒙求に

陸機。荷曝に出合て。雲間陸士龍と名のりしに。荷曝。日下荷鳴鶴と名のりしに似たり
又さりけるなめりと今迄かくいひ傳るハと
今迄もかく世に云傳るは。此兩人の珍名の
問答。實にさやうに有けるなるべしと之
それ又時からか
此ゑぬたきが答へも。前段の清少の秀句を。
のぶつれがいはせしといひしごとく。是も
亦時からがいはせしといふ之
ふみも哥もかしこきと
詩哥のよきも。題次第なるがごとく。ゑぬ
たきが答へも。時からが詞によりてそと利
口するさま之
げにさる事ある事之
是は時から哥えよまぬ人なれば。題出して
哥よめとて物うがらせんとていへる詞之
手もいみじう
手跡いたく惡き事之

上達部までも興ある事にの給ひける。又さりけるなめり
ふ詞之　是より清少の時からに此事をい
と今までかくいひつたふるはときこえたり。それ又時か
が答も又時からがいはせしと之　時柄が詞之ゑぬたき
らがいはせたるなり。すべて題出しがらなん。ふみも哥も
よき事之　清少の詞之題からの理をいふ之　詩なり
かしこきといへば。げにさる事ある事なり。さらばだい出
時柄が詞之　一首にてはおかしと之
さん。哥よみ給へといふに。いとよき事。ひとつばなにせん。
おなじうはあまたをつかふまつらんなどいふほどに。御　后宮
などの御出題にや　時からやがてにげたると之　是よ
題は出ぬれば。あなおそろし。まかりいでぬとてたちぬ。手
り時からがにげたることわりをいふ之
もいみじう。まなもかんなもあしうかくを。人もわらひな
どすれば。かやうにまかりにげてあると時からがいひしと之　かく去てなんあるといふもをかし」

つくも所　作物所。細流云。金銀細工の所な
るべし。拾芥云。作物所在二進物所西一有二別
當預熟食一時から此別當に補せられし比の
事之。勘物前註
物のゑやうやるとて
細工人のかたへ時柄繪やうなどして仰付る
之
これがまゝにつかふまつらば
如此見苦しき手跡のまゝに。細工せば異風
に惡からんと之。時柄が手跡をわらはんと
ていへる之

しげいしや東宮に
中關白道隆公の御むすめ。三條院の春宮に
ておはせしころまゐり給て。淑景舍におは
する事之。槃花物語見はてぬ夢の卷に。「か
くて攝政殿なほ帝おとなびさせ給ねれば。
關白殿と聞えさす。中姫君十四五ばかりに
ならせ給ぬ。東宮にまゐらせ奉給ふありさ
ま花々さめでたし。さてまゐらせ給ひぬれ
ば。宣耀殿はまかで給ひぬ。淑景舍にぞす
ませ給。何事もかゞやくやうなれば。いはむ
かたなくめでたし云々。是正暦三年の事之
[增]濱云。いかゞはめでたからざらんめでた
からぬをなしとの意之。上に疑て次句に云

○つくも所の別當する比。たれがもとにやりけるにかあら
是より時からが手もいみじうあしくかく事の物がたり之
ん。物のゑやうやるとてこれがやうに仕るべしとかきた
眞名の樣之　此繪のもやうのごとくせよと之
るまんなのやう。もじの世にしらずあやしきを見つけて。
文字之　あしき事之　清少の見付て之
それがかたばらにこれがまゝにつかうまつらば。ことや
眞名の傍に之　清少の書し詞之
うにこそあるべけれとて。殿上にやりたれば。人々とりて
時柄大に腹立て清少をうらみし之
見ていみしう わらひけるに。おほばらだちてこそうらみ
しか」
これより別段之
○しげいしや春宮にまゐり給ふほどの事など。いかゞは。め
三條院の御事之　いかなる事にかこの心之
でたからぬことなし。正月十日にまゐり給ひて。宮の御か
定子の御事之
たに御文などはしげうかよへど。御たいめんなどはなき
后宮しげいさのおほさんと之
を。二月十日宮の御かたに わたり給ふべき御せうそこあ
ればは。つねよりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ。女
房なども皆よういしたり。夜なかばかりに わたらせ給ひ

定むる文法ゝ。かゝる例多し。尤もいかゞは
の下句をきるべし
さうくわでん　后宮の淑景舍に御對面の御
しつらひの御殿なり。和名云。登花殿は弘徽
殿の北にあり
殿うへひとつ車にて
殿は中關白道隆公也。うへは中關白殿の北
方高内侍ゝ。貴子と號す。儀同三司母といふ是ゝ。后宮淑景舍などの御親ゝ
北面にたて〻
[訂]原本には北西とあり。万歳抄には北向とあり。活本イ本は北面とあり。今是に從へり
まだいかでか　いまだ見奉り侍らず。いかでか見侍らんとの心ゝ
[增]濵按。いかでかあはれ見奉らばやとゝ。まだ句　いかでか句　と見るべし
しやくぜんゞくやう
積善寺供養ゝ。榮花物語四見はてぬ夢に云。かくて攝政殿の法興院のうちに別に御堂たてさせ給て。積善寺と名付させ給て。其御堂供養いみしくぞいそがせ給ふ云々。正暦三年の事ゝ。中關白の父兼家公のために建立ゝ
[增]春村按に。積善寺供養之事。日本紀略。正暦五年二月廿日の條に見ゆ
こうばいのかたもんうき紋
紅梅は表紅。裏紫。二月の衣ゝ。固文浮文いづれも胡曹抄にあり。或説に固文は錦のやうに織付し紋也。浮文は唐織のごとしといへり
今は紅梅はきでも
紅梅は十一月より二月迄着用の衣ゝ。もは

しかば。いくばくもなくてあけぬ。とうくわでんのひんがしの二間に御しつらひはしたり。つとめていととく御かうしまゐりわたして。曉に殿。うへ。ひとつ御車にてまゐりて丶。北面にたて丶。御たゝみ。しとねうちおきて。御火おけばかりまゐりたり。御屏風の南御帳の前に女房いとおはくさふらふ。こなたにて御ぐしなどまゐるほど。しげいしやば見奉りしやとゝばせ給へば。まだいかでか。句しやくんじくやうの日。御うしろをわづかにときこゆれば。其ばしらとびやうぶとのもとによりて。我うしろより見よ。いとうつくしき君ぞとのたまはすれば。うれしくゆかしさまさりて。いつしかと思ふ。こうばいのかたもんうきもんの御ぞどもに。紅のうちたる御ぞ。みへがうへに。只ひきかさねて奉りたるに。こうばいにはときぎぬこそをかしけ

（いくほどの間もなくゝ　十一日のゝ　格　職御曹司ゝ　淑景舍を見奉らんとゝ　后宮の御髪などつくろふ事ゝ　清少の詞ゝ　后宮の清少に問給ふゝ　清少の心ゝ　后宮の御裝束ゝ　固紋　三重ゝ　后宮の御ぞの色たてなの給ふゝ濃紅のきぬゝ紅梅のかさねにはこ）

や珍しかれば。着すしてもあらんとゝ。是二月十一日の比なればゝ
もえぎなどのにくければ句
紅梅は珍しかられど萌黄などは見にくければ。紅梅をめすとふくめたる詞ゝ。されど紅梅は紅に重ては似合すとゝ。紅梅にはときぎぬこそをかしけれといへる首尾ゝ。こき〻ぬは濃紅ゝ。只紅とはうすき色なればゝ
さてゐさりいでさせ
御ぐしの事。御さうぞくなど事すみて后宮の出給ふゝ

女房のもなめり引かけて
后宮への禮義に高内侍のかりそめに裳をかけ給へり。さすがに御母なれば態とはなくて女房の裳なめりといへるおもしろきにや

きぬゝ濃紅ゝ

れ。今は紅梅はきでもありぬべし。されどもえぎなどのにくければ。句紅にはあはぬなりとのたまはすれど。只いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御ぞにやがて御かたちのにほひあはせ給ふぞ。猶ことよきひとともかくやおはしまするべし。他の美人もかやうにやさしげいしやなさしていすらんとぞゆかしき。さてゐさりいでさせ給ひぬれば。やがて御びやうぶにそひつきてのぞくを。あしかめり。うしろめたきわざときこえごつ人々もいとをかし。御しやう高内侍ゝ　清少のしげいさをのぞくゝ　あしからんさ女房達の清少をいひ事するゝ　制するゝ
じのひろうあきたれば。いとよく見ゆ。うへはしろき御ぞども紅のはりたる二つばかり。女房のもなめりひきかけて。おくによりて東おもてにおはすれば。たゞ御ぞうなとぞ見ゆる。しげいしやは北にすこしよりて南むきにおはす。紅梅どもあまた。こくうすくて。こきあやの御ぞ。すこしあかきすはうのおり物のうちき。もえぎのかたもんのわかやかなる御ぞ奉りて。扇をつとさしかくし給へり。いと

（濃紅きをかさねてゝ　御かたちはろくに見えぬゝ　高内侍のぬ給ふゝ　裳ゝ　桂ゝ　顔をおほひ給ふゝ）

げにめてたくうつくしと
前に后宮のうつくしき君なりとのたまひしをうけて。げにと清少の見たる心と

こなたにむきて
今清少ののぞく方にむきて。關白殿のおはすと
めでたき御ありさまどもをうちゑみて
后宮淑景舍など御形を。關白殿よろこび見給ふさまと
たはふれごと
[増]戯言と。洒落などいふと。下のさるがふざあるも同じやうのことにて人を笑はしむることをいふと
しげいしやのゑにかきたるやうに
うるはしく行儀たゝしきさまと。源氏若紫に。奏上のありさまを一只ゑにかきたる物の姫君のやうにといへる同し儀なるべし
せんようでんぢやうぐわ殿
これ淑景舍より登花殿へゆく道つゞきなり。宣耀殿。和名云。麗景殿の北にあり。貞觀殿。和名云。常寧殿の北にあり。これを御匣殿といふ云々。淑景舍は。昭陽舍の北。麗景殿のうしとらにあれば。其西宣耀殿。其西貞觀殿をさほりて。其西登花殿に至るべし。今の御しつらひ登花殿の東の二間とあり。拾芥抄。宮城の圖。順和名等にて勘べし

いみしくげにめでたくうつくしと見え給ふ。殿ばうすいろのなほし。もえぎのおりものゝ御さしぬき。紅の御ぞども。御ひもさして。ひさしの柱にうしろをあてゝ。こなたざまにむきておはします。めでたき御ありさまどもをうちゑみて。れいのたはふれごとをせさせ給ふ。しげいしやのゑにかきたるやうにうつくしげにてゐさせ給へるに。宮いとやすらかに。いますこしおとなびさせ給へる御けしきの。紅の御ぞに匂ひあはせ給ひて。猶たぐひはいかでかと見えさせ給ふ。御てうづまゐる。彼御かたぱ。せんようでんぢやうぐわでんをとほりて。わらは二人。しもづかへ四人してもてまゐるめり。からびさしのこなたのらうにぞ女房六人ばかりさふらふ。せばしとてかたへは御おくりしてみなかへりにけり。櫻のかざみ。もえぎこうばいなどいみしく。かざみながくしりひきて。とりつぎまゐらすい

中關白殿之薄紫の直衣之
句直衣のいれひもなをさし給ふ御手すさびなるべし
奥にもさるがう事をの給ふさまあり
よりかゝりてと
后宮
おとなしき事と
登花殿に此方彼方の女房つゞひたればと
女房のさうぞくと前註
童下仕などのもて來る手水を女房の尻也すそひくと

からきぬ　和名云。背子形如二半臂一無レ腰襴之袷衣也。楊子漢語抄云。背子婦人表衣。以レ錦爲レ之
北野の三位　菅原輔正。勘解由長官在朝一男現レ神北野殿是也。正暦三年二月十五日叙三三位一公卿補任大系圖等に有り
御手水番のうねめ
百寮訓要抄云。采女と申は。國々より可然美女をえらびて天子へまゐらすると。御陪膳などをもゆるさるゝ女房と云々。御手水の役をもつとむるなるべし
みぐしあげまゐりて
河海云。昔は女御更衣以下常に髪を上る事本義也。也足軒云。内の女房は晴の時は髪上さて釵などして髪をいたゞきへ上ると云々。后宮の御ぐしを女藏人など役するさまと

取次と
となまめかし。おり物のからきぬどもこぼれ出て。すけまさのうまのかみのむすめ少將のきみ。北野の三位のむすめ宰相のきみなどぞちかくはある。あなをかしと見るほどに。この御かたの御てうづばんのうねめ。あをすうごもも。からぎぬ。くんたい。ひれなどして。おもてなどいとしろくて。下づかへなどとりつぎてまゐるほど。これはたおはやけしうからめいてをかし。おものゝをりになりてみぐしあげまゐりて。藏人どもまかなひのかみあげてまゐらするほどに。へだてたりつる屏風もおしあけつれば。かいまみの人。かくれみのとられたる心ちして。あかずわびしければ。みすときちやうとの中にて。柱のもとよりぞ見奉る。きぬのすそ裳など。からきぬはみなみすのうとにおし出されたれば。殿のはしのかたより御らんじ出して。たそや霞のまより見ゆるはと。とがめさせ給ふに。少納言が

后宮の御方と
手水番
手水の役の番と
青末濃裳背子と
領巾前註
裙帶
公儀めと
將と
朝御膳と
役義の心と
女藏人と
唐めきしめなれぬ心と
下仕手水を取次て采女にわたすと
清少の衣と
清少の入居たると
清少のののぞくを見付給ひしと
關白殿清少のののぞくを見付給ひしと
后宮の御詞と
前にもあり

かすみのまより
清少のほのかに見ゆるをの給ふと。古今「や

ま櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ。詞ばかりを用ゐてゝ

かれはふるきとくいを古得意也。清少はもとよりの得意にてよく知給ひし物をとの心ゝ

うらやましくかたくのはいまだ關白殿北の方などの御膳はまゐらさりしにや

さるがふ事をし給ふ猿樂言也。狂言のされごとをの給ふゝ

［增］弘云。こは今俗にいふ滑稽の言なるべし。下文七卷に「をとこのうちさるがひ物よくいふが」又口ひきたれてさるがふ」又此卷の次段にも「殿の御さるがふことにいみしうわらひて」とあるを考合すべし。皆しやれをいふさまゝ

大納言殿　伊周公也。正暦三年に。兄の道頼の中納言にこえて。大納言になり給ふと榮花物語に在り

三位中將　隆家卿也。榮花物語四云。此御腹のあるが中の弟の君は三位中將になしきこえ給ひつ云々。是も正暦三年の事ゝ

松君　伊周公の男左京太夫道雅の童名也。榮花物語四云。小千世君は彼大納言殿重光の姫君。いみしううつくしき若きみうみ給へれば。おば北の方貴子。攝政殿道隆などいみしき物にもてかしづき給ふ。松君さぞきこゆめる云々。是正暦二年ゝ

御膳をおく所ゝ

御返はやなどあれどもみにもきこえ給はぬ關白殿御返事を早くとしげいさにすゝめ給へども。恥らひて。頓てにも書給はぬゝ。

淑景舍はいま十五歳ばかりにやさらぬ折はまもなくこなたよりぞ關白どのなどおはさぬ折は。障もなくしげいさよりも御文まゐらせ給ふ物をとゝ。是も道隆公のたはふれ詞ゝ

伊周隆家など緣に居給へば圓坐をと關白どの仰せ給ふゝ

御返はけふはとく后宮の御返事けふはいつより早く出たるゝ

東宮の御使に三條院より淑景舍へ御使者ゝ

わたどの　渡殿廊下ゝ

物ゆかしがりて侍るならんと申させ給へば。關白どの〜詞ゝ清少のぞくをの給ふゝ

あなばづかし。かれはふるきとくいを。句見にくき心ゝざれての給ふゝいとにくげなるむすめども持たりともこそ見侍れ。などの給ふ御けしきいとしたりがし給ふゝ后宮しげいさなど御膳まゐるゝ

ほなる。あなたにもおものまゐる。關白どの〜詞ゝうらやましくかたくのはみなまゐりぬめり。とくきこしめして。關白どの北の方をざれての給ゝおきな女におろしをだに給へなど。たゞ日ひとひさるがふ事をし給ふほどに。大納言殿。三位中將伊周の予ゝ松君も將まゐり給へり。殿いつしかといだきとり給て。ひざにすゑ給へるいとうつくし。こゝろくしき心ゝ日裝束は東帶の事ゝせばきえんに。所せき。ひの御さうぞくの下裾ゝかさねなどひきちらされたり。大納言殿は物〜しうきよげに。中將殿上藤しきゝぱらう〜しいづれもめでたきを見奉るに。殿をはさ申に及ばぬ心ゝ北の方高内侍の事ゝ宿世ゝ前世の緣をほむる詞ゝ圓坐ゝるものにて。うへの御すくせこそめでたけれ。御わらうだなど聞え給へど。着陣あらんとゝぢんにつき侍らんとていそぎたち給ひぬ。しばし有て式部のぜうなにがしとかや。前に式部丞のぶつね御使にまゐりしとは別人にや勅使ゝ御使にまゐり

たれば。御膳をおく所ゝおものやどりの北によりたる間にしとねさし出てすゑたり。御返はけふはとくいださせ給ひつ。まだしとねもとりいれぬほどに。東宮の御使にちかよりの誰としらず少將まゐりたり。御文とりいれてわたどのはほそきえんなれば。關白登花殿にや使を賞翫ゝこなたのえんにしとね。さし出たり。御文とりいれて。殿。關白どの北方ゝ后宮ゝへ。宮など御らんじわたす。御返はやなどあれど。とみにもきこえ給はぬを。關白殿詞なにがしが見侍れば出給はぬなめり。さらぬ折はまもなく是よりぞ聞え給ふなるなど申給へば。淑景舍のありさまゝ御おもてはすこしあかみながら。すこしうちほゝゑみ給へるいとめでたし。とくなどうへ母上もきこえ給へば。おくぎしげいさんまにむきてかゝせ給ふ。うへちかくより給ひてもろともにかゝせ奉り給へば。いとゞつゝましげ也。宮の御かたよちかよりへの緣ゝり。もえぎのおり物の小袿ちうきはかまおし出されたれば。三位の中將かづけ給ふ。くるしげにおもひてたちぬ。松君のをかちかより緣を辭し佗たるさまゝ二歳ばかりゝ

宮の御子たちとてひき出たらんにわろくは侍らし
后宮の皇子うませ給ひぬとの心ゑ。松君をかやうにもてあそぶやうに皇子をさし出たらばとゑ。これ正暦三年二月なれば。一品宮敦康親王などもいまだ生れさせ給はぬほどゑ
えんだうまゐるとゑ
蓮道しく事ゑ。行幸には必蓮道しくを云ゑ。
一條院の后宮の御方へ入御のさまゑ
宮もこなたによらせ
殿うへなどの御前を立去て。帝のおはしますかたへより給ふゑ
殿の御まへに宮づかさ召て　中宮大夫以下の宮司に。菓子肴などの事仰付て。殿上人をもてなせと申給ふゑ

山井大納言　道頼卿也。后宮伊周公などの別腹の兄君ゑ。山井殿は三條坊門の北。京極の西。墨所なるよし拾芥に見えたり。永頼の三位の家ゑ
榮花物語云。此大千世君は國々あまた知たる人の山の井といふ所にすむがむすめおほかる聟に成給ひぬ云々。大千世君とは即道頼卿なり
みうちきまゐらせ給て

しう物の給ふを。誰も〳〵うつくしがりきこえ給ふ。宮の御子たちとて引出たらんにわろくは侍らじかし。などの給はするを。げになどか。今までさる事のとぞ心もとなき。ひつじの時ばかりに。えんたうまゐるといふほどもなく。うちそよめきいらせ給へば。宮もこなたによらせ給ぬ。やがて御帳にいらせ給ひぬれば。女房南おもてにそよめき出ぬめり。らうに殿上人いとおほかり。殿の御まへに宮づかさめして。くだものさかなめさす。人々ゐはせなどおほせらる。まことにみなゐひて。女房と物いひかはすほど。殿上人も女房もゑ
かたみにをかしと　おもひたり。日の入ほどにおきさせ給ひて。山井の大納言めしいれて。みうちきまゐらせ給ひて
かへらせ給ふ。櫻の御なほしに。紅の御ぞの夕ばえなども。
恐れてがしこければと〳〵めつ。山のゐの大納言はいりたゝぬ御せうとにても。いとよくおはすかし。匂ひやかなるかたは。

紅葉賀卷に。うへはみうちきの人めして出させ給ゐる云々。河海云。御ぐしとる人の事ゑ。花鳥云。藏人私記云。御髪御鬢事侍臣之問。撰二選事之人一供無二定例一皆着二當色袍一謂二之御袿一。今案御もとり御びんにまゐる人は。紫のきぬの直衣を着て伺候するを御うちきの人といふゑ云々
内藏頭　是も道隆公の御子也。頼親の内藏頭と藤原系圖にあり
うまの内侍のすけ
左馬權頭時明の女。一條院源氏物語を御覽ゞて。紫式部は日本紀をこそよく見たりけれとのたまひしを妬みて。式部を日本紀の局といひし人なるべし哥人ゑ

まづさばかの君わたし
さあらば先しげいさをまゐらせ給ひて後に。后宮はまゐりたまはんとゑ
さりともいかでか
さはありともいかでかは后宮よりさきにはまゐらんとゑ。姉君への禮讓也
うちはしよりも
内階也。細流云。きり馬道に板をうちわた

此大納言にも（伊周公をいふゑ）まさり給へるものを。世の人はせちにいひおとしきこゆ（前の櫻の御直衣といふよりこゝまてイ本になし）ることそいとほしけれ。殿。大納言。やまのゐの大納言。三位の中將内藏頭（帝の御供にゑ）などみなさふらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて。うまの内侍のすけまゐり給へり。后宮今夜はえまゐらじとゑ父母への御禮義なるべし
ことよひはえなどしふらせ給ふを。殿きかせ給て。いとあるまじき事。はやのぼらせ給へと申させ給に。又春宮の御つかひしきりにある程いとさわがし。御むかへに女房春宮（御方の女房達もまゐりしゑ）のなどもまゐりて。とくとそゞのかしきこゆ。まづさばかの君わたしきこえ給ひてとのたまはすれば。さりともいかでかとあるを。猶見おくりきこえんなどのたまはするほど。いとをかしうめでたし。さらば遠きをさきにとて。まづしげいしやわたり給て。殿などかへらせ給ひてそのぼらせ給ふ。道のほども殿の御さるがふ事にいみしくわらひて。ほど〳〵うちはしよりもおちぬべし」

深切に伊周におと
后宮の御詞
淑景舍は登花殿遠ければゑ
后宮の御詞
しけいさの御むかへに東宮の
しけいさの御答ゑ
狂言ゑ
殆也
たかひの御禮讓をほめたるゑ

してかよふ道之

[訂]うちはしは打橋之。源氏に多くあり

殿上より

此段異本には前の段に書つゝけぬ

はやくおちにけり

朗詠。大庾嶺之梅早落誰問三粉粧。これは紀納言長谷推の詩序の文也。イ本前段につゞけし本にしたがはゞ。かの内階よりもおちぬべき折に合せたれば。早落にけりと答たるにや

二月つごもり

是も正暦三年の比前の段とおなゝ比にや

かうしてさふらふといへば

かくのごとくの用事ありてまゐりしといふ之

公任の君。宰相中將殿の

公任と宰相中將殿と兩人のおこせ給ふといふ之。公任は堀河相國頼忠公の男。和漢の才人之

宰相中將は齋信卿にや

すこし春ある　雪など降荒て春色の少き心之。此詞を取て後成卿「埋火にすこし春ある心ちして夜深き冬を慰る哉

誰々かとこたへばそれ〳〵と

此連哥おこせし一座の人々を。誰にかおはすとこたへば。それ〳〵とこたへし之

殿上より梅の花のみなちりたる枝を。清少にいかに見るとこたへ

清少の答之

ばやくおちにけりといらへたれば。其詩を彼序を大やけに詩を誦しと云之黒月瀧口戸の西にあり前委じゆじてくろどに殿上人いと　おほくゐたるを。うへの御院之

一條

前きかせおはしまして。よろしき哥などよみたらんより時にあふ詠吟はとこたへる。かゝる事はまさりたりかし。よういらへたりと仰らる」

二月つごもり風いたくふきて空いみしくくろきに。雪すこしうちゝりたるほど。黑戸にとのもづかさきて。かうしてさふらふといへば。清少之よりたるに。公任の君。宰相中將どのゝとあるを見れば。懷中に用意する物之ふところ紙にたゞ

すこし春あるこゝちこそすれ

とあるは。げにけふのけしきにいとよくあひたるを。これ清少の心がもとはいかゞつくべからんと思ひわつらひぬ。誰々か清少の詞之主殿司答之ととへば。それ〳〵といふに。みなはづかしき中に。宰相中將の御いらへをばいかゞことなしびにいひ出んと心ひと何の難もなきやうにとの心之

おほとのこもりたり

帝の渡御にて后宮の御寢なりしと之

さばれとて　任他也。たとひあしくもあれとうちいでたる詞之

そらさむみ　花にまがへてちる雪にといふにてすこし春あるをあへしらへる之

そしられたらばきかゞ

此付句あしきとならば我に其沙汰きかする人もあらゞとの心之

としかたの中將

源俊賢卿。西宮左大臣高明公の男之

兵衛のすけ　誰とも不知もしとしかたの兄弟忠賢の兵衛佐にや

千日のさうゞ

御獄精進などにや

はんひのをひねり始る

和名云。半臂は衣名也。桃華纂集云。或抄云。近代半臂以二小繕一結レ之。往古之例以二大繕二筋一結レ之。今世少二知人一云々。猶委今案黑半臂といふもあり。冬は綾夏は生の絹を用

つにくるしきを。御前に御らんぜさせんとすれども。うへ定子に見せまゐらせてつけさせ申さんとこたへ一條院のおはしてこたへのおはしまして　おほとのごもりたり。とのもづかさはと返事をいそくこたへくゝといふ。げにおそくさへあらんはとり所なければ。付句のよかるまゝきうへにこたへさばれとて

清少の付句之

そらさむみ花にまがへて散る雪に

おづ〳〵のこゝろとわなゝくわなゝくかきてとらせて。いかゞ見給ふらんと思ふもわびし。これが事をきかばやとおもふに。そしら此付句のよしあしの沙汰をきゝたく思ふれたらばきかじと其沙汰きゝたくとこたへおぼゆるを。としかたの中將など猶なほ清少をほめて掌侍に執奏せんとこたへいしに申てなさんとさだめ給ひしとばかりぞ。兵衛の佐中將にておはせしかかたり給ひし」

はるかなる物

千日のさうじはじむる日。はむびのをひねりはじむる日。みちの國へゆく人のあふ坂の關こゆるほど。うまれたるちごのおとなからなるほど。大はんにや經御讀經之六百卷獨して どきやうひ

ふ。結はうす物をたゝみて付といへり。但此草紙にいへるほ。往古の大結二筋をもちて結ひ之といへる時の事なるべし。是をひれるに遙なる故あるにや。今世知人まれなりと云々可尋之

十二年の山こもり　後撰の詞書にも有前註

とつらさに十二年の山こもりしてなむ久しうきこえざりければ」とあるをいふなるべし

まさひろ　源方弘左馬權頭時明男前註

なにしにかゝるものにはつかはるゝぞ

人にかく笑はるゝ方弘にはいかでつかはるゝぞと之

人よりはよくてきたるを

異本きたるを紙燭さしつけやきあるはこれはこと人にとあり

[訂]万及びイ本にも。此の十一字ありて然して。是はこと人に云云とあり

是はこと人にきせばや

方弘には似合すとなぶりていふ之

里にとのゐものとりに

方弘。殿上に宿直して里亭へ夜の物取にやるなるべし

ひとますがめに二ますはいるや　一升入べき瓶に二升はいらドと之。一人して二人の物はえもつまじと之。瓶は方量かぎりあり。人の力はかぎりなき事をもしらでいへるまことに笑はるべし

よむはるかなるべし

とりしてよみ　はじむる。十二年の山こもりのはじめてのぼる日」

[增]弘云。後撰卷十戀二よみ人しらずの詞書に「をとこのほど久しうありてまうてきてみ心のいとはるゝ事を之　是より例の筆すさびの物がたり之

まさひろは。いみしく人にわらはるゝ物哉。おやなどいかわらはるゝ事を之　方弘が供の侍など之

にきくらん。ともにありくものども。いと人々しきをよび人々のよびて之

よせてなにしにかゝるものにはつかはるゝぞ。いかゞおぼゆるなどわらふ。ものいとよくするあたりにて。下がさねの色。うへのきぬなども。人よりはよくてきたるを。是はこと人にきせばやなどいふに。げにぞ詞つかひなどのあやしき。里にとのゐ物とりにやるに。男二人まかれといふに。ひとりしてとりにまかりなんものをといふに。あやしの男や。一人してふたりのものをばいかでもつべきぞ。ひとますがめに。二ますはいるやといふを。なでう事としるかまぎにまめやくべたる

せはしき事のたとへにいふにや

此殿上のすみふでは

彼返事かゝんとて墨筆のなければ尋るとていふにや

女院なやませ　是東三條院也。一條院の御母前註

御つかひにまゐりて

宮の御かたよりの御見まひの使に方弘がまゐりしなるべし

四五人ばかりといふに

[訂]原本にはともトなし。今古本に從ひて加へつ

さてはいぬる人ともぞ

其外には退出の人々ありしと之。事もなき返事なれば笑ふ之

人まによりきて

人のなき間に方弘清少のもとに來て之

わが君ごそ

[增]弘云。此のごそは指辭のこそとは異之。ごそとよむべし。源氏夕がほの卷に「右近の君ごそまづもの見たまへ」とあるも同意之。こは俗にいふ君御ソレといふ義之

むくろごめに　軀體全身みなこなたへより給へとの心之

ぢもくの中の夜　除目は三ケ夜おこなはるゝ中の夜之前委註

とうだいのうちしき　燈臺の下にしく物

人ぱなけれど。いみしうわらふ。人のつかひきて御返事と

くといふを。あなにくの男や。かまどにまめやくべたる。此

殿上のすみ筆ぱ。何ものゝぬすみかくしたるぞ。いひさけ

ならばこそほしうして人のぬすまめといふを。又わらふ。

女院なやませ給ふとて。御使にまゐりてかへりたるに。ゐ

んの殿上人ぱたれ〳〵かありつると人のとへば。それか

れなど四五人ばかりといふに。又ぱとへば。さてぱいぬ

る人どもぞありつるといふを。またわらふも又あやしき

事にこそぱあらめ。人まによりきて。わが君ごそ。まづ物き

こえん。まづ〳〵人のの給へる事ぞといへば。何事にかと

てきちやうのもとによりたれば。むくろごめにより給へ

といふを。五たいごめにとなんいひつると云て又わらふ。

ぢもくの中の夜。さしあぶらするに。とうだいのうちしき

をふみてたてるに。あたらしきゆたんなれば。つようとら

五十二段

之。すなはち油單之
つようさらへられ　油單に方弘が足をつけまつはされし之
したうつ　和名類亦作𧞑襪和名之太久頭足衣也。桃華蘂葉云。襪練貫の小袖を着する時は練貫を用ふる。宿老は白き平絹のねりはりたる也云々
頭つき給はぬほどは　藏人頭は。貫首とて殿上の管領ならば。臺盤につきて食する時も。頭のつかざるには。殿上人何もつかぬを。方弘は頭より先に豆をくひし之
あふさかのせき　近江之。忍熊王武内宿禰と戰まけて退しに。武内宿禰追てこゝにて行逢て終に忍熊王を亡たる故逢坂と云と日本紀九有
くきたの關　細流云。奥州の菊田(キクタ)剌關也。俗にくきたのせきといふ之
たとしへなくこそ　たとへがたなき心之。只こゆるといふ名と。憚るといふとはたとへくらべがたき心之
はゞかりのせき
[增]濵云。後拾遺戀一よみ人しらず「しるらめや身こそ人めをはゞかりの關に涙はとまらざりけれ」
よこばしりの關
[增]濵云。兼盛集
「よこばしり清見が關のかよひぢにいづと

へられにけり。さしあゆみてかへれば。やがてとうだいは(うちしきを足にまといながら歸る)たふれぬ(ころぶ之)。したうつ(方弘がしたうつのぬけゆく之)はうちしきにつきてゆくに。まことに道こそしんとう(震動之是もわらはるゝ事之)したりしか。頭つき給はぬほどは。殿上の大ばん(一盤之)に人もつかず。それにまさひろはまめひともりをとりて。こさうじ(小障子之)のうしろにてやをら〳〵(〔訂〕そろ〳〵などいふ詞之)ひければ。ひきあらはして(方弘を引出して之)わらはるゝ事ぞかぎりなきや」

せきは

あふさかのせき。すまの關(津の國之)。すゞかのせき(伊勢之)。くきだの關。しら川のせき(奥州之)。衣の關(八雲奥州云々 未考)。たゞこえのせきは。はゞかりのせき(八雲陸奥云々)とたとしへなくこそおぼゆれ。よこばしりの關(八雲濵河云々)。きよみがせき(するが之)。見るめの關(八雲近江云々)。よしな〳〵のせき(陸奥の奈古曾の關の一名ときこえたり)こそ。いかにおもひ返したるならんといとしらまほしけれ。それをなこその關(よしなしな來そといふやうな)とはいふにやあらん(れば之)。あふ坂などをまで思ひ返したらばわびしからんかし。あしがらのせき(八雲之相摸云々)」

五十三段

いふことはながくとゞめつ」此の哥の意にては。伊豆の國にや
いかに思ひ返したるならん　思ひ立たる事を。又由なしと思ひ返したるやうなればの
逢坂などをもて　逢べしと契りし人の由なしな來そなど思ひ返したらば侘しからんとの。逢坂を逢にそへてうたにもあまたよみたればの。續千載集に賴朝卿「都には君に逢坂ちかければなこその關は遠きとをしれ」
おほあらぎのもり
大荒木　八雲山城云々
しのびのもり　未知。但八雲しのぶの森陸奥云々。是を書たがへしにや忍びの岡は河内之
こゝひの森
[增]濵云。拾遺哀に右大臣顯光
「こゝにだにつれ〳〵となく郭公ましてこひの森はいかにぞ」
こがらしの森
[增]濵云。古今六帖
「人しれぬ思ひするがの國にこそみをこがらしのもりは有けれ」
いはせのもり　磐瀨森。八雲云。大和又攝津信濃にもあり云々
[增]濵云。新勅撰夏に田原天皇
「神なびのいはせのもりの時鳥ならしの岡にいつかきなかん」
くろべきの森　八雲にもしれず
神なびの　神南備森之。津國今かうないといふ所之
うきたの森
[增]濵云。万十一
「かくしてやなほやみなん大荒木のうきたの森のしめならなくに」

もりは

おほあらきの森。しのびのもり(未知)。こゝひのもり(八雲ニ伊豆國云々)。こがらしの森(木枯森駿河之)。しのだのもり(信太和泉之)。いくたの森(生田攝津之)。うつきのもり(未知八雲同前)。きくだのもり(未知)。いはせの森。立聞のもり(未知イたゝきの森)。ときはのもり(山城之)。くるべきのもり(イくろづき)。神(かみ)なびの森。うたゝねのもり(未知)。うきだのもり(浮田山城之)。うへ木のもり(イうへつきの未知)。いはたの森(石田山しろ之)。かうたての森(未知)といふが。みゝとゞまるこそあやしけれ。もりなどいふべくもあらず。たゞひと木あるを。何につけたるぞ。こひのもり(活本になし)。こはだのもり」

卯月の晦日に。はせ寺にまうづとて淀(よど)のわたりといふものをせしかば。舟に車をかきすゑてゆくに。しやうぶこも(まこも之)などの末みじかく見えしを(水のふかき所に生たるさま之)。とらせたれば。いとながゝりける。こもつみたる ふねのありきしこそ いみしうをかし

弘云。万歳抄には此のうき田の森なし
濵云。一本いはたの森の次にたれその森あり。伊勢とあり。然して名寄には伊賀とあり。て知家朝臣の哥
「さよふけてたれそのもりの時鳥名のりかけてもすぎぬなるかな」
弘云。万にもイ本にも此の森なし
かうたての森
[増]濵云。加茂に神館の杜ありもしくはそこ
こひのもり　未考
こばだの森　山城の木幡にや可尋之。此兩所イ本になし
卯月つごもり　是より例の筆すさびゑ
長谷寺　拾芥云。金色二丈六尺十一面云々。滋元亨釋書委
淀のわたり　古は橋なくて舟渡りせしゑ。「たつ程のかされ土器なかりせはおほえて淀のわたりせましや」と俊頼の哥ゑ
しやうぶこもなく　文選廿二。謝靈運。嶺岸泛沉深。蒲冒淺清。金葉集「あやめくさ引手もたゆく長きれのいかで淺香の沼に生けん」
たかせのよどにはこれを　六帖哥「こも枕高瀬の淀にかるこもの かるとも我はしらて頼まん」其外あまたよめり

五十四段

湯　温泉の事ゑ。博物志云。凡水源有三石硫黄二其泉即温
七久里湯　八雲云。信濃。しなのゝみゆ同云
[増]濵云。堀河後百首に常陸の哥
「よの人の戀のやまひのくすりとや七くりの湯のわきかへるらん」
有馬の湯　[増]濵云。同百首に奥風の哥
「あひ思はぬ人をおもふぞ病なる何かありまのゆへもゆくべき」

五十五段

元三の車のおと　正月元日二日三日參内する物のれはさらゑ　是も曉の管經ゑ。常より
ことなるといふも事新しとゑ

かりしか。たかせのよどにはこれをよみけるなめりと見河内國ゑ
え し。三日とといふに歸るに。雨のいみしう降しかば。さうぶ
かるとて笠のいとちひさきをきて。はぎいと高きをのこ足歴をかりあげたるゑ
わらはなどのあるも。屏風の忘にいとよくにたり」

湯ぱ　なゝくりのゆ。有馬のゆ。玉つくりの湯」
摂津ゑ　未考

つねよりもことにきこゆる物

元三の車のおと。鳥の聲。是も元三の鶏ゑ　あかつきのしはぶき。物のねはさらなり」

五十六段

なでしこ　イ本此下にさうぶとあり。菖蒲ゑ
物がたりにめでたしと　桐壺卷云。忘に書たる楊貴妃の形は。いみじき繪師といへども。筆限あればいと匂ひなし云々。狹衣に大將の御ありさまぞ筆及ぶべくもあらずと。果はやみにきさあるたぐひゑ
かきまさりする物　忘にも書まさり。詞書にも書勝りするゑ
松の木　是より鹿までは忘に書まさりするゑ
冬はいみしく　是以下は詞に書まさるゑ
韓退之詩云。肌膚生二鱗甲。衣被如二刀鎗。氣寒鼻莫レ嗅。血凍指不レ粘。園レ爐不覺レ媛。獸炭屢已添「なほあげてかぞふべからず
夏はよにしらずあつき　梁元帝詩云。季夏煩暑。流レ金爍レ石「みなづきの土さへさけてる日にも我袖ひめやいもにあはずして」と拾遺にも讀り

五十七段

なでしこ。さくら。山吹。物がたりにめでたしといひたるを
とこ女のかたち」
かきまさりする物
松の木。秋の野。山ざと。山路。鶴。鹿。冬はいみしくさむき。夏
ぱ世にしらず暑き」

五十八段

孝ある人の子　爾雅釋話曰善事二父母一爲レ孝。孟子曰堯舜之道孝弟而已。孝經云。子曰夫孝德之本也。教之所二由生一下畧
猶あげていひかたし
へだてぬうちをこなひたる曉のぬか
ぬかは額突とて禮拜する事ゑ。御獄精進に。別所にはなれぬて。彌勒を禮拜するさまゑ。金峯山の金剛藏王は。過去釋迦。現在觀音。當來彌勒とゑ。夕顔卷に。みたけさうゞにやあらん。たゝ翁びたるこゑにぬかづくぞきこゆる云々。又なもたうらいだうしとぞおがむなるともいへり
まうづるほどの　千日精進して金峯山に參ゑ

忘にかきておとる物
なでしこ。さくら。山吹。物がたりにめでたしといひたるを
とこ女のかたち」
かきまさりする物
松の木。秋の野。山ざと。山路。鶴。鹿。冬はいみしくさむき。夏
ぱ世にしらず暑き」

○あはれなる物

孝ある人の子。鹿のね。よき男のわかきがみたけさうじし
たる。へだてゐたらんあかつきのぬかなど。
いみしう あはれなり。むつましき人などのめさましてき
彼禮拜の聲をしたしき人　精進を大事に思ふゑ
くらんおもひやり。まうづるほどのありさま。いかならん
の物へだてゝ間想像も哀とゑ句イ
とつゝしみたるに。たひらかにまうでつきたる こそいと
イおぢたるに
めでたけれ。忘ぼうしのさまなどぞすこし人わろき。なほ
久しき山ぶみに烏帽子の損ずたるさまゑ

信賢　六條左大臣重信公の息宣方歟猶可勘

たゝきよき衣を　誰もやつれて參るにのぶかたは淨衣にてまうでんとていへる詞之

かならずよもあしくてよと　金峯山の藏王も必惡くやつれてまゐれよとほよもの給はゝと之

あをやまぶき

桃華藻葉。衣色異既云。胥山吹表胥葛黃此衣二月にも用る事あり云々

たかみつのとのもりのすけ

勘物云。隆光主殿助長保三年藏人年廿九。三條右大臣定方より五代左衛門佐宣孝の息云々

すゐかん　桃華藻葉云。水干事。紗にても平絹生にても又色は白くても何にても大納言の時まで內々に着用之

いひけんにたかはずもと　よき衣きてまうでんになでう事があらんといひしにたがはずも有ける哉との心之

十月一日のほど

詩酬風七月篇云。十月蟋蟀入我牀下一

いみしき人ときこゆれど。こよなくやつれてまうづとこそはしりたるに。右衞門のすけ信賢はあぢきなき事なり。たゞきよき衣をきてまうてんに。なでうことかあらん。かならずよもあしくてよとみたけのたまはしとて。三月つごもりにむらさきのいとときさしぬき。しろき。あをやまぶきのいみしくおどろく〜しきなどにて。たかみつがとのもりのすけなるは。あをいろの紅のきぬすりもどろかしたるすゐかんはかまにて。うちつゞきまうでたりけるに。歸る人もまうづる人も。めづらしくあやしき事に。すべて此山道にかゝるすがたの人見えざりつとあさましがりしを。四月晦日にかへりて。六月十餘日のほどに筑前のかみうせにしかばりになりにしこそ。げにいひけんにたがはずもときこえしか。是は哀なる事にはあらねども。みたけのついで也。九月三十日。十月一日のほどに。只ある

「きりぎゝす夜寒に秋のなるまゝによわるかこゑの遠ざかりゆく」四行

秋ふかき庭の淺茅に　家持集。「松陰の淺茅がうへの白露をけたずて玉にぬく物にがも」

川竹の風に　イ本夕暮曉に川竹の風ゝふかれたるめさましてきゝたるとあり。此本と心ことゝ

[增]瀧云。此所のすべてといふ詞は。夕ぐれとあかつきと夜と。三ながら川竹の音のあはれなるをいふゝ

弘云。かは竹はたゞ竹のことゝ。漢字にて漢竹。皮竹。川竹などもかけど文字になづむことなかれ

二十六七日　はつかあまりむゆかなぬかとよむへし

年うちすぐしたる

年老過たるゝ

朗詠。香火一爐灯一盞白頭夜禮佛名短云々

いとあらうはあらぬ風の

一說是も荒たる家の葺蓬など生たる所にふく心なるべし

寺にこもり

三井寺にや。いつくにてもゝ

かなきかにきゝつけたるきりぎりすのこゑ。にはとりの子いだきてふしたる。秋ふかき庭のあさぢに露のいろいろ玉のやうにてひかりたる。川竹の風にふかれたる夕くれ。あかつきにめさましたる夜などもすべて。おもひかはしたるわかき人の中に。せくかたありて心にしもまかせぬ。山里の雪。男も女もきよげなるがくろき衣きたる。二十六七日ばかりのあかつきに。物がたりしてゐあかして見れば。あるかなきかに心ぼそげなる月の。山のはちかく見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うちすぐしたる僧たちのおこなひしたる。あれたる家にむぐらはひかゝり。よもぎなどたかくおひたる庭に月のくまなくあかき。いとあらうはあらぬ風の吹たる」

正月に寺にこもりたるは　いみしく寒く。雪がちに氷たるこそをかしけれ。雨などのふりぬべきけしきなるはいと

くれはし　樓階にや初瀬にある物と
うつほ物語云。樓にのぼり給ふべきほどのくれはしは。色々の木をまぜ〳〵につくりて。下より流るゝ水は涼しく見ゆべく作る云々
おびばかりしたる　小袖に帶ばかりにて衣きざるにや。イおゐは篶斗おひたるにや
[增]濵按。源氏浮舟に。おびうちかけて云々。神佛のまへにしてかけおびといふものしたるとあれば。此説ならんか。下文におびうちかけてをがみ奉るに。と清少みづからのさまをいへり。されどともに女のこと之。こゝはいづれおびなれど法師のさまと
[訂]弘云。註におゐを篶と。としたるは非と。篶の假字もおひなるをや。濵按に從ふべし
つゝみもなく　少のつゝしみもなく之。恐ぬ心と。イつゝがもなくは無慈也。あやうきけがもなきと
[訂]弘云。此註非と。つゝみもなくを少のつゝしみもなく之。とは甚しき誤解と。こは万葉五の卷好去好來の哥にも「つゝみなくさきくいまして」と有て障事なくなどいふ意と。平安にの意もあり。故に無慈と大意は似かよひたり
俱舍の卜ゆ
大藏經綱目指要錄七云。俱舍頌一卷。天親菩薩造也。説一切有部作三八品。一分別界品。四十四頌。二分別根品七十四頌。三分別世界品九十九頌。四分別業品一百三十一頌。五分別隨眠品六十九頌。六分別聖賢品八十三頌。七分別智品六十一頌。八分別定品三十九頌。已上六百頌爲二論之本一也
きぬかへさまにひきかへし
[增]弘云。こは上着と下着とをたがへて着用したるがおかしきをいふと
ふかぐつはうくは　和名云。深履。其頭短者謂之半鞋。桃華藻葉云。靴。深沓同事也云々。靴氈は赤地の錦。靴帶はひきはたの皮也。昔はかな物あり。節會の時內辨外辨の公卿。若は行幸供奉の時用レ之。又云。半靴は御幸の供奉直衣騎馬の時用レ之
犬ふせぎの中を
觀音のおはする所のさまと
[增]弘云。御堂のうち內陣と外の方との隔てにあるませ垣のもと之。いづれの寺の御堂にも有ものと
まづ心もおこさる
其たふときさまを見るより先信仰の心發起すること
てごとにふみをさゝげて
御灯文なるべし。願文などと。源氏玉かつらの卷にも初瀨にてみあかしぶみの事あり
せめてしぼり出したる聲々
[增]弘云。上の二卷にせみごゑにとあるに同ト。迫りたる聲にてみあかし文をよみあぐるさまと
千とうの御心ざし　千燈ともす事なるべし。イ本千たんと有。玄旨御本にも千灯とあればイ本用べからず

わろし。ぱつせなどにまうでゝ。つぼねなどするほどは。くれぱしのもとに車引よせてたてるに。おびばかりしたるわかき法師ばらの。あしだといふ物をぱきていさゝかつゝみもなくおりのぼるとて。何ともなき經のぱしうちよみ。倶舍のじゆをすこしいひつゞけありくこそ所につけてをかしけれ。わがのぼるぱいとあやうく。かたぱらによりて。かうらんおさへてゆくものを。只板じきなどのやうに思ひたるものをかし。つぼねしたりなどいひて。くつどももてきて。おろす。きぬかへさまにひきかへしなどしたるもあり。もからきぬ。などことぱ〳〵しくさうぞきたるもあり。ふかぐつ。ぱうくぱ。などぱきて。らうのぼどなどくつすりいるぱ。うちわたりめきて又をかし。うちとなどゆるされたる若き男ども家の子など。又立つゞきて。そこもとぱおちたる所に侍めり。あがりたるなどをしへゆく。何ものに

車より之　裝束したると　背子之　廊　內證外さまをもゆるされし男之　摩靴江次第沓引之　半鞋和名半靴桃花　深履和名　高く上る間の廊の高欄に取付さまと　清少などのさまと　大內のやうなること　彼法師ばらのやすくゆくと　展之　香之　イとうの御心ざしぱなに

かあらん。いとちかくさしあゆみ。さいだつものなどを。しき男家子などの制するさまと　清少などに近くと　先立之　彼若ぱし。人のおぱしますに。かくぱまじらぬわざなりなどいふを。げにとてすこし立おくるゝもあり。又きゝもいれず我まづとく佛の御まへにとゆくもあり。つぼねにゆくぱども人のゐなみたるまへをとぱりゆけば。いとうたてあるに。犬ふせぎの中を見いれたる心ちいみしくたふとく。などて月比もまうでず過しつらんとて。まづ心もおこさる。みあかし常灯にぱあらで。うちに人人の奉りたる。おそろしきまでもえたるに。佛のきら〳〵と見え給へるいみしくたふとげに。てごとにふみをさゝげてらいぱんにむかひてろぎちかふも。さぱかりゆすりみちて。これぱとりぱなちて聞わくべくもあらぬに。せめてしぼり出したる聲聲の。さすがに又まぎれず。千とうの御心ざしぱなにがしの御ためとわづかにきこゆ。おびうちかけてをがみ

早くと　居並　禮版　論義聲ゝ　動滿之騷動する之　大德達のみあかし文よみあげしさまと　清少の御灯文の詞なるべし　內陣へ他所のひとの奉りし灯明なり　清少の御灯文の詞なるべし　それく　外の者と

おびうちかけて
かけおびのさまにや旅すがたのやつせる歟
東なるべし
[増]上に委しくいへり

法師のよりきて
清少の宿坊の法師の寄來たるこ。願文讀し人こ

しか〳〵の人こもらせ給へり　是も清少の宿坊の法師我もさに又こもりおはする人の事などかたりきかせて歸るさまこ

はんさう
匣ハンザウ和名云。柄中有レ道可二以法七水之器也。俗用二楾字一所出未レ詳。或說云。有レ柄中挿二其内一故呼爲二中挿一
御さもの人はかの坊に
堂にての清少の局狹ければ。供の人々は宿坊へささそふこ

すきやうの鐘のおと
誦經鐘也。祈禱の經をよむ事こ。源氏浮舟卷に。すきやうのかねの風につきてきこえくるをつくゞくと聞ふし給へり云々

我なりときけば
我がよましむる祈禱の鐘の音成けりとこ

たかくうち出させまほし
彼男の邪やかにぬかづき經をも高からず讀を。聲高く詞にいださせまほしきさこ

けさやかに

奉るに。清少のこもりぬし局へ法師などのしきみをつかはすこてもてきたるなどのたふときなども猶をかし。犬ふせぎのかたより法師よりきて。いとよく申傳ぬ。所願のおもむきを佛に申しつさこいくかばかりこもらせ給ふべきなどとふ。云々と書かやう〳〵の人さいふ心こしか〳〵の人こもらせ給へりなどいひきかせていぬる。すなはち火をけ菓子こ清少の局くた物など宿坊より持來て借すこ匣ハンザウ中挿ともかくこ手水入る物こもてきつゝかす。盥和名手洗同ぱんざうに手水などいれてたらひの手もなきなどあり。御とものの人はかの坊になどいひてよびもてゆけば。かたへはのこりてかはるこかばりゞ〳〵ぞゆく。ずきやうのかねのおと我なりときけばたのもしくきこゆ。かたはらによろしき男のいと忍びやかにぬかなどつく。たちゐのほども心あ顯突こ禮拜するこらんと聞えたるが。いたく思ひ入たるけしきにて。いもね不寢こずおこなふこそいとあはれなれ。うちやすむほどは是もかの男のさまこくはきこえぬほどによみたるもたふとげなり。たかくうきやうたかち出させまほしきにましてはなゝどをけさやかにきゝ

あざやかにあらはなるこ

日比こもりたるに
前にも日比こもられしなるべし

はやうは有し
前にはかやうに晝夜さはがしくはなかりしさなるべし

かひないさたかく
昔は十二時に貝を吹しこ。千載集に「けふも亦午の貝こそ吹つなれひつゝのあゆみ近付ぬらし」赤染衛門

すきやうの物
誦經の布施物なり。浮舟のまきに。御すきやうせさせ給へとて其れうの物文など書そへてもてきたり云々

たう童子
堂童子は。法會の時花筥をおこなひをさめなどする物こ。江次第に佛事ごとに見えたり。禁中の法會に其座以下雲圖抄に有

御さんたひらかに
御産の祈禱など申さまこ。平に守給へと申こ

教化などしたる
法理をのべて此佛驗むなしからまゝき由を教化しきかするにや

にくゝばあらで。すこし忍びてかみたるは。何事をおもふらん。かれをかなへばやとこそおぼゆれ。日比こもりたるに。ひるはすこしのとかにぞはやうは有し。法師の坊にを少の下人このこ共わらはべなどゆきてつれ〴〵なるに。清少の局さびしきこたゞかたはらにかひをいとたかく俄にふき出したるこそおどろかるれ。きよげなるたて文など持せたる男の。ずきやうの物是も願文なるべうち置て。だう童子などよぶこゑは。山ひゞきあひてきら〳〵しうきこゆ。かれの聲ひゞきまさりて。いつこならんときくほどに。やんことなき所の名うちいひて御さんたひらかになど。教化などしたる。すゞろにいかならんとおぼつかなくねんぜらるゝ。これはたゞなるをりの事なめり。正月などには。只いと物さわがしく物のぞみなどする人の。ひまなく參詣するは道夜の人ならんここ暮て參詣するこ立願の事こ。日のうちくるゝにまうづるはこもる人なめり。小法師

屏風などの高さ
彼通夜の人の局をかこほんためなるべし
いとよくしんたいし
進退也屏風の高大なるをよくもてあつかひたるさまと

そよ〳〵とあまた
是は籠りし人の今歸るさまと

あいぎやうづきおごりたるこゑ
愛敬めき驕たるこ。愛敬有ながらほこらしき童のさまと

めのとの名母などうち出たらん　彼ちごの
乳母の名をよび母などいひ出たるなり
これならんといとしらまほし　其めのと母
などは是ならんと見出知たきさと

其寺の佛經
たとへば。初瀧にては觀音經。うつまさに

ばらのもたぐ持上べくもなきくもあらぬ屏風などのたかき。いとよくしんたいし。たゝみなどほうとたておくと見れば。たゞつ其まゝ局に出てぼねに出て。犬ふせきにすだれをさら〳〵とかくるさまなどぞいみしく。其事になれたるしつけたるはやすげなり。そよ〳〵とまたおりて。おとなたちたる人のいやしからずしのびやかなる御けはひにて。かへる人にやあらん。そのうちあや火用心の事なるべしうし。火の事せいせよなどいふもあり。是もこもりし人の子なるべし七つ八つばかりなるをのこゞのあいぎやうづきおごりたる聲にて。さふらひ人とあり可用人よびつけ物などいひたるけはひもいとをかし。又みつばかりなるちごのねをびれてうちしはぶきたるけはひいさをしけなる心もうつくし。めのとの名。母などうち出たらんも。これならんといとしらまほし。夜ひとよいみしうのゝしりおこなひあかす。ねもいらざりつるを。後夜ごやなどはてゝ。すこしうちやすみねぬるみゝに。其寺の佛經をいとあら〳〵しう

てば。藥師經のたぐひと

ねれうしたるも
圖遠也。かの青鈍の指貫きたるを。侍どものたちめぐり渇仰したるさまと

とかくつぼねどもなどの
女中の局のわたりに立さまよひのそくさまと
別當などよびて
其寺の別當に其局の事をさゝやき問と
えせ物とは見えずかし
心あさき者人とは見えずいかさま心ふかき
故ありげなるとと

たかくうち出てよみたるに。わざとたふとしともあらず。
修行者めきたるとすぎやうじやだちたる法師のよむなめりとふとうち驚れてあはれにきこゆ。又よるなどはかはしらで。人々しき人のおこなひたるがあをにびの花田いろのこきとさしぬきのひろがりし心とはたばりたる。白き衣どもあまたきて。子どもなめりと見ゆる若きをの裳束せしとこのをかしううちさうぞきたる。童などぐしたるとわらはなどして。さぶらひの物どもあまたかしこまりねねうしたるもをかし。かはしら是もかのさしぬきゝたる人のさまとりそめに屏風たてゝぬかなどすこしつくめり。かはしらぬは誰ならんといとゆかし。しりたるは見知たるはそれ殿ぞと見るとさなめりと見るもをかし。わかき人どもは。若き男達とかくつぼねどもなどのわたりにさまよひて。佛の御かたにめ見やり奉らず。別當などよびてうちさゝめき物がたりして出ぬる。えせ物とは見えずかし。二月卅日三月朔日ごろ。花ざかりにこもりたるもをかし。きよけなるをのこどもの忍ぶとみゆる二三人

さくらあをやぎ
直垂。或は狩衣などにや。櫻は表白裏赤花。柳は表白裏青ゑ

つき〳〵しきをのこに
よいころなる心ゑ

さうぞくをかしうしたるゑふくろ
鷹の餌袋に見事にかざりしたるゑ。鷹などすゑさせて來たるさまなるべし

[增]濵云。もと鷹狩などに用ゐしものなるを此程よりたゝわりごやうのことにいへり。かげろふ日記に
「此草紙人の家につき〳〵しきものさうぞくよくしたるゑぶくろ」とあるを見るべし

すりもどろかし　袴にすりゑなどみだれ書たるなるべし

[增]弘云。しのぶもぢすりといふも。もどろかして摺れる事ゑ。故にもどろかしも亂らし摺りの事ゑ

ごんぐ　金鼓和名云。最勝經云。妙童菩薩於二夢中一見二大金鼓一云々。ことなる佛事に樂人物の音を發せんとて。圖書金鼓をうつ。又唄師音聲を發せんとても。金鼓を打事江次第十三にみゆ

[增]濵云。此ほそやかなるものは今いふ鐘木なるべし。ぐしては金鼓にぐしてゑ。金鼓はたゝきかれゑ

いかでかはしらん
此方には見付たれどもあなたには見付れば我とはいかでしらんとゑ

すべて例ならぬ所に
寺籠にかぎらず。總て常ならぬ所に旅居などせんに。我一人斗籠るはかひなし。同し心の女友達などぐしてありたきとゑ

櫻青柳（さくらをやぎ）などをかしうて。くゝりあげたる（句）さしぬきのすそもあてやかに見なさる（貫の字ゑ）〻。つき〳〵しきをのこにさうぞくをかしうしたるゑふくろいたかせて（もたせたるゑ）。ことねりわらは（小舍人ゑ）ども。こうばいもえぎのかりきぬに。いろ〳〵のきぬ。すり（摺戻ゑ）もどろかしたるはかまなどきせたり。花などをらせて。侍（句さぶらひ）（召具してゑ）めきてほそやかなるものなどぐしてごんぐうつこそをかしけれ。さぞかしと（其人ぞかしとゑ）見ゆる人あれど。いかでかはしらん。うちすぎていぬるこそさすがにさう〳〵しけれ。氣色（けしき）を見（局の前をすぎ行ゑ）せまし物をなどいふ（こもりゐる事をしらせたきとゑ）もきこえてい（我こゝに）て例ならぬ所に。つかふ人のかぎりして（うちのものばかりにてゑ）あるはかひなくこそおぼゆれ。猶おなじほどにて。ひとつ心にをかしき事もさまゞ〳〵いひあはせつべき人。かならずひとりふたりあまたもさそはまほし。其つかふ人の中にもいひあはせてよき物もあれど朝夕みなれてめづらしからすとゑ（其あある人の中にも。口をしからぬもあれども。めなれたるなるべし。をとこなどもさ思ふにこそあめれ。わざとたづねよびもてありくめるはいみし」

こゝろづきなきもの

まつりみそぎなどすべてをのこの見る物見車に。只ひとりのりて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんごとなからずとも。わかきをとこどもの物ゆかしと思ひたるなど引のせて見よかし。すきかげにたゞひとりかゞよひて。心ひとつよまもりゐたらんよ。いかばかり心せばくけにくきならんとぞおぼゆる。物へもいき。寺へもまうづる日の雨。つかふ人などの我をばおぼさず。何がしこそ只今時の人などいふをほのきゝたる。人よりはすこしにくしとおもふ人の。おしばかりごとうちし。すゞろなる物うら見しわれさかしがる」

わびしげに見ゆる物

日影もあきらけき時分ゑ

六七月のうまひつじの時ばかりに。きたなげなる車にえ

さこなどもさ思ふにこそ　清少のみならず男もかやうにおもふやらん。わざと友達を

心づきなき物
此段衍文ゑ。たゝ一人のりてといふ以下は前のにくき物に有。其外はおくにくはしくあればこゝには註せず

[訂]濵云。末に心づきなきものとあるいとくはしければ。こゝはまぎれていりたるなるべし。萬歲抄には。こゝにのみ此段をあげて。末のくはしき段を脫せしは。なか〳〵に誤なるべし。いつれにも同下題二所にあるべきやうなし

わびしげ

[增]わび歎息の意ゑ。げはやうすゑ。歎息すべきやうすといふ義にて。俗にイヤニミユル。イヤニ思フなどの意ゑ

はりむしろ　雨覆ひ服車などにむしろをはる事西宮記に有其たぐひなり

かたね　乞見。和名云。列子云。齊有二貧者一常乞二於城市一。乞見云。天下之辱莫レ過二於是一和名加多井

[増]弘云。土佐日記。二月四日の條に。日もえはからはぬかたぬなりけり」と見えたり

ぜんくしたる　前駈之。馬にのりて供養したるこ

なつはされどよし
雨にぬれても冬のやうに寒からればなるべし

すゐトんのをさ　近衛の番長之。環翠軒云。近衛隨身の上臈を番長といふ。秦氏下毛氏等今に隨身たるこ。裝束は。褐。衣冠。又は狩衣に花をつけたり。時に依て出立樣々こ

のふのけさ　衲袈裟歟。衲。和名云。俗云二能不一。智度論云。五比丘白レ佛當レ著二何等衣一。佛言應レ著二衲衣一。袈裟。和名袈裟天竺語也。此云二無垢衣一。又功德衣。俗云介佐

てゐの少將　出居次將は。賭弓などに帶劍し弓箭をとりて。主上の出御に警蹕を讃す。江次第に。五月の最勝講。七月の相撲節などにも。出居次將着座の事あり。是ちの折あつげなるにや。出居の座殿上にあり。雲圖抄に委

きんのふくろ　河海云。管絃の器皆袋にいるゝ事本儀之下畧　すほうのあざり

あかがれのかぢにや　和名云。鍛冶打二金鐵一爲レ器也。俗云二鍛治一訛也。くろがれをうつも六七月には暑かるべけれど。あかがれといへば又あつげなる

せ牛かけてゆるがしゆくもの。雨ふらぬ日ばりむしろし（雨おほひの蓆之）たる車。ふる日ばりむしろせぬも。年老たるかたる。（乞見）いとさ（乞食は寒暑皆詫しげなること之）むき折も。暑きにも。げす女のなりあしきが子をおひたる。ちひさき板屋のくろうきたなげなるが雨にぬれたる。雨のいたくふる日ちひさき馬にのりてぜんくしたる人のかうぶりもひしげ。袍も下襲もひとつになりたるいかにわびしからんと見えたり。なつはされどよし」

あつげなるもの

ずゐじんのをさのかりぎぬ。のふのけさ。でゐの少將。いみしくこえたる人のかみおほかる。きんのふくろ。六七月のずほうのあざり。日中の時などおこなふ。又おなじ比の銅のかぢ」

をとこの心の中

イ本いろこのむ男の心の中とあり。女はおろかにて。色好む男のすかし安く思はんが恥かしき心之。猶あとに委

[訂]弘云。高歳抄にも。此の上にいろこのむの五もゝありて「いろこのむをとこの」とあり。なくてもしかるべし

いささきよゐの僧　夜をもれぬ心之。河海云。夜居僧内裏の二間に候ひて。夜もすがら加持まゐる僧之云々。其恥かしき心跡にあり

くらきまぎれにふところに　盜人の隱れぬひて見るをもしらで家人の物盜むこ

あなうたてかしかまし　御前ちかき人の。夜居の僧のきく事を心得させんとていふ詞之

いひ〳〵てのはては　拾遺「世の中をかくいひ〳〵てはて〳〵はいかにやいかにならんとすらん

このうたの詞斗を用

うたておもふさまならず　男の心に思ふやうならずもどかしと見る女も先さしむかひてはふかく思ひがほにすかしたのむること之

情ありこのましき人にしられたる　情あり好色人にてありと世にもしられたる男はとこ之

心のうちにのみもあらず　男の心中の恥かしきのみにあらず。しわざ

はづかしきもの

をとこのこゝろのうち。いさときよゐの僧。（曲クマ隈同シ物のかくれこ）（忍びて人のする事をみるらんがはづかしきこ）（密ひそかにかくれゐるこ）みそかぬす人のさるべきくまにかくれゐて。いかに見るらんを。たれかはしらん。くらきまぎれに物ひきいるゝ人もあらんかし。（おのれもぬす人なればこ）おなじ心にをかしとや思ふらん。（是よりよゐのそうのはづかしき事をいふこ）よゐの僧はいとぶこ

ばづかしき物也。わかき人のあつまりてば。人のうへをいひわらひ。そしりにくみもするを。つくづくときゝあつむる心のうちもはづかし。（よゐの僧の心の中はづかしこ）あなうたてかしかましなど。御前ちかき人々の。物（もの〳〵氣色をしらせていふこ）けしきばみいふを。（若き人々のさまこ）きゝいれずいひ〳〵てのはては。うちとけてねぬる後も恥かし。（のち）男は（是よりをとこの心の中のうたて思はづかしき事をいふこ）ふさまならず。もどかしう心づきなき事ありと見れど。さしむかひたる人（女をこ）をすかしたのむる（契る心こ）こそはづかしけれ。まして（心につく事なきこ）なさけ有このましき人にしられたるなどは。（稍よく女をすかしたのめて淺からず思ふ人と女におもはするが恥かしこ）おろかなりと思ふべくももてなさずかし。心のうちにのみもあ

にもうちとけがたき所有と之

我が事をばしらで
男の心中を察していへる詞之。女の我が事をもかく人にかたらるゝをしらで。只かく外の女の事をかたるを。我をこよなく思ふ故かたる成けりとのみ女の思はんかと男の思ふが恥かしきと之
心もなき物なめりと
又あはとと思ひつめたる男に對しては。心もなき女ぞと見えてもはづかしからぬと之

さすがに人のうへをば
さやうに情なき男の。かへりて人の事はうらみもどきて。我が非をいひつくろふと之

たゞにもあらず成たる
彼宮仕へ人の襲姫せしをも情なく見捨て其事をもとりあへずしてやみはてしと之
[訂]弘云。萬歳抄に。成たるは成ぬるに作る。又結句「などをもしらでやみぬるよ」とあるを。活本には。「などきようとてなどもあめるよ」とあり

らず。又みなこれ（此女の事はかの女にかたりなどすること之）が事ばかれにかたり。かれが事ばこれにいひきかすべかりなめりとおもひやすらんと思ふこそはづかをばことよなきなり（こゆる事なく思ふこと之）へかめるを。我がことをばしらで。かくかたるしけれ。いであはれ。又あはじと思ふ人にあへば。心もなき物なめりと見えてはづかしくもあらぬ物ぞかし。いみしく哀に心ぐるしげに見捨がたき事などを。いささか何事とも思はぬも。いかなる心ぞとこそはあさましけれ。さすがに人の上をばもどき。物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮づかへの人などをかたらひて。たゞにもあらず成たるありさまなどをもしらでやみぬるよ」（男の心を推察して清少のいへること之）（女の心こたのもしげなしと見かぎりし男にあへばこと之）（げなき男の事をいふこと之）（くむくつけきさまと之）（さやうに情もしらぬ男には聡かしき事なき心と之）（彼たのもしげなき男の情なき男のさまと之）（親兄弟なども是もたのもしげなく情なき男のさまと之）

むとくなる　無德也ぜんなくよしなき事と
[增]源氏乙女の卷に「水のうへむとくなるけふのあつかはしさかな」とあるも此所と同意之。無詮などいふにかなへり

すまひのまけて
相撲の節とて禁中にある也。年中行事哥合註云。相撲といへる事は諸國の供御人をめしあつめて。七月に相撲の節といふことをおこなひて。天子御覽ある也。始めか召合せといふ。後にすぐりてめされんずるなればぬきてと申す。下畧猶江次第雲圖抄に委し心と出來たる　イ本此次になま心をとりしたる人のそゞろなる事いひむづかりて一つにもふさゝと云々とあり。前のねたき物にあれば不用
[訂]萬歳抄にも。此次に「なま心おとりしたる人と心なることいひむつかりて云々」といふより數十句あれど大方は上の五卷に。ねたきものとある末文と大同小異にて重復すれば省きつ

こまいぬしくまふもの〻　和名四。曲調類高麗樂曲の中に。狛犬とてあり。此まひを舞もの〻輿に乘て躍るが無德なるにや。
伶人にとふべし　是は無德なる物にあらず例のふと書出たる筆すさびなるべし。佛眼尊は曼陀羅圖の中央にあり。一切諸の佛菩薩に圍繞せられ。諸の佛菩薩の功德を具足せり。亦佛母尊とも號せり。瑜祇經云。時金剛薩埵對二一切如來前一忽然現二作一切佛母身一住二大白蓮一身作二百日暉一兩目徴笑二手住レ臍如入三奢摩地一從二一切支分一出生十恒河沙倶胝佛一々佛皆作二禮敬一下畧。此修法の次第等眞言家秘密也。かの家に尋ぬべし　[訂]濱按。例の筆すさびにはあらず。こは修法はといへる一段之。かくいへるは下文陀羅尼ほなどの例なり

むとくなる物
しほひのかたなる（干潟之）大なる舟。かみみじかき人の。かづらとりおろして髪けづる程。大なる木の風に吹たふされて。根をさゝげてよこたはれふせる。すまひのまけているうしろ手。（感勢もなき主の從者を勘當すること之）えせものゝずさかんがふる。翁のもとゞりはなちたる。人のめなどの。（妻之）すゞろなる物えんじしてかくれたるを。必尋ねさとがん物をと思ひたるに。さしも思ひたらず。ねたげにもてなしたるに。さてもえ旅だちねば心と出來たる。こまいぬしくまふ物のおもしろがりはやり出てをどるあし音」（男のたづねまどはんと思ひしと之）（怨之嫉妬する心之女の家出したること之）（女の外に家出してもえねぬと之）（我と女の）

修法は。佛眼眞言などよみたてまつりたる。なまめかしうたふとし」

はしたなき物　物の相應せぬ心ゑ。よわさ物につよくあたる類ゑ

[增]源按。今いふつまらぬといふにちかし。語の原ははしたなる意にてなきハそへたる詞のみゑ

弘云。はしたは。源氏末摘花の卷に「はしたなる大きさの女」竹取に「立つもはしたなる居るもはしたにてゐたまへり」其他にも多くある詞なれど俗にいふ不都合の意ゑ。なきは。いとけなき。いはけなき。などのなきと同意にて甚のもトの意ゑ。源氏夕顔の卷に「はしたなきほどにならぬさきに」とあるも甚不都合の時分にならぬ前にと解してよく適ふべし。故に此所も甚不都合なるものといふ意ゑ

まして物とらする折はいとゞ

[訂]只よばぬにさへさし出るに。まして物とらする折はいとゞはしたなきの意ゑ。原註わろし今改めつ

其人のおる前

其そしられたる人の前にて童の意地わるく告たるなるべし

八幡の行幸　一條院の行幸ゑ。榮花物語さまゝの悅びの卷云。永延元年といふ二月は例の神わざどもしきりて。所々の使たち何くれといふほどに過ぬ。三月は石清水の行幸あるべければいみしいそがせ給ふ云々。此時の事にや江次第十六に。石清水行幸の次第あるべけれど今俄たりさばかりの御ありさま

還幸の諸官供奉のめでたき帝の御ありさまにて。女院の御消息を敬せさせ給ふ事ゑ

みなあらはれ　顯れなるべし。泪に白粉の

○はしたなきもの

こと人をよぶに。我(か)ととてさし出たるもの。まして物とらする折はいとゞ、おのづから人のうへなどうちいひそしりなどもしたるを。をさなき人のきゝとりて。其人のある前にいひ出たる。哀(あはれ)なる事など人のいひてうちなくに。げにいと哀とはきゝながら。泪(なみだ)のふつといでこぬいとはしたなし。なきがほつくり。けしきことになせど(泪いでこねばゑ)いとかひなし。めでたき事をきくには。又すゞろにたゞいできにこそ出くれ。八幡(やはた)の行幸(ゆき)のかへらせ給ふに。女院(一條院の母后東三條院の御樓敷ゑ)御さじきのあなたに御こしをとどめて。御せうそこ申させ給ひしなど。(女院よりの御消息なるべし)いみしくめでたく。さばかりの御ありさまにてかしこま(御消息を敬し申給ふとゑ)り申させ給ふが。世にしらずいみしきに。まことにこぼる(清少の感涙ゑ)れば。けさうしたるかほもみなあらはれて。いかに見くるしかるらん。せんじの御使にてたゞのぶの宰相中將の御(化粧ゑ)(齋信卿前にあり)(女院)

おちたるゑ

せんトの御使　帝より女院への御使ゑ。宣旨御使なるべし

[illegible]身四人　宰相中將の召具せられしゑ

すこしさほうよりおりて

女院の御樓敷より遠くより齋信卿下馬し給ふなり。禮義ゑ

院の別當　女院の大別當ゑ。職原抄追加云。院廳

大別當　大臣公卿清華之人任レ之

女院も大畧。院と同云々

さてうちわたらせ

女院の御樓敷の前を帝の渡御ゑ

それにはながきを

かやうのめでたき事には清少の泪とめがたくて笑はるゝ物の哀なる事をきゝてはかへりて泪出てぬことのありとなるべし

かうだにおもひまゐらするもかしこしや

いはんや帝女院などの御事は。猶かやうにおもふも恐れ多しとゑ

くろ戸より

黑戸。拾芥に瀧口の戸の西とあり。大鏡云。こまつの帝と申す此御時に藤壺の上の御局の黑戸はあきたると聞侍るはまことにや

の御樓敷へゑ

さじきにまゐり給ひしこそ　いとをかしう見えしか。只隨身四人(ずいじんしにん)いみしうさうぞきたる。馬(句)そひのほそうしてたるはかりして。二條のおほぢ(大路ゑ)ひろうきよらにめでたきに。馬をうちはやして(齋信卿ゑ)いそぎまゐりて。すこしとほくよりおりて。(馬をはやめてゑ)そばのみすのまへにさふらひ給ひし。院の別當(ゐんのべつたう)ぞ申給ひし。(宣旨の取次申女院の御目さほりならぬかたのゑ)御返しうけ給りてまたはしらせかへりまゐり給ひて。(齋信卿ゑ)(前に馬うちはやしてとある首尾ゑ)(給ふゑ)(女院の御返事ゑ)

御こしのもとにてそうし給ひしほど。いふもおろかなりや。さてうちわたらせ給ふを見奉らせ給ふらん女院の御心思ひやりまゐらするぱ。とびたちぬべくこそおぼえしか。それにはながきをしてわらはるゝぞかし。よろしきぱのひとだに猶此世にぱ。めでたき物を。かうだにおもひまゐらするもかしこしや」(大かたの人の美是より道隆公のめでたかりし事ゑ)

關白どのゝくろ戸より出させ給ふとて。女房のらう(廊ゑ)に隙なくさふらふを。あないみしのおもとだちや。翁をばいか(中關白どのゝことばゑ)(御許女房をの給ふゑ)

權大納言殿　勘物云。伊周公正暦三年權大納言

したかさねのしりながく　桃花蘂葉云。裾は下襲の尻也。昔はつゞけたるを着する時煩ひ有によりて。切はなして着レ之也。仍一説としてかはる事なし。たけは代々の不同也。但近代攝家に用來る分は。納言以前は八尺。大臣一丈。關白の時一丈二尺ばかりと。大槩かくのごとし。又可レ隨レ時

藤つぼのへい　和名云。飛香舍在二弘徽殿北一布知豆保

宮の太夫殿　勘物云。御堂正暦二年權大納言中宮太夫如レ元

榮花物語三云。六月一日正暦元年后にたゝせ給ぬ定子太夫には右衛門督どのをなしきこえさせ給へれどゝあり。是中關白の御弟御堂の關白道長公と

忌の日　齋日の事と。六齋日には殺生を斷事。拾芥にも見ゆ

にをこなりと（老人をわらはんと）わらひ給ふらんと わけいでさせ給へば。戸口に人々の色々の袖ぐちしてみすをひきあげたるに。權大納言殿御くつ（關白どの〻沓）とりてはかせ奉らせ給ふ。いと物〳〵しうきよげによそほしげにしたがさねのしりながく所せくさふらひ給ふ。まづあなめでた。大納言ばかりの人にくつをとらせ給ふよと見ゆ。山のゐの大納言。そのつぎ〳〵。さらぬ人々くろきものをひきちらしたるやうに。藤つぼのへいのもとより。とうくと でんのまへまでゐなみたるに。いとはそやかにいみしうなまめかしうて。御はかしなどひきつくろひやすらはせ給ふに。宮の太夫殿の清涼殿のまへにたゝせ給へれば。それはゐさせ給ふまじきなめりと見る程に。すこしあゆみ出させ給へば。ふとゐさせ給ひしこそ。猶いかばかりの昔の御おこなひのほどならんと見奉りしこそいみしかりしか。中納言の君の。忌の日と

（女房の中へ出給ふと）（關白どの〻さまと）（道頼卿と）（御弟たちと）（居並也）（太刀と）（中關白どのと）（道長はつくばらせ給ふましきかとおもへばと）（道長公つくばらせ給と）

たべ其ずゞしばし　句を切べし其珠數を暫給はれと。中納言のあまりに行給ふをあざけりざれて。珠數をもとりて妨るさまと

猶いとこそめでたけれ　中納言をば笑へども實に關白殿の果報はめでたきと

佛になりたらん　とても宿業の善果をうけば。關白どの〻御身よりはおこなひて佛果をえまほしきと

太夫どの〻　道長の中關白殿につくまはせ給ふ事と

此のちの御ありさま　道長公の後々の御榮花を后宮御存命にて見給はゞと。此草紙は清少の老後后宮薨去の〻ちかけるにや

ことわりとおぼしめされ　かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を。后宮おぼしめしあはせば。我かく感下おもひし事はことはりと思召れんと

（くすみおこなふと帚木卷に法けつきくすしからんとある詞と）

てくすしがりおこなひ給ひしを。たべ其ずゞしばし。おこなひてめでたき身にならんとかとて。あつまりてわらへど。猶いとこそめでたけれ。是より此關白殿などのやうの果報をえんとておこなひ給ふかと（句）（して）りたらんこそ。是よりはまさらめとてうちゐまはせ給へるに。又めでたくなりてぞ見まゐらする。太夫どの〻ゐさせ給へるをかへすゞきこゆれば。例の思ふ人とわらはせ給ふ。まして此のちの御ありさま見奉らせ給はましかば。

（后宮の御さまをほむると）（清少の中と）（后宮の御詞といつもあやしき事を感しおもふ人と）

ことわりとおぼしめされなまし」

九月ばかり夜一よふりあかしたる雨の。けさはやみて。あさ日の花やかにさしたるに。せんざいの菊の露こぼるばかりぬれかゝりたるもいとをかし。すいがいらもんすゝきなどのうへに。かいたるくものすのこぼれのこりて。所々に糸もたえざまに雨のかゝりたるが。しろき玉をつらぬきたるやうなるこそいみしうあはれにをかしけれ。す

（是より例の筆すさびと）（秀垣と）（羅文薄と）（蜘の巣かく事と）（誰としらず）

たべ其ずゞしばし　句を切べし其珠數を暫給はれと。中納言のあまりに行給ふをあざけりざれて。珠數をもとりて妨るさまと

猶いとこそめでたけれ　中納言をば笑へども實に關白殿の果報はめでたきと

佛になりたらん　とても宿業の善果をうけば。關白どの〻御身よりはおこなひて佛果をえまほしきと

太夫どの〻　道長の中關白殿につくまはせ給ふ事と

此のちの御ありさま　道長公の後々の御榮花を后宮御存命にて見給はゞと。此草紙は清少の老後后宮薨去の〻ちかけるにや

ことわりとおぼしめされ　かく威勢ある御堂殿も道隆公にはつくばひ給へる事を。后宮おぼしめしあはせば。我かく感下おもひし事はことはりと思召れんと

（くすみおこなふと帚木卷に法けつきくすしからんとある詞と）

糸もたえざまに雨のかゝり　蜘の糸のきれぬべく雨のかゝりたると

いとおもげなりつるに　イ本にの字なし。其本にしたがはば。いとおもげなりつる露のもつるにとつゞけて見るべし。露の風情まさりて面白にや

こし日たけぬれば。萩などのいと咲こぼれしまゝ　おもげなりつるに。露のイニナシ可然か　たれはおきあがりしゝまへあがりたるいみしういとをかしといひたる。人のこと　露にふしたるかこぼれ　人の心千差万別なればゝちにはつゆをかしからじとおもふこそ又をかしけれ　是より亦別段ゝ　七日のわかなを。人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに。見もしらぬ草を子どものもてきたるを。何とかこれをはいふといへど。とみにもいはず。いざなどこれかれ見あはせて。みゝな草となんいふといふものゝあれば。うべなりけり。きかぬかほなるはなど笑ふに又をかしげなる菊の生たるをもてきたれば。　菊の若はへ初春にもある物ゝ　清少のうたゝ

つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり」　助字ゝ

といはまほしけれど聞いるべくもあらず」　子供は哥の心もなければゝ是も耳無の心ゝ　是より別段ゝ　太政官廳ゝ　定考ゝ

二月くわんのつかさにかうぢやうといふこととするは何事

さみにも　頓の字ゝ。やがてこたへもせぬゝ

いざなどこれかれ　引率也。いざ見給へなど人々をさそひ儲す心ゝ

むべ成けり　彼子共きかぬかほなるは尤ゝ

耳無草なればゝ

つめど猶哥　此五文字草を摘に。人をつみおどろかす心をそへたり。つめどもきかぬかほにこたへぬはつれなし。あまたある中には聞といふ草もあるものをゝ。菊を添てゝ

二月くわんのつかさのかうぢやう　是二月列見の事なるべし。列見定考。始終の公事なればかやうにいへるにや。江次第の釋奠の所にも當二列見定考一日上萬上卿參二釋奠一例天暦二八十一云々。

くわんのつかさとは　太政官の官人を云ゝ。百寮訓要云。太政官といふは眞實朝家の政を成敗する所ゝ。今官の廳など申も此儀ゝ。大臣公卿政務を成敗の人は太政官の被官ゝ。辨少納言外記史など申す儀式官も皆太政官の内の官ゝ。列見とは。公事根源云。公卿辨少納言外記史など參りて太政官にて行へる公事ゝ。六位以下の藝能あるものを撰びて。式部兵部の二省より率してまゐれるを。上卿それを召よせて器量容儀を見る心ゝ。朝所并宴饗の座につきて義式あり。委き事は定考の所にしるし侍べし中畧。定考とは。公事根源云。朝所并宴饗の座につきて義ひけるゝ。上卿。官の東の廂の座に着て事を行ふ次に朝所につきて三献の義式あり。次に宴饗の座につく。各三献あり。大かた二月の列見におなし。式兵の二省より。諸司の畧の上日を撰成する事を列見といふ。それを書あつめて奏するを擬階奏といふ。此人々を撰び出て定侍るを定考とは申侍るゝ。定考と文字には書て侍れどもかうぢやうとよみ侍るが口傳にて侍る也。選叙令に委事はのせたり。其儀などは次第に見えたり

くゝなどはかけ奉りて　釋奠に孔子の像を掛てまつるにやとゝ。釋奠は二月上の丁の日なれば。おなゝ二月の中の公事をとりあはせていふなるべし。公事根源云。釋奠是は二たひ二月と八月とにあり。上の丁の日必おこなはる。大學寮にて孔子并に十哲の影をまつらる。上卿辨少納言などまゐりて朝餉の前に進む。藏人又一人御手水の間のかたの簀子にて。あれは何ものぞといふ。藏人答てふんやのつかさの奉れる昨日の釋奠の胙ぞと文字を長くいひて高く捧て。簾中に入ゝ中下畧。禮記王制に云く。釋レ菜奠レ幣禮二先師一。月令仲春將釋二奠之一。猶延喜式江次第等に委仁平三年八月台記に云く。先聖先師九哲像巨勢金岡所レ寄云云　イ本そうめいとて聰明これかの公事根源に明る日。釋奠の胙をまゐらするとある事ゝ。江次第五。釋奠の所に云く。寮官居二聰明一そうめいとて　以二折敷高盤等一蓋公卿一註聰明者胙也。餅白黒粢飯栗黄乾蕈也。胙字粢云音祚祭腦肉也　あやしき物などかはらけに　かの餅粢飯などなればゝ

にあらん。しやくてんもいかならん。釋奠孔子をまつる事ゝ　くじなどはかけ奉りてする事なるべし。そうめいとて。聰明也釋奠の胙ゝ　うへにもみやにもあやしきものなどかはらけにもりてまゐらする。

もてきたり　〔註〕原本にはもてきたるとあり。今活本によりて改めつ

へいだんといふ物を　餅餤　裏餅の中に鶏鴨などの子雜菜等をいれ。煮合せて四方にきりたる物ゝ。一名餅膝ともいふと和名にあり。是二月の列見

行成卿ゝ　頭辨の御もとよりとてとのもづかさ　使なるべし　などやうなる物を。　繪をつゝみたるやうなるものゝ　しろきしきしにつゝみて。梅の花のいみしく　むめのはなゝ　咲たるにつけてもてきたり。　清少への送物ゝ　ゝ列見の時すうるものゝ肴ゝ　餅餤　いだんといふ物を二つならべてつゝみたる成けり。そへ

にも八月の定考にも。上卿以下の公卿諸臣等に三献或は四献の〻ちすうる物なり。江次第列見の所に四献餅餤云々。定考にも闕事朝所宴座穩座等皆用二列見儀一と江次第八に見えたり

[増]和名抄云。楊氏漢語抄云。裏餅中納二煎合鵠鴨等子并雑菜一而方截。一名餅餤。玉篇云。餤逢濫反肴也

けもんのやうに書て　花文綾花文紗のたぐひのやうに。うるはしくかゝれしと。行成卿は三説の一人也

[訂]濱按。花文の説いかゞ。解文なるべし解文は今いふ願書の如く。諸司より諸省へかきあげをする下書と。其書法。朝野詳載などに多くありて目録の書法の如し。こゝもへいたんを奉るにこと〳〵しく目録に書て作名などして奉るも一の風流と。かの源順大江匡房などが目録歌も思ひ合すべし。餤註にちらしかきと云へるもともに誤と

みまなのなりゆき　任那成行行成卿の作り名なるべし

これなか　平惟仲。權中納言時武息。左中辨中宮大夫。大宰權帥中納言從二位公卿補征此辨少納言などのもとに行成より我得たるをまきらはし隠して間闕と列見定考に辨中少納言などに粉熟餅餤等をすゆる事あれば辨少納言のもとにと云と

たるたて文に。けもんのやうにかきて進上へいだん一つよみ例によりて進上如件。少納言殿にとて。月日かきて。みまなのなりゆきとて。おくに。此をのことばみづからまゐらんとするを。ひるはかたちわろしとてまゐらぬ也と。いみしくをかしけにかき給ひたり御前にまゐりて御らんぜさすれば。めでたくもかゝれたるかな。をかしうしたりなどほめさせ給ひて。御文はとらせたまひつ。かへり事はいかゞすべからん。此へいだんもてくるには。物などやとらすらん。知たる人もがなといふを。きこしめして。これなかゞこゝろしつる。よびてとへとのたまはすれば。はしに出て左大辨にものきこえんと。さふらひしていはすれば。いとよくうるはしうてきたり。あらずわたくし事也。もし此辨少納言などのもとに。かゝる物もてきたるに下部ゐどには。すべきことなどのもとにかゝる事やあると。とへば。さる事も侍らず。只とゞめてくひ侍

后宮御詞

是も行成のみづからの給ふたはふれと

后宮へと

惟仲の官

惟仲后宮のめし

清少詞后宮のめしにはあらずと

餅餤と

惟仲の詞と

后宮の聞せ給ひてと

上官のうちにて

下やう官は太政官の外記史などをいふと。其へいたんはもし太政官の官人などより得給へるかと

みづからもてまうてこぬ下部はいとされいたう前に行成の此男はみづから參んとするをといへるを請て自身持て來ぬ下部は非道ぞと。行成のみづからおはせぬをとがめし詞と。れいたうは道理にや。道理に背きもどりし心と。

下部さふらふ　彼清少のみづからもてこぬ下部はといへるに付て行成の下部侍ふとの給ふと

さやうの物ぞ　赤き薄様に書て紅梅に付たる物は哥よみてぞおこせたると思ひしにと

のりみつ　前に左衛門尉則光とて清少の哥よみしかは更に見侍らゝとてあふき返したる人と

なりやす　誰とも不知是も哥を嫌へる人に

やゝ笑ひてやみにし事を

清少に哥讃嘲られて。則光なども恥笑て止にしに。行成にはさはならで。此詞をいひおこせしと。閑白殿の前にて行成のほめ語給と。

これこそ見ぐるしき　人のほめ給ひし事を此草紙にかく事。見苦き自讃と

なゞてつかさ

是より清少ごとき女房などのいひまろひしそゞろごとをかけり。

清少の詞いかでさやうの事あらんと答る

清少の返事の詞と

行成のみづからの給ふ詞と

清少の出

行成の清少へと

清少の詞しざまの風流のものなればと

哥よみがましからぬが語ちひよきと

世上の我はがほする女はと

哥よみがましからぬ

無心と

道隆公なるべし

是は清少の事を道隆公へ行成の語給ひし事を云と

る。何しにとはせ給ふ。もし上官のうちにてえさせ給へるかといへば。いかゞはといらふ。只返しをいみしうあかきうすやうに。みづからもてまうでこぬ下部は。いとれいたうなりとなん見ゆるとて。めでたき紅梅につけて奉るを。行成の清少へと

すなはちおはしまして。下部さふらふとのたまへば。出たる。何しにとはせ給ふ。

合たると。行成詞しざまの風流のものなればと

るに。さやうの物に哥よみしておこせ給へるとおもひつるに。びゞしくもいひたりつる哉。女すこし我はと思ひたるは哥よみかましくぞある。さらぬこそ語らひよけれ。まろなどにさる事いはん人は。かへりてむじんならんかしとの給ふ。のりみつなりやすなど笑ひてやみにし事を。殿の御へに人々いとおほかりけるに語り申給ひければ。いとよくいひたるとなんの給はせしと人の語し。是こそ見ぐるしき我はめども成かし。なゞてつかさえはじめたる六位しやくに。しきの御ざうしのたつみのすみのついぢ

中宮職と

六位しやくに　新蔵人の笏に此築地の板をせし事清少の在世の比有しにや。つかさえしはじめさは任官の初めをいふ之。六位は蔵人なるべし。

[訂]弘云。六位の笏は粗末なる故にかくいへるなるべし。註は非之

ほそながをさもいひつべし　弄花抄に云。ほうなが貴女の着る物之。一﨟幼き上﨟の上にきる物之。其形細く長ければ其名さもいふべしさ之

なぞ

[訂]滑按。なぞは上の句につけてよむべし。下にかけよみてはなその詞のさちめなし。かゝろかきざま多くあり

[増]弘云。ほそなが。かざみ。からきぬ。下がされ。是等の事は装束抄に委

かざみはしりながさ　花鳥に云くかざみは童女のきる物之。西宮抄汗衫カザミ尻長き物なるべし

からきぬはみしかききぬさ　和名に背子形如二半臂一無レ腰云々。腰なきゆゑにみじかきゝぬさこそいはめさ之

うへのきぬのはかま　表袴の事之。桃花蘂葉云。表袴中少將より大臣大將に至る迄も着す。若年の時は白き浮線綾。窠霰の浮文を用る。裏は紅打平絹之下略

おほくち　桃花蘂葉云。赤大口生平絹紅に染て用る之。濃装束には。濃平絹也。名目抄云。大口は生平絹幼年ハ白。長年ハ紅

いで

[増]本居翁は俗にイヤマウさいふ語さ同じさ

の板をせしぞ。さらに西東をもせよかし。又五位もせよか(六位のみならで五位もさ之)しなどいふ事をいひ出て。あじきなき事ども(正躰もなき事を之)を。きぬなどにすゞろなる名どもをつけけんいとあやし。きぬの名にほそながをばさもいひつべし。なぞ。(何ぞさかめし詞之)かざみはしりながといへかし。をのわらはのきるやうに。なぞからきぬはみじかきぬとこそいはめ。(からきぬの短きをいはんさて之)されどそれはもろこしの人のきるものなれば。(からきぬさいふも尤さいはんため之)うへのきぬのはかまさいふべし。(句)下がさねもよし。又おほくち。(句)ながさよりはくちひろければ。(うへのはかま可用歟)はかまいとあぢきなし。(何のゆゑにいふ名ぞあぢきなしさ之)さしぬきもなぞ。あしぎぬ。(足をいるゝ物なればこ)もしはさやうの物はあしぶくろなどもいへかしなど。よろづの事をいひのゝしるを。いであなかしかまし。(清少詞之いでは發語の詞之)いまはいはじ。ね給ひねといふいらへに。(寢給はんは悪からんさ之あまりの事にいふ詞之)よゐの僧の。いとわろからん。夜ひとよこそ猶のたまはめと。にくしとおもひたるこゑざまにていひ出たりしこそ。をかしかりしにそへておどろかれに

いはれたり　滑云。此説いまだ考たらぬ之。いでの詞は。原何の義にて。いづれ。いづら。いづちなどのいづをいでとも通じていふにて今譯していはゞナンデモハヤ。ドウシテ。なごいふに近く疑の意をふくみながら物をいひさだむる詞之。物語にいと多し合考すべし

故殿の御ため　入道關白道隆公薨して後の事之。長徳元年四月十日に薨の由。榮花物語にあり

月さ秋さきして　朗詠管三品の句也。南樓翫二月之人月與レ秋期而身何去。文粹十四。願文の句也

いみしうけうの事にいひ　興ある事さ之。彼詠吟の事をの給ふ之。又希有の事にてもあるべし。いづれも大切の事さ之

ましてさおぼゆらん　齋信。清少に心ある中なれば。清少は一入齋信をめでたくおぼえんさ御たはふれの詞之

わざさよびもいでておのづから

しか」

故殿の御ために。(道隆公の忌日之)月ごとの十日。御經佛くやうせさせ給ひしを。九月十日しきの御ざうしにてせさせ給ふ。上達部殿上人いとおほかり。せいはんかうじにて。(清範前ニ註講師)とく事ともいと(説法之)かなしければ。ことに物の哀ふかゝるまじきわかき人もみななくめり。果て(法事果て之)酒のみ詩ずんしなどするに。頭中將たゞのふの君。(齋信卿前ニ註)月と秋とき(期)して身いづくにかといふ事をうち出し給へりしかば。いみじうめでたし。いかでかはおもひいで給ひけん。(后宮の御座にまゐりて此詠吟の事いはんさて之)おはします所にわけまゐるほどに。立出させ給ひて。(后宮出御之)めでたしな。(后宮の御詞之)いみじうけうの事にいひたる事にこそあれとの給はすれば。(清少詞齋信卿の吟の感ある事を申上んさてさ之)それをけいしにとて。物も見さしてまゐり侍つる也。猶いとめでたくこそ思ひ侍れときこえさすれば。(是より齋信さ清少の中の事をいへり)ましてさおぼゆらんとおほせらるゝ。(后宮の御詞之)わざとよびもいで。おのづからあふ所にては。(齋信の詞)などかまろを

齋信の清少を腮よびいでても。又自然あふ所などにてうらみ給ふ事を云ふ

殿上などにあけくれなき

今齋信の殿上人にて。清少もかく度々見ゆる時逢かたらはで。昇進の後など殿上にもあらざらん時は何を思ひ出にせんと也。齋信當宦頭中將ふ

さら也　勿論の事ふ

さもあらんのちには　若夫婦となりてはあたら齋信をえほめまゐらすまゝきふ

いかでか」句をきるべし

人のほむる時も夫婦なる身になりてほ。いかでかほめまゐらせんふ

心のおに出來ていひにくゝ

ほめたき折も心に夫婦とおもふ遠慮出來ていひにくからんふ。心の鬼とは心のあやまりを我と耻おもふやうの心ふ

それがにくからずはこそあらめ

夫婦なる人をほむるがにくきゆゑ。我は遠慮ありふ

かたひき

[增]榮花物語哥合の卷に

「うれしきはもろやのみかは梓弓君もかたひく心ありけり」

瀧按。此かたひきの詞。後に音便にてひいきといふはたゞひきをのべいふのみ。別の詞にあらず。堀河百首にも「梓弓ひき〳〵たれもいのるらん」とよめり

たのもしげなの事や

思ふ人を惡くいふを腹立人こそ賴もしけれ。それを詫しとはたのもしげなしふ。畢竟清少の逢まゝき氣色なれば。賴むかたなき心をこめていへるなるべし

八雲云うるはしく也

まほにちかくはかたらひ給はぬ。清少の思ひはなれしにはあちぬふ

ひたるさまにはあらずとしりたるを。いとあやしくなん。

さはかり年ごろに成ぬるとくいの。得意也いひかたらふ中の事ふ うとくてやむはなし。

殿上などにあけくれなきをりもあらば。何事をか思ひ出にせんとの給へば。清少の詞ふ さら也。逢事ほかたからねどもふ かたかるべき事にもあらぬを

さもあらんのちにはえほめ奉らざらんが口をしき也。う

への御前などにて。齋信をほむるを誰も役としてほむるにふ やくとあつまりてほめきこゆるにい

かでか。たゞおぼせかし。句實事はなくて只に心ばかり遁し給へふ かたはらいたく心のおに出來て

いひにくゝ侍なん物をといへば。齋信ふ わらひてなどさる人し齋信の詞ふ 夫婦なる人他人よりほむるもあれば逢見んのちも遠慮あるましき事ふ

も。よそめよりはかにはむるたゞひおほかりとの給ふ。清少詞

れがにくからずはこそあらめ。男も女も。けぢかき人を方引ふ 我おもふ人を人の少もそしるをはらだつを見れば清少は詫しきふ

かたひき思ふ人のいさゝかあしき事をいへば。はらだち

などするがわびしうおぼゆるなりといへば。齋信の詞たのもしげ

なのことやとの給ふもをかし」

しきにまゐり給ひて

行成中宮職にて清少とかたらひ給ひしふ

藏人所のかうやがみ

藏人所にある紙屋紙也。行成今藏人頭なれば。此所の紙を清少への後朝の文に用ゐられしにや。藏人所は校書殿にあり。拾芥云 恒例御物納藏人所云々。紙屋紙とは。弄花抄云。紙屋の人初ていろ紙をすき出せる也云々。北野のかみや川にてすきし紙ふ

まうさうくん　孟嘗君が函谷關ヲこえし事ふ。支旨百人一首抄云。孟嘗君といひし人秦王にとられしが夜にまぎれてのがれし時。函谷の關鷄の鳴ぬ限は人を通さず。孟嘗君が三千の客の中に鷄明をしてには鳥のまねをよくする物まねをしければ。誠の鳥も鳴て夜深に關を明て通しけり云々。

猶史記列傳十五ニ委

夜をこめて鳥の哥

發拾遺集ニ入。支旨云。はかるとはたばかるふ。相坂の關はゆるさゝとは逢事をゆるさゝとふ。總の心は明ふ。扨函谷の關と相坂とをやすらかに一首によみ出ける事上手のしわざふ。又ふに逢坂のよにといふ詞は助字ふ。遁遁軒云。夜深きに鶏の鳥をたばかり給ふとも。此逢坂は函谷のごとくにゆるすまゝきとふ。彼行成の夜深く歸りて心淺きやうなるを。まきらはさんとて。鳥のこゑに儲れてと鶏りの給へるを。さやうの鶏にたばかれては逢侍らゝとの心ないへるふ

頭辨のしきにまゐり給ひて物がたりなどし給ふに。夜い

とふけぬ。あす御ものいみなるにこもるべければ。うしに

なりなばあしかりなんとてまゐり給ひぬ。つとめて藏人

所のかうやがみひきかさねて。後のあしたはのこりおほ

かる心ちなんする。夜をとほして昔物語もきこえあかさ

んとせしを。とりのこゑにもよほされてと。いといみしう

きよげにうらうへにことおほくかき給へるいとめでたし。

御かへりに。いと夜ふかく侍ける鳥のこゑは。孟嘗君也歸さを急きんのにやときこえたれば。たちかへりまうさうくんのに

はとりは。かんこくくとんをひらきて。孟嘗ハ客三千八やうくのがれさ三千のかくわづか

にされりといふは。猶清少に逢んとの事ふ あふさかのせきの事なりとあれば。

清少のうたふ

夜をこめて鳥のそらねハはかるとも世にあふさかのせきはゆるさじ

心かしこきせきもりの侍るめりときこゆ。たちかへり。

たばかられて逢侍らゝとの心ふ 又行成よりふ

あふさかは人こえやすき哥
此返哥の心は。清少の僞の島には逢坂の關をゆるさじといへるをうけて。島のそられをはかるまでもなし。只此關はあけてまつぞといふ事にやとなり。清少に詞しりをとられていひやらんかたなさに。まげていひなしたる哥也。すでに逢語らふ中なれば。むづかしき。詞とがめにとりあはぬ心なるべし

のち〳〵のは　まうさう君のには島はとの
文ゝ。逢坂は人こえやすきの哥のことゝ
殿上人みな見てしは
清少のまうさうくんのにやといひ。夜をこめてとよみし文どもを感にたへずして人々に行成の見せ給ふとゝ
まことにおぼしけりとは
行成の我を眞實におぼすとは。此文を人々に見せ給ひしにて知たるとゝ。是我見ぐるしき手跡を人にみせられしか耻恨むる心をわざと裏ないふゝ
御文いみしくかくして
我文を人に見せ給へるが。滿足ならぬ事をいはんとてかへりて行成の文みぐるしければ。人には見せぬと。是もうらないふ詞ゝ。前には卜めの文は僧都にまゐらせのち〳〵のは后宮へ見せ申ゝし上にかくいへるにて。裏ないふと知るべし
心さしのほどをくらふるに
行成の人に見せ給ふも我をおぼす故ゝ。我が人に見せぬも行成の御ためなれば。心ざしはひとつぞとゝ。是もたはふれゝ
まろが文を云々
[訂]原本に是より別段としたるは非ゝ。諸本

行成のうたゝ
あふさかは人こえやすき關なれは鳥もなかねどあけて
まつとか
とありし文どもを。鳥の聲に騙されての文ゝもう〻歷緣ゝ前ニ註拜みてゝ懇望のさまゝ
行成の筆を執してゝ
つぎてとり給ひてき。のち〳〵のは御まへにて。后宮ゝ さてあふ
さかのうたは清少のまけて返哥せざりしとゝ實は清少のうたをほめて懇の給ふ詞ゝよみへされて。返しもせず成にたる。いとわ
ろしとわらはせ給ふ。是より行成の清少の文の事をいへる詞ゝさて其文は殿上人みな見てしはと
のたまへば。清少の答ゝまことにおぼしけりとはこれにてこそしり
ぬれ。名言秀哥などを人に聞せぬはかひなしとゝめでたき事など人のいひつたへぬはかひなきわざ
ぞかし。又見ぐるしければ。我見ぐるしき手跡を人に見せ給ふ恨みに懇かくいふゝ御文はいみしくかくして人に
露みせ侍らぬ心ざしのほどをくらふるに。ひとしうこそ
はといへば。彼人々に見せし事を遠慮なき事と清少のかこたんと思ひしにとゝかう物思ひしりていふこそ猶人々にはにず
思へと。思ひくまなくあしうしたりなど例の女のやうに清少の詞ゝこれは何事
いはんとこそ思ひつるにとていみしう笑給。ことはなぞよ
ぞよく見せ給ひしと悅こそめとゝ行成の詞ゝ
ろこびをこそ聞えめなどいふ。まろが文をかくし給ひけ

告上につゞけたれば。今諸本に從ひつ
いみしくうれしくなどまめやかにの給ふ
思ふ人にかくほめられて嬉しく思ふらんと眞實にの給ふとゝ。是もかの清少の行成にいひし事は。告うらないひたる戲ゝしらで。
經房のいへるとの心ゝ。まめやかといふに心を付べし
かのほめ給ふなるに
只ほめたまふが嬉しきに。又思ふ人々の中にてほめらるゝは二つ嬉しきとゝ。是も實にうれしきにはあらずたはふれゝ
それはめづらしいまのことのやうに
是も經房清少の戲ゝしらで。事あたらしく嬉しき事二つと悅ふと不審していへる詞ゝ

五月ばかり
[增]さつきとよむべし。五月頃といふ意ゝ
おどろ〳〵しきはやか
靈かゝるゝやうにきはをたてゝきつと人をよぶ心ゝ

おいこのきみにこそ
おいはあゝなどいふ詞也。此君は竹の名ゝ。晉の王子猷空宅の中に寄居して竹を植て嘯詠して曰何可ㇾ一日無ㇾ此君一この古事にて云ゝ
いさやこれ殿上に行て
殿上人達。此竹の哥よまんとてきたりしか

る又猶うれしき事也。人にみせばゝいかに心うくつらからまし。今より
も猶頼みきこえんなどの給ひて。後に。つねふさの中將。前ニ註經房
の詞ゝ清少にの給ふゝ給ふゝ
辨ばいみしうほめ給ふとばしりたりや。一日の文のつい
でに。孟嘗君のこたへ夜をこめての哥の事などかたり給ふ。思ふ人々のほめらるゝは
いみしくうれしくなど。まめやかにの給もをかし。嬉しき清少の詞ゝ
うれしき事二つありとゝ句
事もふたつにてこそ。かのほめ給なるに。又思ふ人の中に
侍けるをなどいへば。それはめづらしう。つねふさの詞ゝ事あたらしくて今始たるやう
にもよろこび給ふかなとのたまふ」
是より別の事ゝ
五月ばかりに。月もなくいとくらき夜女房やさふらひ給
ふとこゑ〳〵していへば。出て見よ。れいならずいふは誰
ぞとおほせらるれば。いでゞこはたれそこと。清少ゝ おどろ〳〵しうき
はやかなるはといふに。物もいはでみすをもたげてそよ
ろとさしいるゝばくれ竹のえだ成けり。管竹和名清少の詞ゝ おいこのきみに
とそといひたるをきゝて。竹をいれし人々聞てゝいさやこれ殿上にゆきてかた

と清少に此君といふ詞を先ぜられてにげかへるとていへる詞と

よび出てを　女房などよび出て諸ともによまんとのこゝろと

竹の名もとしらぬものを
清少は竹の名ともしらで殿上人達なれば此きみといひし物をと

此君とせうすと
朗詠。藤篤茂。晉騎兵參軍王子猷種而稱二此君一。これ本朝文粹十一に修竹冬青といふ事を賦したる詩序の詞と
殿上にていひきしつる事のほいもなくては
后宮の女房などと哥よまむといひ期したる本意もとげずして何とて歸給ひしぞと

らんとて。中將新中將六位どもなど有けるはいぬ。頭辨はとまり給ひて。あやしくいぬる物どもかな。おまへの竹ををりて哥よまんとしつるを。しきにまゐりて。おなじくは女房などよび出てをといひてきつるを。くれ竹の名をいととくいはれていぬるこそをかしけれ。たれがをしへをしりて。人のなべてしるべくもあらぬ事をばいふぞなどのたまへば。竹の名ともしらぬ物を。なまねたしとやおぼしつらんといへば。まことぞえしらじなどの給ふ。まめごとなどいひあはせてゐ給へるに。此君とせうすといふ詩をずして又あつまりきたれば。殿上にていひきしつるはいもなくてはなどかへり給ひぬるぞ。いとあやしくこそありつれとの給へば。さる事にては何のいらへをかせん。いまさらんとの心と中〳〵ならん。殿上にてもいひのゝしりつれば。うへもきこしめして興ぜさせ給ひつるとかたる。辨もろ共にか

（たれともしらず　なるべし　行成の詞と　仁壽殿のまへのくれたけ　后宮の御かたへまゐりてと　清少のこのきみといひし事と　たるかとと　清少はたれに習ひて此名をしりし　清少の詞と　清少はよもえしらじと行成の詞と　中將新中將などの詠吟と　行成の詞と　朝と約束の心と）

御文まゐらせたるにこの事をけいしたれば少納言命婦みかどの御文を后宮へまゐらするとて。此清少の名言を殿上人のほむる事を申上しとなり

とりなすとても
たとひ取なしていふとても。一向に跡なき事はかくほめ草にはせじとの心と

ゑんゆうゐんの御はての
圓融院一條院の御父帝と。正暦二年二月十三日に崩卅三。御はてとは御一周忌の事と。正暦三年二月の事と
［增］公任集はは。ゑにう院とかけり
みな人。御ぶくぬき
御一周忌過て服衣をぬくと。除服の被とて河原に出て禊事をなす事などあり
花の衣になど

へす〳〵おなじ事をずんじていとをかしがれば。人々いでゝ見る。とり〴〵に物どもいひかはしてかへるとて。猶おなじ事をもろこゑにずんじて。左衛門のぢんに入まできこゆ。つとめていとく少納言の命婦といふが御文まゐらせたるに。此事をけいしたれば。しもなるをめして。さる事やありしとはせ給へば。しらず。何ともおもはで云出侍しを。ゆきなりのあそんのとりなしたるにや侍らんと申せば。とりなすとてもとうちゑませ給へり。たれがことをも殿上人はめけりときかせ給ふをば。さいはるゝ人をよろこばせ給ふもをかし」

ゑんゆうゐんの御はての年。みな人御服ぬぎなどして。あはれなる事をおぼやけよりはじめて。院の人も花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出るに。雨いたうふる日藤三位のつぼねに。みのむしのやうなるわらはの。おほき

（建春門と　禁中の女房と　翌朝と　清少の職に侍らぬをめして后宮のと　清少の答と　是より后宮の御心ばせをいふと　一條院と　圓融院にめしつかへし人と　禁中と　一條院の御めのとのよし後拾遺集の詞書に見えたり）

爵などせし時。遍昭「皆人は花の衣に成ぬ之苔の袂よかわきだにせよ」。古今にあり。
又榮花物語四にかくて月日も過もて行て。正暦三年に成ぬ。哀にはかなき世になん。二月には。故院の御果あるべきなれば。天下急きたり。御はてなどせさせ給つ。世の中のうすにびなどはて〜花の袂に成ぬるもいと物のはえあるさま之云々
みのむしのやうなるわらは　雨ふりて笠蓑きたるさま之。誰方よりともしらすまゝきさてかやうにせし之。
さなんとはきかせ奉らず　かやうの使有と藤三位殿には申さずと之。物忌なれば遠慮して之
くるみいろ　源氏にもたまの胡桃色の紙とあり。表は香色に裏は自き帝之
これをだにかたみと哥
後拾遺の哥之。詞書この草紙と同心之。これをだにとは。服衣を成ともと之。しひしばの袖とは。八雲御抄に四位の異名云々。服をだに故院の形見と思召すに。藤三位は服ぬぎ加階せしよと之。藤三位四位より加階せしなるべし。山僧のせしやうに態都にはと之
仁和寺の僧正　榮花物語三云。仁和寺の僧正ときこゆるは。土御門の源氏のおとゞの御はらからにおはす。にわゝのみことき〻こえける御子におはす云々。寛朝僧正也。式部卿敦實親王の三男雅實公の御弟之
藤大納言　圓融院の別當ときこゆ。いまだ誰とも勘かへ侍らず

椎の葉のしろきにや
なる木のしろきにたて文をつけてこれ奉らんといひければ。藤三位のかたの女房の詞之いづことよりぞけふあす御物いみなれば。御しとみもまあけぬと之
ゐらぬぞとて。藤三位の女房の詞之しもはたてたるしとみのかみよりとりいれて。さなんとばきかせたてまつらず。物いみなればえ見ずとて。なげしの上などにかの木の枝の文を之かみについさしておきたるを。つとめて手あらひて。藤三位之其卷數くわんじゅ哥とはしらて祈念の卷數とおもふ之とこひてふしをかみてあけたれば。くるみいろ厚肥之あつきと之といふまきしのあつごえたるを。あやしと見てあけもて一條院の態せさせ給ひし之ゆけば。老ほうしのいみしげなるが手にて」一條院御うたこれをだにかたみとおもふ都には葉がへやしつるしひしばの袖
とかきたり。藤三位の心之あさましくねたかりけるわざかな。たれがしたるにかあらん。仁和寺の僧正にやと思へど。よもかゝることのたまはじ。猶たれならん。藤大納言ぞかの院の別當そおはせしかば。其したまへる事なめり。これをうへの御

まへ宮などにとうきこしめさせばやとおもふに。いと心物いみゆゑ早々まゐりていはぬを心もとなきと之もとなけれど。猶おそろしいひたる物いみをし果むと陰陽師などの勘へいひたると之ねんじくらして。まだつとめて藤大納言の御もとに此御申上る事之返しをまてさしおかせたれば。すなはち又返事しておかせ給へりけり。それをふたつながらとりていそぎまゐりて。藤三位の申上る事なん侍しとうへもおはします御まへにてかゝる事なん侍しとうへもおはします御まへにてかたり申給ふを。宮后宮之はいとつれなく御らんじて。帝の御しわさを知ながらしらぬさまと之后宮の詞之藤大納言の手のさまには椎柴のかたの手跡の事之あらで。法師にこそあめれとのたまはすれば。藤三位詞さてはこれはと之さばとばたれがしわざにか。物すきなると之すき〻しきかんだちめ僧がうなどは誰かはある。それにやかれにやなどおぼめたる心之きゆかしがり給ふに。帝之うへ。此わたりに見えしにこそはいとよくにためれとうちほゝゑませ給ひて。今ひとすぢ御一つといふ心之づしのもとなりけるをとり出させ給へれば。いであな心藤三位詞うゐとなりてはぢ之おぼされよ。あなかしらいたや。いかでき〻侍ら

それをふたつながら
椎柴の袖のうたと藤大納言の返歌と二つをもちて。藤三位參内すると之

僧がう之　僧綱之。僧正僧都律師などをいふ
此わたりに見えしにこそはいとよくにためれ
其老法師の哥は。帝の御かたにあるうたに似たるとて。御厨子のもとなる御詠草を取いでさせ給ふ之
これおぼされよ
是いかなる御事そおぼしめして御らんあれと之。猶誰がしわざとしられぬゆゑ之

おにわらは〜　みのむしのやうなるを有し首尾乙。鬼童丸とて古ありし乙

小兵衛　后宮の女房前にありし人乙

ひきゆるがし奉りて

后宮を藤三位のかこちまゐらせらるゝさま乙。帝をかこち申さんは憚りあれば乙

いとほこりかにあいぎやうづき

御乳母なればほこれるものから。さすがに愛敬ある乙

だいはん所にも　禁中の臺盤所は女房の侍ひ乙。彼刀自がわらはを尋ね出むため乙

文とりいれし人に

かの使のわらはゝ是かとて其文うけとりし藤三位の女房に見すれば乙

つれ〴〵なるもの

[訂]原註に。しづかにさびしき乙とあるは。いさゝか異乙。つれ〴〵は俗にタイクツといふを乙

ところさりたる物いみ

ふかくつゝしむ時家をさり外にて物忌する乙

んと。たゞせめにせめ申てうらみきこえてわらひ給ふに。帝のしわざと乙やう〳〵おほせられ出て。御つかひにいきたりけるおにわらはゝだいはん所のとじ刀自也女官乙といふものゝ供乙ともなりけるを。こひやうゐがかたらひ出したるにやありけんなどおほせらるれば。宮もわらはせ給ふを。ひきゆるがし奉りて。などかくはからせおはします。猶うたがひもなく手をうち打乙洗ひて。伏をがみ侍し事よとわらひねたがりゐ給へるさまも。山法師の卷數と思ひし故乙いとほこりかにあいぎやうづきてをかし。さてうへのだいはん所にもわらひのゝしりて。つぼねに藤三位のつぼねにおりて。みのむしのやうにて來し童乙此わらはたづね出て文とりいれし人に見すれば。それにこそ侍めれといふ。たれかとらせしぞといへば。しれわらはが乙無知〳〵とうちゐみて。とものかくもいはではしりにけり。藤大院別當乙納言後に聞て笑ひ興じ給けり」

つれ〴〵なるもの

うまおりぬ双六

馬は雋の事乙。晉書袁彥道が傳に。投レ馬絶叫とあり。是博局にむかひての事乙。うまおりぬは双六に思ふ目のおりぬ乙

[訂]瀧按。雋を馬ともいへば。うまともかくまトきにはあられど。ことやう乙。萬歲本にめさあるや正しかるべき。馬も吳音にて龍馬などいへば。なまさかしらなる人の書ひがめたるにもあるべし

をとこのうちさるがひ

前にさるがふ事とあるにおなじ。猿樂とて狂言などいひたはるゝ乙

物いみなれど　つゝしむ折なれど興ある人なればいるゝと乙

みそひめ　糒糟乙或說云。非米非粥之義也と和名にあり。衣にひめのりして張ば。こはくせんためなるにぬれてはとり所なかるべし

あと火の火ばし

門燎火筋也。あとかと五音相通也。和名云周禮云。喪設二門燎一俗云門火。但此一句禁忌の事なれば時によりて義をつくまトき歟

[增]瀧按。相通も詞によれり。このあとびは即跡火の意にて。喪を送り出せしあとにてたく意なれば。あと火といふべし。顏氏家訓。喪出之日門前燃火云云

ところさりたる物いみ。万本めおりぬうまおりぬすゞろく。除目に官みえぬ乙ぢもくにつかさえぬ人のいへ。雨うちふりたるはましてつれ〴〵なり」

つれ〴〵なぐさむる物

物がたり。ご。すゞろく。三四ばかりなるちごの物をかしういふ。又いとちひさきちごのものがたりしたるが。ゐみなどしたる。菓子乙くだ物。をとこのうちさるがひ物よくいふがきたるは物いみなれどいれつかし」

とりどころなきもの

かたちにくげに心あしき人。衣揚糟也みそひめのぬれたる。これいみしうわろき事

事いひたると。よろづの人にくむなる事とて。いまとゞむべきにもあらず。是も取所なき物乙又あとびの火ばしといふ火筋和名事などてか。世句になき事ならねば皆人しりたらん。げにかまトき事なれども乙出まトきにもあらずと乙

きいで人の見るべき事にはあらねど。此さうしを見るべ此まくら草紙の畢下乙

などて　句をきるべし。禁忌の事ながらいかでか書出まゝきぞと之　あやしき事ばは。衣掲糟之。にくき事は。あとびは人のいみにくむ事なればと之

りんゝのまつり　江次第六云。石清水臨時祭三月中午日有二。午時用二下午。賀茂臨時祭十一月下酉日なほ次第等委。圖は雲圖抄にあり

おまへばかりの事　臨時の祭に御前の座といふ事あり。庭座ともいふにや。外になき事なれば御前ばかりの事といふなるべし。江次第六畧云。御前座事。御裝束をはりて主上出御ありて。倚子に着御あり。藏人頭召の由を告て。公卿以下壁下の座に着く。又藏人頭仰せを承て使舞人以下を召て。一献二献過て大臣氈座に着く。さて三献過て垣下の公卿着座あり。衝重をすゑさて陪從音樂をなして。哥曲の聲を發す。四献五献過て舞人陪從重盃を給ふ。さて使以下退出すれば。内藏寮撤二饌物等一。掃部撤レ座。主殿掃除云々。雲圖抄に圖あり

[増]ばかりは。ほどの意之。つれの詞にもいと多し

しがくもいとをかし　試樂りんゝのまつりの音樂を先こゝろむる心之。石清水の臨時祭の試樂は。祭の前一兩日に行レ之。賀茂同レ之。雲圖抄にあり。圖もあり。御殿の孫庇に倚子たてゝ出御ありて。四位藏人。舞人をめせば。舞人竹臺のもとにて竹の枝を折かざして。仁壽殿の廊の下より御前につらなり。陪從近衛の召人。求子うたひ。琴笛ひちりきのれをあはせ。舞人舞終りて大比禮かへしうたひてまかり出る由。公事根源にあり。猶次第は江次第ニ委

かもりづかさのたゝみども　百寮訓要云。掃部寮は御裝束の事を奉行する所之。但是もむしろ風情の物を沙汰する所之云々。職原抄にも掌二鋪設事一云々

つかひは北おもてにし　賀茂の臨時祭の使の座は北面。南祭の時は又南面なるよし雲圖抄にあり。此草紙のさまは南祭のよしなれば不審之。よりて是らはひが事にもやあらんといへるにや。大やうに書たるなるべし

ついかされども　石清水の臨時祭の御前の座に内藏寮衝重をすうる事江次第六に見ゆ。所の衆は舞人陪從などの瓶子を執るついかされをすうる事おぼつかなし。但石清水還立御前儀に突重を雜色以下投レ之とあり。此時所の衆もすゑわたすべし。こゝは此儀式をいへるにや

やくがひ　口訣あり

[増]和名抄龜貝類云。錦貝

辨色立成云。錦貝。夜久の斑貝。今按。本文未詳。但俗説西海有二夜久島一彼島所レ出也

濱按。田各本和名今按以下作所謂鳥盃之紅螺之也とあるにてこゝのやくがひも貝にて作れる盃なることしるし。されば女ぞ出てとりけるとは盃をとるとゝ之

[訂]濱又云下にうちこぼしては。酒をこぼしし之。春曙抄甚誤なり

かしこきをさめどのに　納殿。也足軒御説云何にてもをさめおかるゝ所之

かしこく。はやみちにやくかひをいれおく所にしてといはんとて。をさめどのといへるなるべし

かんもりづかさの　御前の儀果て舞あるべきさま之。江次第六に掃部撤レ座主殿掃除とある是之

承香殿のまへのほどに　承香殿は。和名に仁壽殿の北にあり云々。拾芥大内裏の圖に。清涼殿の丑方にあたる殿之。樂人舞人此殿のまへより吳竹臺をへて清涼殿の前へ出る樣之。江次第六臨時祭舞略云。主上出御有て王卿着坐して殿上人壁下の座に着。さて使舞人などを召。陪從音樂をなす。藏人所の雜色二人御琴を昇て吳

き物と思ばぞりしかば。あやしき事をも。にくき事をも。只思ばん事の限りをかゝんとて有し也」

なほ世にめでたき物

りんゝのまつりのおまへばかりの事は何ごとにかあらん。しがくもいとをかし。石清水臨時祭之春は空のけしきのどかにてうらゝとある。清涼殿の御まへの庭に。掃部かもりづかさのたゝみどもをしきて。つかひは北おもてに。主上の御前之まひ人は御前のかたに。これらはひか事にもあらん」

所の衆ども　陪從地下の樂人之

ついかされども　石清水の臨時祭の御前の座に内藏寮衝重をすうる事江次第六に見し。べいじうも其日は御前に出いるぞかし。くぎやう殿上人は。かばるゝ盃とりて。句ばてにはやくがひといふ物。をのこのとりひろふさへ見にくきにと之のこなどのせんだにうたてあるを。御前に女ぞ出てとりける。思ひかけず人やあらんともしらぬに。火燒屋又炬舍同河海にあり ひたき屋よりさし出て。おほくとらんとさわく物は中〳〵うちこぼしてあつかふ程に。かるゝしくと之かろらかにふととり出ぬるものには。納殿宜陽殿にありこゝはたとへと之おかしくきをさめどのに火燒屋をしてとりいるゝこそをかしけれ。かんもりづかさのものどもたゝみとるやおそきと。とのもりづかさの官人ども。手ごとにはゝきとりすなごならす承香殿のまへのほどに。笛をふきたて音樂すると之ひやうしうちてあそぶを。とく出こなんとまつに。うどばのうたひものと之 有度渟級河舞 江次第に漸進出至三吳竹臺下一とあり 藏人所雜色二人昇二御琴一とあり ようたひて竹のまへのもとにあゆみ出てみことうちたるほどなど。いかにせんとぞおぼゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせてふたりばしり出て西にむかひて立ぬ。そゞろに面白きさまと之 一舞二人先進云々

竹の臺のものに至る。主上藏人頭をめして一の舞を仰せ定らる。舞人すゝみて駿河舞をまふこ。先一の舞二人進出てまへり。其後次々の舞あり。舞人上より退て竹臺の東に至る。次に右の袒ひて進みて求子をまへり。舞をはりて舞人下より退く。大比禮をかなでし後。使舞人退出して。承香殿の馬遞を經て。建春門にいたり。それより賀茂にまうづ。猶委

あやもなき

[訂]源云。注非ゝ。こは歌詞ゝ

こま山

[訂]源云。万歳本云。こま山は儺馬樂の瓜作かさあり

うさはまうたひ

賀茂の臨時の祭の哥ニ定家卿「ふる袖はみだらし河に影見えて空にぞすめるうさはまのこゑ

ぬきたれつるさま

江次第曰。袒ノ有。只袒ニ袍袖許ヲ。不レ袒ニ半臂下重一

かへりだちの御かぐら

むかしは南祭に還立なくて。賀茂斗に有し由雲圖抄にあり。公事根源云賀茂の臨時の祭。先兼日に試樂調樂などいふ事あり。當日の儀式御禊庭座など石清水に同。社頭の儀果て使舞人歸まゐりて。還立の儀あり。孫廂に御障子をたつ。御引直衣に御草鞋をめす。額間より出御あり階間のさほりの庭つぎ〳〵出るに。あしふみをひやうしにあはせてば。（次舞ノ）（陪從の半臂）ばん（袍の領ノ紐和名コロモノクビ）ぴのをつくろひ。（冠ノ）かうふりきぬのくびなどつくろひて。（こゑ）あやもなき。（求子のたぐひなるべし）こま山などうたひてまひたちたるは。すべていみじくめでたし。（大比禮也江次第六返哥大比禮返也云々）おほひれなどまふば。（大ひれの後使舞人退出云々）日ひとひ見るともあくまじきを。ばてぬるこそいと口をしけれど。またあるべしと思ふばたのもしきに。（御琴昇返ノ是より以下は退出のさまなるべし）みことかきかへして。此たひやがて。（江次第ニ歸時經ニ鑒東ニ云々）竹のうしろからまひ出て。（右袒云々）ぬぎたれつるさまどもなまめかしさば。いみしくこそあれ。（抵練下襲舞人のさまノ）かひねりの下がさねなどみだれあひてこなたかなたにわたりなどしたる。いで更にいへばよのつね也。此たびは又もあるまじければにや。いみしくこそばてなん事は口をしけれ。上達部などもつゞきて出給ひぬれば。いとさうゞしう口をしきに。賀茂のりんじのまつりは。かへりだちの御かぐらなどにこそなくさめらるれ。庭火のけふりのほそうのぼりた

南北二行に座を敷て。使ひ舞人つく。うしろに本末の神樂の所作人。陪從。近衛の召人つく。出御ありて公卿召あれば。簀子長階に候す。階の下に頭以下着て。使以下を召。勸盃ありて。神樂あり。庭火よりはじめて。朝倉其駒までうたふ。庭火にもろ哥あるべけれは。人長作法あり。みかぐらはてゝろくあり云々

ざえのをのこ

雲圖抄御神樂裏書。歌ニ韓神一時人長立舞。

次勸盃。次人長進召ニ才男一。公事根源にもからかみはてゝ又すゝみて才の男めす云々

人長の　舞人陪從などの長ノ。次第云舞人陪從皆起座隨ニ人長仰一皆次第に着座云々

たゞわたるを見るにあかれば

里人は御前の儀などは見れば。使舞人などの大路をわたるを見て。猶あかで賀茂まで行て見るとゝ

御やしろまで行て

江次第十。賀茂臨時祭社頭議委。使舞人など着座して垣下殿上人相分れて勸盃あり。使ひ宣命をよみ。御馬を引次にあづまあそびあり。次に舞。次に馬を馳す猶委

[增]拾遺に　神樂　藤原忠房

「めづらしきけふの春日のやをとめを神もうれしと忍ばさらめや」とよめり

（本末のうたノ）（見る人の衣裳ノ）（賀茂の橋ノみだらしにあり）（舞人のさまノ）（賀茂にてノ）（篝火なるべし打松とて松をたくノ）（にはび）（霜月なれ）（いまだ清少の宮つかへせざりし時ノ）（にんぞう）（かんだちめ）

ありるに。かぐらの笛のおもしろうわななき。ほそう吹すまし

たるに。哥の聲もいとあはれにいみしくおもしろく。さむくさえ氷て。うちたるきぬもいとつめたう。扇もたる手のひゆるもおぼえず」

才男ノ

ざえのをのこどももめしてとびきたるも。人長の心よげさなどこそいみしけれ。里なるときはたゞわたるを見るにあかねば。御やしろまで行て見る折もあり。おほきなる木のもとに車たてたれば。松のけふりたなびきて。火のかけにはんぴのを。きぬのつやもひるよりはことよなくまさりて見ゆる。はしの板をふみならしつゝこゑあはせてまふほどもいとをかしきに。水のながるゝおと。ふえのこゑなどのあひたるは。まことに神もうれしとおぼしめすらんかし」

誰ともなし但實方などの事にや

少將といひける人の。としごとにまひ人にてめでたきも

（舞人に出るをよろこびしにや）

上の御やしろの一の橋のもとに
少將の執心をとめてこゝに有しとゝ。是橋本の社の事にや。賀茂の橋本のやしろは藤原實方をいはひし由。つれ〳〵草に見ゆ此事にや猶可尋之

やはたのりんゞの
袋双紙云。八幡臨時祭は。先朱雀院御時被二始行一也。件哥は貫之奉レ之。其哥ニ「松も生又も苔むす石清水行末遠くつかへまつらん下略

ろくをえてうしろより
内藏づかさ餘の唐櫃を小板敷にかきもてきて。藏人頭以下。使舞人などにくばりあたふる事江次第六に委

其たびかへりてまひしは
南祭にむかしは還立ながりしを。近代おこなはるゝより江次第などに侍るほ。此時よりの事にや

のに思ひしみけるに。なくなりて。上の御やしろの一の橋のもとにあなるをきけば。ゆゝしう。せちに物おもひいれじとおもへど。なほこのめでたき事をこそ更にえおもひすつまじけれ」

やはたのりんじのまつりの名殘こそいとつれ〳〵なれ。などてかへりて又まふわざをせざりけん。さらばをかしからまし。ろくをえて。うしろよりまかづるこそ口をしけれ。などいふを。うへの御まへにきこしめして。あすかへりたらんめしてまはせんなどおほせらるゝ。まことにやさふらふらん。さらばいかにめでたからんなど申す。うれしがりて宮の御まへにも。猶それまはせさせ給へどあつまりて申まどひしかば。其たびかへりてまひしは。うれしかりし物かな。さしもやあらざらんとうちたゆみつるに。まひ人まへにめすをきゝつけたる心ち。物にあたるばかり

さわぐもいと物くるはしく。しもにある人々まどひのぼるさまこそ。人のずさ。殿上人などの見るらんもしらず。もをかしらにうちかづきてのぼるをわらふもことわり也」

故とのなどおぼしまさで。世の中にこと出き物さわがしく成て。宮又うちにもいらせ給はず。小二條といふ所におはしますに。何ともなくうたてありしかば。久しう里にゐたり。御まへわたりおぼつかなさにぞ。猶えかくてはあるまじかりける。左中將おぼして物語し給ふ。けふは宮にまゐりたれば。いみしく物こそあはれなりつれ。女ばうのさうぞく。もからきぬなどのをりにあひ。たゆまずをかしうてもさふらふ哉。みすのそばのあきたるより見いれつれば。八九人ばかりゐて。黄くちばのからきぬ。うすいろのも。しをん萩などをかしうゐなみたる哉。御まへの草のいと高きをなどかこれはしげりて侍る。ぱらはせてこそ

故とのなどおぼしまさで世の中にこと出來
中關白道隆公薨し給ひて。御堂殿關白し給ひしに。道長公道隆公と兄弟の御中よからざるにそへて。伊周公も下心いどみがちにありしに。伊周公其時の太上天皇花山院を由なき恨にて射奉らんとし給ひしつみ。又禁中ならでおこなはせ給はぬ大元師法を伊周公年比おこない給へるつみ。又其比の女院東三條院をのろひ給へりと云つみなどにて長德二年四月太宰權帥に左遷し給へり。御弟の隆家卿も花山院をゐ給はんとせしつみありとて。出雲へ配流せり。后宮定子は此御恨にて御ぐしおろして籠りおはす由。榮花物語三四の卷大鏡にも見ゆ

何ともなくうたて　其比清少を妬む者有て
御堂殿がたへ清少の心ざしありと讒したるゆゑ久しく后宮へ出仕せざりしゝ

黄朽葉のからきぬ　桃華蘂葉に七月より九月に至る云々

紫菀　河海云おもて蘇芳うらもえぎ也云々

萩　おもてすはううらあをしと桃華蘂葉にあり

かたりきかせ奉れとなめり
いかなる事にても清少は侍ふべき物と后宮の思召よしを清少へ傳へよとのやうに人々左中將にいひしと云
ろだいのまへの　是は禁中などの事を取まぜ語給ふさまにや。露臺は仁壽殿の邊と江次第六に見ゆ。但小二條にもろだいは作られしにや
ぼうたん　牡丹云。花の比なられど枝葉も唐めきしとにや。唐朝に盛にもてあそびし事白氏文集。愛蓮說などに見えたればからめきをかしといふにや
げにいかならんと思ひ　彼左中將の后宮の御心むけの事をかたられしをうけて。げに后宮の御氣色はいかならんと心もとなく憚るべき事もなしと清少の心云
左大殿　道長公。長德二年七月廿日轉二左大臣一と公卿補任にあり

といひつれば。露おかせて御らんぜんとてことさらにと。宰相の君のことゑにていらへつる也。をかしくもおぼえつる哉。御里居いと心うし。かゝる所にすまひせさせ給はんほどは。いみしき事ありとも必さふらふべき物におぼしめされたるかひもなくなど。あまたいひつる。かたりきかせ奉れとなめりかし。まゐりて見給ゑ。あはれげなる所のさまかな。ろたいのまへにうゑられたりけるぼうたんのからめきをかしき事などの給ふ。いさ人のにくしと思ひたりしかば。又にくゝ侍しかばといらへきこゆ。おいらかにもとてわらひ給ふ。げにいかならんと思ひまゐらする御けしきにはあらで。さふらふ人たちの。左大殿のかたの人しるすぢにてありなどさゝめきさしつどひてものなどいふに。しもよりまゐるを見てはいひやみ。はなちたてたるさまに見ならはずにくければ。まゐれなどあるたびの

をさめ　長女云。下づかへのをんなゝり
おまへより　后宮の御かたより。左京のきみをとり次にて。此文を給へりとをさめかかたるゑ
こゝにてさへ　后宮は讒人のまへをおぼして清少への御文を忍ばせ給へるに。長女清少のかたにても忍ぶと云
山吹の花びら　山吹は口なし色なればいはで思ふといふ心なるべし
いはでおもふに　「心には下ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる」前におほせ事もなくて日ごろになればとある首尾なり
まづしるさま
[增]古今雜下よみ人しらず
「世の中のうきもつらきもつげなくにまづしるものは涙なりけり」
たれもあやしき御ながね　清少の久しき里居を人々あやしがると云

仰せをも過して。げに久しうなりにけるを宮のへんには
たゞあなたがたになしてそらごとなども出くべし。れいならずおほせ事などもなくて日ごろになれば。こゝろぼそくてうちながむるほどに。をさめ文をもてきたり。おまへより左京のきみしてしのびて給はせたりつるといひて。
こゝにてさへひきしのぶもあまり也。人づてのおほせ事にてあらぬなめりとむねつぶれてあけたれば。かみにはものもかゝせ給はず。山吹の花びらを只一つ包ませ給へり。それにいはでおもふぞとかゝせ給へるを見るもいみしう。日ごろのたえま。思ひなげかれつる心も慰みてうれしきに。まづしるさまををさめもうちまもりて。御前にはいかに物のをりごとにおぼし出聞えさせ給ふなる物をとて。たれもあやしき御ながるとのみこそ侍めれ。などかまゐらせたまはぬなどいひて。こゝなる所にあからさまに

おなじふる事といひながら
同じ古哥の中にも此哥はことに誰もよく覺えたる事をと之
こゝもとにおぼえながら
世俗に心やすき事を足もとなる事といふにおなじ

はたかくれ　蝙蝠之すこし面がくしに清少のゐる之
[増]遊仙窟に。半面とあり
小町家集。「しとけなきれくたれ髪を見せじとやはたかくれけん今朝のあさかほ」
又源氏もの語松風の巻に
「几帳にかくれたるかたばらめ」とあるも意はおなじ
あれは今まゐりか
清少のうゐ〳〵しげなるをたはふれの給ふ詞之
此ゐりはさもいひつべかりけり
いやでおもふなどしうれくにくげなる事ながら。此折ふしにはかなふべしと之
見つけではしばしえこそ
是清少の久しくまゐらざりし恨みをの給ふ之。かくいふにまさる心中の無音の遺恨あれば清少を見つけずばこのうらみはなぐさむまじと之。是も御たはふれ之

まかりてまゐらんといひていぬるのちに。御返事かきてまゐらせんとするに。このうたのもとさらにわすれたり。いとあやし。おなじふる事といひながら。しらぬ人やはある。こゝもとにおぼえながら。いひ出られぬはいかにぞや。などいふを聞て。ちひさきわらはのまへにゐたるが。下ゆく水のとこそ申せといひたる。などてかく忘れつるならん。これにをしへらるゝもをかし。御かへりまゐらせて。すこしほどへてまゐりたり。いかゞとれいよりはつゝましうて。御木丁にはたかくれたるを。あれは今まゐりかなどわらはせ給ひて。にくき哥なれど。此をりはさもいひつべかりけりとなん思ふを。見つけではえしこそ慰むかたりてこそなぐさむべけれとの心之
まじけれなどのたまはせて。かはりたる御けしきもなし。
清少かの哥の上句わすれし事之
わらはにをしへられしことはなどけいすれば。いみしくわらはせ給ひて。さる事ぞ。あまりあなづるふる事はさも

なぞ〳〵あはせしける
謎を左方右方わかれて哥合のやうに勝負する事之。なぞの哥合といふ物もあり。其たぐひなり

ひざうにをかしき
非常に之。さやうに奥ふかげにても。よのつねならずをかしくてわらはるゝ事もやと之

むつかれば　發憤之
はらだつ之
みなかた人　左右の方々の人々居分れたる之
あはするに　なぞ〳〵を合せあらそふ之

ありぬべしなど仰せられて。ついでに。人のなぞ〳〵あはせしける所に。后宮の御物がたり之　かたくなにはあらで。さやうの事にらうなどたのむる之。勞々之な　約束したる之　しかりけるが。左の一番はおのれいはん。さ思ひ給へだむる之。猶心もとながりて思ふ之　其詞をきかん。いかになどとふ。たゞまかせて物し給へ。さ申ていと口をしうはあらじといふを。げにとおしはかる。日いとちかう成ぬれば。猶この事の給へ。ひざうにをかしき事もこそあれといふを。いさしらず。さらばなたのまれそなどむつかれば。おぼつかなしと思ひながら其日になりて。みなかた人のをとこ女ゐわけて。殿上人などよき人々おほく居なみてあはするに。右の一ばんにいみしう用意之かの勞功の人のやうだいする之ようゐしもてなしたるさまのいかなる事をかいひ出んと見えたれば。あなたの人もこなたの人も心もとなく打まもりて。なぞ〳〵といふほどいと心もとなし。天に

右のがたの人はいと興あり
此なぞ童部もしりたるにて。ときやすければ。勝べきにて遊興とおもへるこ

あなたによりてこゝさらに　彼勞功の人右方に心よせて。わざと左にまけさせんとしたるわざをしらでれたしと片時のほどにさま〳〵思ひくだきしこ

口ひきたれて　おぞみて物いふさまこ
敷させ〳〵　勞功の人かちに定めて。勝の數をとらせたるこ。花鳥餘情云。哥合に負指とてあるこ。天德の哥合には金銀の藤の枝を洲濱にするて。かずさしの所におく。花の枝にて數をとれるこ云々

此人に論じかたせける
淺き事をあざけりて態右にまけしに。左の勝は嬉しき事にはあられど。先勝をよきにしてこの功者に任せしこ

さこそはあれ　しらずといふからは勝に定
むべき事ぞとの心こ
つみさりける　罪去。つみをいひのがるゝ心こ。右方の人に彼しらずといひし人さま〳〵いひわけして罪をのがれたるこ

これはわすれたる事かは　此なぞは清少のごとく忘れたるにはあらで苦しりて能しらぬなぞこ弓張月のもこ
ばりゆみといひ出たり。右のかたの人はいとけうありと思ひたるに。こなたのかたの人は物もおぼえずあさましうなりて。いとにくゝあいぎやうなくて。あなたによりてことさらにまけさせんとしけるをなど。かたときの程におもふに。右の人をこに思ひて。うちわらひて。やゝさらにしらずと。口引たれて。さるがふしかくるに。數させ〳〵とてさゝせつ。いとあやしき事是しらぬ物たれかあらん。さらにかずさすまじとろんずれど。しらずといひいでんは。などてかまくるにならざらんとて。つぎ〳〵のも此人に論じかたせける。いみしう人の知たる事なれど。覺ぬ事はさこそはあれ。何しかはえしらずといひしと。後に恨られて罪さりける事を語出させ給へば。おまへなるかぎりは。さはおもふべし口をしく思ひけん。こなたの人の心ちきこしめしたりけん。いかにくかりけんなどわらふ。こ

（なぞこ弓張月のもこ／左こまけぬべければこ／愛敬なきこ／あまりの事にあなづり思ひてこ／猿樂こざれるこ／右方の詞こ／右の人々の詞こ／其次々のなぞも勞功の人に任せしこ／右の人しらずといひし味方をかこう詞こ何とてさやうにはしらずといひしぞとこ／后宮の女房達こ／清少）

すといひしに。われはかくわらはも知たるうたを忘たる事と也

あなかちぬに
[訂]原本はなかからぬと有て。註に平直ならぬこあり　弘按。イ本にあなとあるをよしとすべし。故に今改めつ
しもとがちに
管和名抄玉篇すは枝のおほく出たるこ
かけやりなどして
物にかけてやぶりたるさまこ
ひきはこえたる
[增]濱云。下文八の卷にも「つぼさうそくなどにはあらで。たゞ引はこえたるが云々」あり。此詞今も東帶にいふ詞にてうしろに角袋たてる所をいふ。こゝは引ふくらしたるをいふのみ
よき木きりて
よき桃の枝きりて出せよとこ。これ正月の卯杖のれうにこふなるべし。延喜式舍人式に。正月上卯日の御杖に桃梅各六束云々

○正月十日そらいとくらう雲もあつく見えながら。さすがに日はいとけさやかにてりたるに。えせものゝ家のうしろ。あらぼたけなどいふものゝ。つちもうるはしうあをからぬに。もゝの木わかだちていとしもとがちにさしいでたる。かたつかたはあをく。いまかた枝はこくつやゝかにてすはうのやうに見えたるに。ほそやかなるわらはの。かりぎぬは。かけやりなどして。かみはうるはしきがのぼりたれば。又こうばいのきぬ白きなどひきかさねきたるをのこゞ。ぱうくぱはきたる木のもとにたちて。われによき木きりていでなどこゝろびがちにて。はかまハなへたれど色なあこめどもほころびがちにて。又かみをかしげなるわらはべの。どよきうちきたる。三四人。うつちの木のよからんきりておろせ。こゝにめすぞなどいひて。おろしたればはしりがはしりかひ
はしりまがふ心こ。ちりかひくもれなどいふと同

（清少／若立つ春の梢の樣こ／濃紅に光あるこ／桃の木にのぼりこさかれ着たるこ／童女なるべし／厚こ雲深きこ／清ケザヤカ万葉ニヨメリ／荒畠こ／土こ地心も濕氣ありて草などはあをくこ／卯槌卯杖と大やうおなじ前註／みたりよたり／打着こ／御前にもめす／句／桃枝切ておろすこ／牛靴くつこ前註／袖前註）

ひ。（とりわかちばひあふこと）とりわき。われにおほくなどいふこそをかしけれ。くろきはかまきたるをのことはしりきてこふに。（木にのぼりしわらはの今まばしまてといふこかのをのこのわらはをおごすこと）まてなどいへば。木のもとに（木にとりつきてこと）よりてひきゆるがすに。（木のぼりの童のさまこと）あやふがりて。さるのやうにかいつきてをるもをかし。梅などのなりたる折もさやうにぞ有かし」

（是亦別段こと）きよげなるをのこのすゞろくを日ひとひうちて。猶あか（敵こと相手こと）かたきぬにや。みじかきとうだいに火をあかくかゝげて。（采サイ和名）のさいをこひせめて。とみにもいれねば。どうをばんのうへにたてゝ（采をいろゝを待こと）まつ。かりきぬのくびのかほにかゝれば。かたて。さはいみしうのろふとも。（古くてなよらかなること）いとことばからぬえぼうし（呪咀こと）をふりやりなげにうちまもりたるこそ（ほこらはしきこと）ほこりかに見ゆれ」

碁（ご）をやんごとなき人のうつとて。（直衣の入紐こと）ひもうちとき。ないがしろなるけしきにひろひおくに。（石をかたはらより置こと）（位ひくき人こと）おとりたる人のゐずまひ

梅などのなりたるなりも
此桃の枝をばひあへるごとく梅のなりし時
もするとこと

とみにもいれねば
相手の賽を惡かれといひて。手に入てもみなどして。頓ても筒にいれざること
さはいみしうのろふとも
さやうに我がさいを惡かれと咒咀するともふき目うたん物をとこと

ないがしろなるけしき
しどけなきさまこと。空蟬卷にふたあひのこうちきだつ物ないがしろにきなしてと云々

六十九段

かしこまりたるけしきに
はゞかりたるさまこと
袖のしたいまかた手にて
及びごしに石をおけば盤の上に袖のさはらぬやうにせしさまこと

つるばみのかさ
橡和名櫟實也云々。どんぐりの笠のたぐひなるべし
みづぶき　和名云黃實こと。俗ニ鬼蓮ト云。其實似二鳥頭一故以名レ之
くりのいが
[增]和名抄に　栗刺クリノイガ

七十段

かなまり　金椀和名前註
[增]竹取物語に「しろかねのかなまりをもて水をくみありく」などあり。水などを入る器こと
水を物にいる〻透影　すきとほる物にいる影こと
ほそひつ　孟津抄ニ綿をかけてむしりなどするものこと。細流ニぬりをけなどのたぐひか云々

七十一段

す〻ばな
[增]和名抄ニ。漢須々波奈とあり
れりいろのきぬ
練色の絹のなへたるほこと
[增]弘云。白の練絹のふるびてなへたるが穢げなりとの意こと

もかしこまりたるけしきに。ごばんよりはすこしとほくて（及びかゝれること）およびつゝ。袖のしたいまかた手にて引やりつゝうちたるもをかし」

おそろしきもの
つるばみのかさ。やけたる所。みづぶき。ひし（菱也）。かみおほかるをのこのかしらあらひてほすほど。くりのいが」

きよしと見ゆる物
かはらけ。あたらしきかなまり。たゝみにさすとも。水を物にいるゝすきかげ。あたらしきはそひつ」

きたなげなる物
ねずみのすみか。つとめて（早朝こと）手おそくあらふ人。しろきつきはな（吐鼻こと）。すゝばなしありくちご。あぶらいるゝもの。すゞめのこ。あつきほどにひさしくゆあみぬ（浴せぬこと）。きぬのなへたるはいづれも〳〵きたなげなる中に。れりいろのきぬこそきた

きぶのぞうのしやく
式部丞爵。百寮訓要云。地下の六位可レ然もの任レ之云々。式部丞と民部丞は二省の丞とて。必爵か給ふ由職原抄に見ゆ。式部丞必叙爵すといへど。猶地下にて昇殿もかなはねば賤きにや
ゑかきたる
[訂]此の五も十万歳抄にはなし
むしろばりの車のおそひ
蓮をおほひたる車なるべし。西宮記云天禄四年十一月八日女御饌子於二東何一有二除服一其儀御二板榔毛車一其上張レ蓮懸二鈍色簾并下簾鬆等一御被之後取二張蓮一懸二替簾等一即以飯御ス
[訂]万歳抄并ニ活本にはおそひをすそひに作れり
けびゐしのはかま　是は檢非違使の下の督の長の事にや。其被は環翠軒云。看督長として別當の召具する物みな赤き狩衣に白き布袴を着る之。白杖を持て雜人等追拂之云々。此出立をいやしげなるとにや
むねつぶる〻
[増]おごろかる〻こと之。此所には氣づかひなどの意にいへり
くらべ馬見る
[訂]活本に見るの二字なし
おやなどの心ちあしう
孝子の心尤胸つふるべし。伊勢物語に。とみの事として御文あり。おどろきて見ればな

いやしげなる物
きぶのぞうのしやく。黑きかみのすぢふとき。屏風を布にてはりぬのびやて繪など書し物之
うぶのあたらしき。是は一向いやしげなる沙汰にも及ばぬと之
ふりくろみたるはさるいふかひなき物にて。中〳〵何とも見えず。是も布屏風の事之
あたらしくしたてて。繪のさまと之櫻の花おほくさかせて。ごふんすさなどいろとりたるゑかきたる。胡粉朱砂
やり戸づし。何もゐなかものはいやしきなり。むしろばりの車のおそひ。けびゐしのはかま。伊と簾
人の子にほうし子のふとりたる。まことのいづもむしろ延喜式民部式にあり出雲蓮とてかの土産なる由
のたゝみ」
むねつぶる〻物
くらべ馬見る。きれん事を氣つかふ故にやもとゆひよる。おやなどの心ちあしうして
れいならぬけしきなる。まして世の中などさわがしき比。疫癘などおこなはる〻比の事之
よろづの事おぼえず。又物いはぬちごのなき入て乳もの

七十四段

どいふ所を思ふべし。小學云。文王有レ疾武王不レ脫二冠帶一而養。文王一飯亦一飯。文王亦再飯再飯云々是らの心かなふべし

人などのそのうへなどいふに

是も例の所などにて。人の我身の上を陰ごとするにむれつぶるゝと之

うつくしき物

めぐみあはれむ心之。尤美麗の心もあり

[増]弘云。愛の字の意之。愛はうつくし いつくしとよむ之。うもいも音かよへり。うつくしきものは俗にアイラシキモノ之

ふりにかきたる

姫瓜の事なるべし

べになどつけて

雀子を愛して紅粉をつけしにや

いとちひさきちりなど

白氏文集十の觀二兒戲一詩に。齠齔七八歳。綺紈三四兒。弄レ塵復鬬レ草。盡日樂嬉嬉タリ下畧

まず。いみしくめくめのとのいだくにもやまでひさしうなきたる。いの所などにて。ことに又いちじるからぬ人のとるきゝつけたるぱことわり。人などの其うへなどいふに。

まづこそつぶるれ。いみしくにくき人のきたるもいみしくこそあれ。よべきたる人のけさの文のおそき。聞人さへつぶる。おもふひとのふみとりてさし出たるも又つぶる」

○うつくしきもの

ふりにかきたるちごのかほ。すゞめの子のねずなきするにをどりくる。またべになどつけ、すゑたれば。おやすゞめの虫などもてきてくゝむるもいとらうたし。みつばかりなるちごの。いそぎてはひくる道に。いとちひさきちりなどの有けるを。めざとに見つけて。いとをかしげなるおよひにとらへて。おとななどに見せたるいとうつくし。あまのさまにそぎたる兒の目に髪のおほひたるを。かきはやらで。

たすきがけにゆひたるこしの

是も兒のさたなるべし。源氏薄雲の巻に。たゞひめぎみのたすき引ゆひ給へるむれつきぞうつくしげさそひて見え給へる云々。和秘抄云。むかしはをさなき人小袖をばきず。たすきといふ物をきたる之。猶秘訣あり

殿上わらは

童殿上とて。元服以前に昇殿する事之

八九十ばかり　やつこゝのつとほばかりと

よむべし

皇子は。七歳にて讀書はじめの事。桐壺の巻にあり。只人も八歳より小學に入て。西掃應對書數など習ふ事禮記にあり

人のしりにたちて

伊勢物語に。しりに立ておひゆけどあり。後の聲によむべし

かりのこ　鴨子。西宮記かものこと之

[増]かけろふ日記。康保四年の條に「三月つごもりかたにかりのこの見ゆるを云々」とあるも鴨の子なるべし。下文八ノ巻にもあり

さりのつぼ

[訂]原本に玻璃壺にやとあるは非之。景雄云。

髪をむづかしかりかたふけると

うちかたぶきて物など見るいとうつくし。たすきがけにゆひたるこしのかみのしろうをかしげなるも見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはのさうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごのあからさまにいだきてうつくしむほどにかひつきてね入たるもらうたし。ひひなあそびの道具之ひひなのでうと。ぱちすのうき葉のいとちひさきを池よりとりあげて見る。あふひのちひさきもいとうつくし。何も〳〵ちひさき物はいとうつくし。いみしうこえたる兒の二つばかりなるが。しろううつくしきが。一あるのうすものなど。きぬながくて。たすきあげたるが。ぱひ出くるもいとうつくし。やつ九つ十ばかりなるをのこの。聲をさなげにて文よみたるいとうつくし。鶏のひなのあしだかにしろうをかしげにきぬみじかなるさまして。ひよ〳〵とかしがましくなきて。人のしりにたちてありくも。又おや

七十五段

さりのつぼは佛舍利を玉壺に入たるが見ゆるなゝいへるゝ。今もおほくしかするゝなでしこのはな

[訂]万歳抄に此の一句なし

人ばへする物　人そばへと世俗にいふ詞ゝ

[増]盈云。人ばへ　このみにては聞えがたし

人そばへとありしその字落たるなるべし。上文そばへたる舍人わらは云々。又万十三丁ヵ伊蘇婆比座與伊加流我等此米登とあり

あやにくだちて　文悪也。あながちめきたる心なり。せそとおもふ事を。しひてするさまゝ

ひきはられ　引張れ也。イひきいられは引とりいるゝ心ゝ

親の來たる所えて　其子を愛する父のきたるにほこりたるさまゝ

まさなさばかり　其子の引さがすを。父の正なしなどばかりいひて其物をとりもかくさぬゝ

われえはしたなくもいはで　親もさまでしらぬを。他人は猶つよくもしからで道具そこなはれて見ぬるゝ

のもとにつれだちありく見るもうつくし。かりのこ。さりのつぼ。なでしこのはな」

○人ばへするもの

ことなる事なき人の子のかなしくいとほしく去習はされしゝ　和名ならはされたる。しばふき。ばづかしき人に物いはんとするにもせきばらひする心にや　ニ欺シハフキ咳同　ばづさきに

たつ。あなたになたにすむ人の子どもの四つ五つなるはあやにくだちて。物など取ちらしてそこなふを。つねはひきはられ　イいられ　制ゝなどせいせられて。心のまゝにもえあらぬが。親の來たる所えて。其子のほしく思ひし物をゝゆかしかりける物を。其子の詞ゝあれ見せよやはゝなど引ゆるがすに。母の人と物いひてきいれぬゝおとなゝど物いふとて。ふともきゝいれねば。子のさまゝ手づから引さがしいでゝ見るこそいとにくけれ。無正ゝそれをまさなとばかりうちいひて。とりかくさで。さなせそそとなふなどばかりゑみていふおやもにくし。われえはしたなくもいはでみるこそこゝろもとなけれ」

七十六段

あをふち　青みだちたる淵なるべし

[増]弘云。水深き淵のもゝ。万十六ノ十八丁ヵ「虎にのりふるやなこえて青淵にみつちとりこんつるぎたちもが」とあり

いかづち　穀梁傳云陰陽相薄感而爲雷不祥雲にや。世のさとしなどに出る雲ゝ

ふさうくも

うしはさめ

[訂]イ本うしかさめとあり。然らば蟹の類にて海中にかさめといふものあるよし。もしはそれか。

和名抄に。擁劒。和名。加散女似蟹色黄云々

ゐにすし　未勘。但土佐日記に穢屋のつまの蝙蟮館とあり。蝙蟮は貝也。和名ニ爲ニ其貌似レ蚓而大者也ニ云々。是にや。には助字なるべし

ひぢかさ雨　梁塵愚案抄云。俄にふる雨の笠もとりあへずして袖をかづく雨ゝ

いきすだま　河海云。鬼游仙崛。弄花云生靈也。又たゞ靈也

いりすみ　煎炭。しめりを煎取し炭にや。奥にいりすみおこすとあり

七十七段

いちこ　覆盆子。まことに文字はこと〳〵

しきにや

つゆくさ　鴨頭草と書ゝ

水ふき　黄實とかけり。本草云。黄實黄莖三月生レ葉貼レ水大ニ于荷葉ニ面青背紫。莖葉皆有レ剛下毛

もんトやうはかせ　文章博士。史書詩文などよむ人也。令義解云。文章博士從五位下。弘仁二年定レ之云々。位ひきゝ官なればかく云ゝ

皇后宮權大夫　職原抄云。皇族納言參議及三位以上兼レ之云々。中宮大夫は皇宮の御内を管領するゝ。權大夫は大夫のごさくにはあられば文字に見

名おそろしき物

あをふち。谷のぼら。洞ゝぱたいた。鰆板家の具ゝくろがね。つちくれ。土塊ゝいかづちは名のみならずいみしうおそろし。風の名ゝ和名ニ暴風ハヤチぱやち。ふさうぐも。イニひこほし牽牛ゝぼこぼし。おほかみ。牛ニハさめ牛ゝうしはさめ。蠟にや籠長蛾四獸正をいふにやらう。ろうのをさ。ゐにすし。それも名のみならず見るもおそろし。縄莚なはむしろ。強盜がうたう又よろづにおそろし。ひぢかさ雨。くちなはいちご。地楊梅ゝいきすだま。鬼蘇おにところ。おにわらび。うばら。茨からたち。枳殼ゝりずみ。ぼうたん。牡丹ゝうしおに。牛頭馬頭のたぐひゝ

見るにことなることなき物のもじにかきてこと〳〵しきもの

いちご。露草。水ぶき。くるみ。胡桃もんじやうはかせ。皇后宮の權大夫。やまもゝ。いたどりはましてとらのつゑとかきたるとか。つゑなくともありぬべきかはつきを」

七十八段

ろほどはなき歟

さらのつえと　虎杖和名抄に伊太止里云々。其莖のまだらにて虎の名あるよし本草疏にあり

むつかしげなる　むさ〳〵しげなる心ゑ。

又物うき心もあり

ぬひもの〻　繡の絹のうら也。和名云蔣飭切韵云。繡以三五色絲一刺二万物形狀一也

かはきぬ　狐腋裘。貂裘のたぐひゑ。裘の裏付ぬは表の縫目見えてむさ〳〵しきにや

むつかしげなる物

ぬひもの〻うら。ねこのみ〻のうち。鼠のいまだけもおひぬをすのうちよりあまたまろばし出たる。うらまだつかぬかはぎぬのぬひめ。ことにきよげならぬ所のくらき。となる事なき人のちひさき子どもなどあまたもちてあつかひたる。いと男のおもはぬゑふかふしも心ざしなき女の心ちあしうして久しくなやみたるも。男の心の中にはむつかしげなるべし」

七十九段

えせものゝ所うるをりの事

正月のおほね。行幸の折のひめまうちきみ。六月十二月のつごもりのよをりの藏人。季の御讀經の威儀師あかげさきて僧の文ども名よみあげたるいとらう〳〵し。御どきやう佛名などの御さうぞくの所のしう」

えせ物の所うる折

常はあなづらはしき物の。折にふれては時にあふ事ゑ

正月のおほね　齒固などに用る大根ゑ。花鳥云。齒固は元三によはひをかたむる心ゑ。齒はよはひとよむゑ。高土坏六本に折數をするゑ一の臺に餅大根橘をもるゑ下畧

行幸の折のひめまうち君　東竪子也。公事根源にひめまつともいへり。

正月の女叙位に叙爵する故姫太夫といふにや。公事根源云。あづまわらはといふは。

内侍司の被官にて行幸の時。ひめ松とてをかしき馬に乘て供奉するこれが事ゑ。これはみつ子を用らるゝにや。三子は天子の守りになる由。由緒も侍る故とかや。年ごとに申文を出して必五位の位を給ふゑ。是は昔より同し名乘を相傳して。紀朝臣季明と名のる云々

ふゝりの藏人　節折の命婦とも云ゑ。六月十二月晦日の夜。節折の命婦。竹を持てまゐりて主上の御長より始めて。所々の寸法を取果て。宮主にきりあてがはせて御稅をつとむるゑ。あらたへにこたへて二度あり。二度果て祿を給ふ。節折をよたりといふ。竹にて御たけの寸法をとりて其ほどに切あてがへば也と公事根源にあり。延喜式藏人式云。十二月晦日諸司供二奉荒世和世御裝束一同三六月二云々。又云孫廂南北兩方立二御屏風一其北御屏風前鋪二小莚一爲二節折藏人座一と江次第にあり。雲圖抄に圖あり。常はひき〻女官の此時座をゆまへなど所をうるゑ

季の御讀經の威儀師　季の御どきやうとは。二月と八月に百數にて大般若經を四ヶ日講ぜらる事ゑ。江次第首書云。季御讀經春秋二季請三百僧於南殿一讀二大般若經一其內定二御前僧廿口一於二御殿一讀二仁王經一下畧。威儀師は此みどきやうに彼清涼殿にて仁王經をよむところの御前の僧を引て入る奉行の僧ゑ。江次第五季御讀經の所に。威儀師引二御前僧一入自二明義仙華等門一云々。西宮記云南座東端威儀師候前居〻聲云々。雲圖抄ニ此圖あり

官職便覽云。延曆十三年九月三日延曆寺供養記云。奉行僧二人威儀師從儀師始賜二赤袈裟一云々

僧の文どもよみあげたる　僧の名ども書し例文なるべし。江次第五季御讀經事云例文置二上卿前一入二年々僧名名僧帳諸寺解文外任并死去勘文等輿御どきよう佛名などの御さうぞくの所の衆　季の御讀經などに行事の藏人。清涼殿をかざり。辨南殿をかざる事あり。佛名にもかざるゑ。裝束といふゑ。藏人所の衆此時所をうるにや。雲圖抄の裏書云。季御讀經事初日行事藏人奏二仕御殿御裝束一辨奉二仕南殿裝束一云々すなはち圖あり江次第十一云御佛名當日の裝束等如レ式下畧。延喜式圖書寮云御佛名裝束御持佛一龕蒔繪案一脚。供帶花香。金銅花盤二口。火爐一口下略。此外三千佛の像二鋪十六佛名經一部などあり

かすがまつり　年中行事哥合注云かすがの祭は二月上の申の日也。まづ未の日勅使たつ。近衛の中將少將これをつとむ。清和天皇貞觀元年十一月九日に始まれり云々。此勅使の近衛の舍人ども。けふ所をうるにや。近衛の隨身番長府生等をこのゑのとれりといふゑ。又春日まつりに馬寮の使御馬をひきて社をめぐり。長者殿の神馬此次にひきめぐる事江次第五にあり。又春日まつりの使途中次第に。七條大宮にて。除目をおこなひ。右左大臣各一人。以二藏官一任レ之左右大辨各一人以二番長一任レ之頭中將一人以二府生一任レ之云々。これらのとれりをところをうるといふなるべし

大饗のところのあゆみ〳〵　二宮大饗大臣大饗等ゑ。あゆみとは或說云大臣などの御慶賀に學生ども列參して。嘉辰令月歡無レ極といふ詩を朗詠して殿指の絹を給ふ事云々。公事根源云。二宮とは春宮中宮を申ゑ。王卿以下本宮に參ゝて拜禮の事あり。次に玄輝門の東四の廊にして饗につく。先中宮の饗につく。次に春宮の饗につく。三獻の儀有云々。猶江次第委。大臣大饗は前に委註。あゆみとは歩の字ゑ。江次第に勸學院歩といふ事もあり。常にはことなる事なき學生などの此折に所をうるを云にや

かすがまつりのとれりども。大饗のところのあゆみ。正月のくすりと。うづゑのほうし。五せちの心見のみぐしあげ。節會御はいぜんのうねめ。大饗の日の史生。七月のすまひ。雨ふる日のいちめ笠。わたりするをりのかんどり」

市女の笠ゑ

八十段

正月のくすりこ　年中行事哥合註云。薬子は。ちさなき童女にて侍り。是も屠蘇は小兒よりのむ本文あれば。先御薬を是になめさせてきこしめすにや

うづみのほうし　卯杖を奉る法師にや。卯杖の事前註

五せちのこゝろみのみぐしあげ　五節の事前に註。十一月丑日帳臺の試あり。寅日御前の試あり。江次第雲圖抄等委。いづれも五節の舞妓を天子の御覽する事ゝ。みぐしあげとは。五節舞妓につく女房ゝ。江次第には理髪とあり。雲圖には髪上とあり。江次第十。五節御前試云。時剋先五節師參入着座。次舞姫參上。藏人頭進二向長橋東一禁二陪從等亂入一。免レ入者理髪一人。童女二人。蕭爐茵等ゝ。下略他の物はまゐらぬ所へかの髪上の女房は入る事をゆるさるゝゆゑ。えぞ物のところうるとゝ

せちゑの御はいぜんのうれめ　御陪膳とは天子の御給仕つかふまつる事ゝ。禁秘抄云。陪膳采女尤可レ然事也下畧。江次第一。元日節會云其南置二緣草墩一陪膳采女座。又云采女撤二御膳壷盤帥二下畧。七日節會蹈哥節會にもかくのごとし。采女はいとしもなき女官なれども。せちゑの御はいぜんの折は所をうるとの議ゝ

大饗の日の史生　大臣大饗に大政官の史生を召て。勸レ杯居レ藪の議有て。祿を給ふ事あり。江次第に委。史生は太政官の細事を書註す官人。此時所をうるゝ

[増]弘云。史生の二字にてしやうとよむべし。音便にて一のしもトは約まる例ゝ。和名抄に。史生。俗二言如賞とあり

七月のすまひ　年中行事哥合註云。相撲といへるは諸國の供御人をめしあつめて。七月に相撲節といふ事をおこなひて天子御覽するゝ。始めをは召合せといふ。後にすぐりてめされんずるをぬきてと申す。其次第は江次第委。雲圖抄に圖あり。是もいやしき物の此折に所をうる心なり

おもふ人ふたりもちて

詞花集云。等恩二兩人一戀。右大臣「いづくをもよがるゝ事のわりなきにふたつにわくるわが身ともがな」

一の所に　職原抄云。執柄者必擬二一座文宣旨一故稱二一人一又云二一所一

時めく人　攝家などに近習にて召つかはるゝ人

くるしげなる物

夜なきといふ物するちごのめのと。思ふ人ふたりもちて。こなたかなたに恨みふすべられたるをとこ。こばき物のけあづかりたるけんじや。ゆんだにはやくばよかるべきを。さしもなきを。さすがに人わらはれにあらじとねんずるいとくるしげなり。わりなく物うたがひする男にいみしう思はれたる女。一の所に時めく人もえやすくはあらねどそれはよかめり。こゝろいられしたる人」

驗はやく見えばゝ

人にわらはれぬやうにとの心ゝ

色々に加持し護念するゝ

○うらやましきもの

經などならひていみじくたとゝしくて忘れがちにて。返〳〵おなじ所をよむに。法師はことわり。男も女もくるくるとやすらによみたるこそ。あれがやうにいつの折とこそふとおぼゆれ。心ちなど煩ひてふしたるにうち笑ものいひ思ふ事なげにてあゆみありく人こそいみしくうらやましけれ。いなりに思ひおこして參りたるに。中の御社のほどわりなく苦きをねんじてのぼるほどに。いさゝかくるしげもなく。おくれてくと見えたるものどもの。たゝゆきにさきだちてまうづるいとうらやまし。二月うまの日の曉に急しかど。坂のなからばかりあゆみしかばみの時ばかりになりにけり。やう〳〵あつくさへなりて。まことに侘しうかゝらぬ人も世にあらんものを。何しにまうで

短氣にせはゝしき人ゝ

驗の見えぬゝ

攝關を申すゝ執柄とも云ゝ

清少より跡に來るゝ

初午なるべし

他の人々ゝ

清少の心ゝ

いなりに　延喜式神名帳云。稲荷神社三座。下社大山祇。中社倉稲魂。上社土祖神。この神は百穀を播し給ふ故稲荷と申す由卜部の記にあり

中の御社　倉稲魂と申すゝ

二月うまの日　口傳。貫之集第一云。延喜六年月次の屏風の哥の中に。二月初午いなりまうでしたる所「獨のみ我こえなくにいなり山春の霞みのたちかくすらん」

坂のなからばかり　いなりの上の社は今の社の奥十八町ばかり山中ゝ。今も氏人は正月五日に參事あり。瀧などの跡も有其道の ほどのさまゝ

引はこえたる

[増]此の詞。上の七卷。なほ世にめでたきもの〻段の末にも見えたり。そこに委しくへり。見合すべし

七度まうで　一日に七度まうつるこ。稲荷へは七度参る事信心にや。拾遺集に「瀧の水かへりてすまはいなり山七日のぼりしまろしとおもはん」とよめり

つらんとまで涙おちてやすむに。三十わまりばかりなる女のつぼさう（衣をつぼをる心こ前に註よき人にはあらぬさまこ）ぞくなどにはあらで。たゞ引ばとえたるが。（彼女の詞こな、たび）まろは七度まうでも侍るぞ。三度はまうでぬ。四度ばことにもあらず。ひつじには（八時の事こ）下向しぬべしと。道にあひたる人にうちいひてくだりゆきしこそ。只なる所にてはめもとまるまじき事の。かれが身にたゞ（我ありきかぬる時なればこ）今ならばやとおぼえしか。男も女も法師もよき子もちたる人いみしう浦山し。かみながくうるはしう。さがりばなどめでたき人。（下たる髪のさまこ）やんごとなき人の人にかしづかれ給ふもいとうらやましし。手よくかき哥よくよみて。物の折にもまづとり出らるゝ人。よき（貴人こ）人の御前に女房いとあまたさふらふに。心にくき所へつかはすべきおほせがきなどを。誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあらん。されど下などにあるを（手よき人こ）わざとめして。御硯おろしてかゝせさせ給うらやましし。さやうの事は所（心にくき所への仰せ書の事こ）

なにはわたりの遠からぬ
手跡の未熟なるを云也。世俗に机ばなれせぬといふたぐひこ。古今集序になにはつのことのはを手習ふ人のはゝ下めにもしけるとあるに付て。若紫卷に。まだ難波津をだにはかゝくしうつゞけ侍らざめればといへるたぐひなるべし

あつまりてれたがり
彼手跡よき人にれたみうちやむさまこ。人々あつまりてれたき事など戯てうらやめるとこ

三まいたう　河海云。三昧は梵語也此ニハ云二正受一又名二正定一云々。法華三昧。念佛三昧などして他事なく其事のみうけおこなふをいふこ。其堂を三昧堂といふこ

のおとななどに成ぬれば。まことになにはわたりのとは
からぬも事にしたがひてかくを。これはさはあらで。上達（手跡未熟なるにかゝす）
部のもと。又ばじめてまゐらんなど申さする人のむすめ（かやうのかたへつる折ならでこ）
などには。心ことに上よりはじめてつくろはせ給へるを。（かはすべき御文にはさこ）
あつまりてたはふれにねたがりいふめり。琴ふえ習ふに（なら）
さこそはまだしきほどはかれがやうにいつしかとおぼゆめれ。うち東宮の御めのと。うへの女房の御かたゞ〜ゆるされたる。三まいだうたてゝよひあかつきにいのられた（相手のさいのよく出るこ）
る人。すぐろくうつにかたきのさいきゝたる。まことに世（此まこごにといふ詞）
面白し
を思ひ捨たるひしり」

とくゆかしきもの
まきぞめ。むらご。くゝり物など染たる。人の子うみたる。
男をんなとくきかまほし。よき人はさらなり。えせ物げす
分際の心こ
のきはだにきかまほし。ぢもくのまだつとめて。必しる人（かならせ）

こゝろもとなき
[増]弘云。心にもだしなき義にて俗にマチドホなどいふ意ゝ
とみの物ぬひに
頓の字ゝ。近き晴わざにきるべき物縫はせしゝ
居いりつゝ
物見の所に入居るゝ

事なりにけり　イとて入
祭などのわたる時節に成たるゝ。源氏葵卷に物も見で歸らんさし給へど。事なりぬといへば云々おなゝ心ゝ
白きしもと　磬固の白杖を持て來るゝ。管は犯人をうつ杖なり
[増]濵按。たゞけいごのしもとにはあらで祭はてたるあとより使の廳などへ引ゆく罪人をひき來れるけいごのしもとゝ。祭のけいごにはあらず。さればやりよするといひたるも罪人をいふなるべし
しられゝとおもふ人あるに
我ある事をかくさんとおもふ人の來たる時。我は隱れ居て前なる人に我こゝにあらぬ由を教へていはせたるゝ。イニ我はかくれぬてしられゝと思ふ人のきたるに。前なる人に。物いはせてきゝぬたるこゝち。とあり

のなるべき折もきかまほし。おもふ人のおとせたる文」

○こゝろもとなき物

人のもとにとみのものぬひにやりて待ほど。祭行幸等こいそ物見に急ぎ出て。今やくゝとくるしう居いりつゝ。あなたをまもらへくるかたをまもりてゝたる心ち。子うむべき人の。ほど過るまでさるけしきのなき。遠き所より思ふ人の文をえて。かたくふんじたるそく緩假ゝひなどはなちあくる心もとなし。もの見に急ぎ出て。事なりにけり。白きしもとゝなど見付たるに。ちかくやりよする物見の棧敷近く車をよするゝほど。心もとなき心ゝわびしうおりてもいぬべき心ちこそすれ。しられじと思ふ人のあるに。まへなる人に教て物いはせたる。いつ生れ出るをまちつけたるゝしかとまち出たるちごの。いか五十日百日ゝもゝかなどのほどになりたる。行末いと心もとなし。とみの物ぬふに。くらき折。はり針闇きに我糸付るは其分にてきゝりに糸つくる。されどわれはさる物にて。ありぬべき所をとらへて。人につけさするに。それもいそけばにやあらん

ありぬべき所をさらへて
我は糸付べき針をさらへぬて人にやとひて
つけさするゝ
それもいそけばにや
やとはれし人も氣をせくゆゑにやあらん頓
てにもえつけぬゝ
只今おこせんとて
其かりし車を追付返さんとてのりて出しゝ
おほぢいきけるを
彼車の歸るを待程に他の車の大路をゆくゝ

車さしよせたてるに
[訂]原本たてるがとあり。今イ本によりて改めつ
とみにいりすみおこす
煎炭也。急に炭をおこすに。おこりがぬる程の久しく心もとなきゝ
[訂]此所の心もとなしな。原本にはひさしとせり。さてはいさゝか詞足はぬやうなれば。今イ本の文に從ひて改めつ
けさう人などはさしも
懸想人への返哥は。懇ゝ物おもはせて遲くすべければ。さもいそぐまゝけれど。又自然急くべき折もありゝ

とみにもえさしいれぬを。いで只なすげそといへど。さすがになとてかはと思ひがほにえさらぬば。にくささへそ心もとなき上にゝ
ひぬ。何事にもあれ。いそぎて物へゆくをり。まづわがさ篠單などの先
ゝるべき所へゆくとて。只今おこせんとて出ぬる車まつほ我車のかへるなりとよろこぶゝ
どとそ心もとなけれ。おほぢいきけるを。さなりけるとよ是も車まつほどの事ゝ
ろこびたれば。外ざまにいぬるいと口をしまして物見にはかいでんとてあるに。事ばなりぬらんなどいふをきくこそ侘祭のわたりんといふゝ
しけれ。子うみける人のゝちのことゝ久しき。物見にや又御えなのことこほるゝ
寺まうでなどにもろともにあるべき人をのせにいきたる同車すべき人をさそひにゆきしゝ
を。車さしよせたてるに。とみにものらでまたするもいと
心もとなくうちすてゝもいぬべき心ちする。とみにいり
ずみおこすいと心もとなし。人の哥の返しとくすべきを。かのさそふ人の遲なばるゝ
えよみえぬほどいと心もとなし。けさう人などはさしも
いそくまじけれど。おのづから又さるべき折もあり。又ま

ときのみこそはと
口ときのみこそ規模ならめと思ひて急きよみ出ればひか事も出來るとゝ
まつはぐろめ　松葉黑。待齒黑。兩說ゝ
[訂]此の兩說ゝとの註穩當ならず。季鷹云。まつの二字衍か。上の行の明るまつのまつ誤てこゝには入れるなるべし。さて齒黑のひるをまつほどをいへるゝ
瀧按。是亦よくもあたらず。今思ふに上文の云つゞけたる例を考れば。まつはまたを書ひがめたるゝ。又の意にてよくきこゆ

故殿の御ふくの比
中關白殿長德元年四月十日薨。服忌令云。父母服一年。暇五十日云々。
六月卅日の御はらへ
定子の祓に出給ふべきとゝ。祓は觸穢などにもあるべきゝと年中行事註有
官のつかさのあいたる
太政官廳のあきし所へ渡御ゝィあいたん所とは朝所にや

時つかさなど　禁中の漏剋博士の事ゝ。百寮訓要云。漏剋博士は漏をつかさどる。晝夜の時を伺ふゝ。漏水のうつるを守りて。時を正しくしる職也。職員令云。漏剋博士二人。掌下奉二守辰丁一伺中漏剋之節上。守辰丁廿人。掌下伺二漏剋之節一以レ時擊中鐘鼓上

して女も男もたゞにいひかはすほどは。ときのみこそはと思ふほどに。あいなくひが事も出くるぞかし。又こゝちあしく物おそろしきほど。夜の明るまつこそいみしう心もとなけれ。まつはぐろめのひるほども心もとなし」

故殿の御ふくのころ。六月卅日の御はらへといふ事に出定子の出給ふべきとゝさせ給ふべきを。しきの御ぞうしは方あしとて。官のつかさのあいたる所にわたらせ給へり。其夜はさばかりあつくわりなきやみにて。何事もせばうかはらぶきにてさま前ニ註イたん

ばかりをぞかけたる。中〳〵めづらしうをかし。女房庭に菫草ゝおりなどしてあそぶせんざいにはくわんざうといふ草を。架垣ゝませゆひていとおほくうゑたりける。花きはやかにかさあざやかゝなりて咲たる。うべ〳〵しき所のせんざいにはよし。時づ太政官の歴々たる所に似合とゝかさなどはたゝかたはらにて。かねの音もれいには似ず守辰丁のうつ時の鐘ゝ

たかきやにのぼり
新古今「高き屋にのぼりて見れは煙立民のかまとはにぎはひにけり」仁德天皇御哥ゝ
東野州注云たかき屋は樓閣などの事ゝ

くらまぎれにそ
あかきほどは樓閣へ上らざりし人々。くらまぎれに若き女房にまゝはりてあそびありくゝ
右近陣　月華門をいへり。拾芥に委
上達部のつき給ひし
公卿の着座し給ふ所にも女房のはゞからずのぼりなるべし
上官　政官也。太政官の官人辨少納言外記などをいふゝ
うちとをし
[訂]瀧云。とをしはたふしなるべし。後人の轉訛してかくはかけるならん
ふしたるに
[訂]原本ふしたるもとあり。今ィ本によりて改めつ
ふるき所なればむかでといふ物
こゝもと法華經譬喩品の長者の大宅久しくふりて。蜈蚣軸蜒守宮百足などの諸惡虫交横馳走せしさまをおもひてかけるにや

きこゆるをゆかしかりて。わかき人々二十餘人ばかり。女房ゝそれより見あぐれば。薄鈍裳唐衣道隆公の服衣ゝうすにびのもからきぬ。是も薄鈍ゝとへがさね。紅の袴どもをきてのぼり立たるは。いと天人などこそえいふまじけれど。そらよりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじわかさなれど。若くても上臈はかろ〳〵しく樓にものぼらぬさまゝおなじらで。うらやましげに見あげたるもをかし。日暮てくらまぎれにぞ。通したる人々みなたちまじりて。右近のぢん年たけ上臈なる人ゝへ物見に出きてたはふれさわぎわらふもあめりしを。かのらうぜきをいましむるゝうばせぬ事也。上達部のつき給ひしなどに。女房どものぼり上官などのゐる障子を皆うちとをしそこなひたりなどくるしがるものもあれど。きゝもいれず。屋のいとふるくてかはらぶきなればにやあらん。あつさの世にしらねば。みすのとによるもふしたるに。ふるき所なれば。むか女房達のさまゝ外ゝ蜈蚣

太政官の地のいまやかうの
やかうは八講にや。これ古き序文などの句なるべし。追而可考

[訂]源按。やかうは野干の音便カ。弘按るに。傍註及び萬歳抄に。やかうのにはハ。野郊場ノとあるぞよろしきやうノ。こはかの古今集に「さとはあれて人はふりにし宿なれや庭もまがきも秋の野らなる」と遍昭がよみたる歌などの心にや。因云。八講をやかうといふこと見あたらず。源氏などにもあれど皆はかうとかけり

かたへすゝしからぬ風の
六月より初秋までこゝに后宮のおはせしにや。古今ニ「夏と秋と行かふ空の通路はかたへ涼しきかせやふくらん。此うたをうけて殘暑を云ノ

七夕まつりなど
八日に還御の前の夜七夕ノ。乞巧奠の事江次第にあり

宰相中將齋信
長德二年四月廿四日參議恒德公の三男のふかたの中將　宣方六條左大臣重信公息人間の四月をこそ
白氏文集十六云。大林寺桃花
人間四月芳菲盡山寺桃花始盛開長恨春歸無二覓處一不レ知轉入二此中一來云々。此詩こそはかゝめとノ。三月廿日にあすはいかなる詩をかといへばなるべし

でといふ物日ひと日おちかゝり。はちのすのおほきにて巣に蜂の付ぬるノつきあつまりたるなど。いとおそろしき。殿上人日ごとに宿直にノまゐり。夜もゐあかし。物いふをきゝて。秋ばかりにや。太政官の地のいまやかうのにはとならん事をとずじ出たりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど。かたへすゝしからぬかぜの。所からなめり。さすがに虫の聲などはきこえたり。八日ぞかへらせ給へば。七夕まつりなどにて。いよりちかう見ゆるは。ほどのせばければなめり」

宰相中將たゝのぶ。のぶかたの中將とまゐり給へるに。人々出て物などいふに。ついてもなくあすはいかなる詩を清少の詞ノかといふに。いさゝか齋信卿ノおもひめぐらしとゞこほりもなく。人間の四月をこそはといらへ給へる。いみしうをかしく過去りて古き事ノこそ。過たる事なれど心えていふはをかしき中にも。女はうなどこそさやうの物わすれはせね。男はさもあらず。よ

誠にをかし
齋信の古詩を覺て答給ふを感する詞ノ

ほそどの〻一の口
弘徽殿の廊の第一にあたりたる戸口なるべし。源氏花宴に。三の口あきたりとあるたぐひ歟。弄花抄云。弘徽殿の東にわたり廊あり。それを細殿といふ。ほそどの〻へ出る所に戸三有。南の第三にあたるくるるさしたる戸也云々

頭中將源中將
前にいへる齋信を宣方となるべし

露は別のなみだ
菅家文草五云。七月七日代二牛女一惜レ曉露應二別淚一珠空落雲是殘粧髻未レ成此句則詠にもあり

かづらきの神今ぞ
拾遺「岩橋のよるの契も絶ぬべしあくる詫しき葛城の神」役行者。金峯山とかづらき山の間に岩橋をかけさせしに。かづらきの神かたち見にくき故畫役を詫たる事あるをよめる哥ノ。此双紙の心も明はなれてかたちのはしたなくあらはなる事を侘ていへるなるべし

わけておはしにし
前に露は別のと吟ト給ひし其露を分て齋信のかへり給ふノ

みたるうたをだになまおぼえなるを。誠にをかし。内なる人も外なる人も。心えずとおもひたるぞことわりなるや」

彼人間四月をいへる日の事なるべし
此三月三十日ほそどの〻一の口に。殿上人あまたたてりしを。やうく〻すべりうせなどしてたゞ頭中將源中將六殿上人の退出せしノ
藏人ノ位ひとりのこりて。よろづの事いひ。經よみ哥うたひなどするに。明はてぬ也。歸りなんとて。露は別のなみだなるべしといふ事を。頭中將うち出し給へれば。源中將もろともにいとをかしうずんじたるに。いそぎたる七夕かなといふを。いみしうねたがりて。曉のわかれのすぢのふとおぼえつるまゝにいひて。わびしうもあるわざかなと。すべてかしなどいひて。かゝる事思まはさずいふは口をしきぞ神今ぞすぢなきとて。わけておはしにしを。七夕のをり。此事をいひいでばやと思ひしかど。宰相になり給ひにし

清少のことばノ
齋信の詞ノ七夕の心得もなく別の事計にて吟露は別の吟の事ノ
三月廿日ニ七夕の詩をとなへ給へばノ
夜明はてたるノ
遠慮なくいふべき事ならずとノ
露分て歸給ノ
齋信長德二年四月廿四日參議

いかでかは其ほどに見付
上達部に齋信の成給へば。殿上人のやうに中宮の御かたへもおほさぬをいかで其七夕の比にも見付て此事をいはんと之

月ごろいつしかと思ひ侍しだに
月ごろ此事をいへる齋信卿に申出んと思ひかまへしだにと之
我心なからすきゝしと
齋信の覺給はぬ事などいひ出んも。我心ながら物すきなるわざと思案せしにと之
もろともにれたがり
宣方の事之。齋信卿と共に清少にとがめられたがりし事之
げにさしつなど
げに〳〵さやうにしたる事有しと之
をとこはてうけん
是は清少と齋信卿のあひ詞なれば知がたし。但漢の張騫か河源を尋て織女を見し事あり。けふ七日なれば其よせある事にやよき中なればきかせてけり
齋信宣方中よければ其子細を齋信のきかせ給ひしと之

かは。必しもいかでかは其ほどに見付などもせん。文かきてとのもづかさしてやらむなど思ひしほどに。七日にまゐり給へりしかは。うれしくて。其夜の事など云出ば心もぞ齋信の不審し給はせんと之
え給ふ。すゞろにふといひたらばあやしなどやうちかたんと之
ふき給はん。さらばそれにぱ有し事いはんとてあるに。齋信不審し給はゞ委申きかせんと之
おぼめかでいらへ給へりしかは。まことにいみしうをかしかりき。月ごろいつしかとおもひ侍しだに。わが心ながらすきゝしとおぼえしに。いかでさばた思ひまうけたえてこたへ給ひけんと之
るやうにの給ひけん。もろともにねたがりいひし中將ぱ。齋信の詞之
思ひもよらでゐたるに。有し曉の詞いましめらるゝぱ。しかの露ぱ別の事をとがめらるゝぱと之
らぬかとの給ふにぞ。げにさしつなどいひ。をとこはてうけ宣方の詞
んなどいふ事を。人にはしらせず。此君と心えていふを。何齋信卿と清少計心えてと之
事ぞ〳〵と源中將ぱそひつきてとへどいはねば。かの君清少に之齋信に宣方の問と之
になほ是の給へとうらみられて。よき中なればきかせて

こばん侍や　基盤之。清少にいひよらんためにいへるよせ詞之
手はゆるし給ばんや
清少。宣方に心とけ給ばんやと之。源氏竹川卷に「哀とて手をゆるせかしいきしにを君に任る我身とならば」是も基に寄し之
さのみあらば　女のさやうに人になびかば不定の物にならんと之
悦び給ひし
[訂]こは給ひきとあるべき語格之しはきの誤にや
猶過たる事忘れぬは
齋信の露ぱ別の涙といひし事を覺給ひしを感ずると之
詩をいとをかしう
齋信の題詠よくし給ひしに。上達部に成て昔のやうにもまゐり給ばでおもゝしくはくちをしからんと之
せうくわいけいのこびやう
題詠云。蕭會稽之過二古廟一託締二異代之交一是朝綱卿の交友の序の文之。會稽の太守蕭氏吳の季禮が賢をしたひて其廟に行あそびし事之

けり。いとあへなくいふほどもなく。ちかうなりぬるをば。てうけんといふ事はいひかせけれども又ほどなく餘のあひ詞をいふ之
おし小路のほどぞなどいふに。我もしりにけるといつしんと之
かしられんとて。わざとよび出て。こばん侍やまろもうた基盤之心ざしまけじと之　宣方詞　清少を之
んと思ふぱいかゞ。手ぱゆるし給ばんや。頭中將とひとし宣方の心之齋信に問聞て知たりと清少に知れ
で也。なおぼしわきそといふに。さのみあらば。さだめなく清少答之
やといらへしを。かの君にかたり聞えければ。うれしくい齋信に清少の語事之
ひたると悦び給ひし。猶過たる事忘れぬ人ぱいとをかし。是も齋信の事之
宰相になり給ひし。一條院之
うずんじ侍しものを。せうくわいけいのこびやうをも過に詩をいとをかしと清少ことば之
しなども誰かいひ侍らんとする。しばしならでもさふら宰相にならでもあれかしと之
へかし。口をしきになど申しかは。いみしうわらはせ給ひ清少さやうにふとてなさじと御たはふれ之　帝之
て。さなんいふとてなさじかしなどおぼせられしもをか
し。されどなり給ひにしかば。誠にさうゝしかりしに。源齋信のさまにまけじとて之
中將おとらずと思ひて。ゆゑだちありくに。宰相中將の御故々しく由めきありく之

いまだ三十のごに
未レ逮三十期一古詩の詞なるべし。未レ勘二全文一
[增]本朝文粹の一に。源英明が。顏回周賢者未至三十期云々といへるなどにや
さらにわろくもあらず
わろくもあらず。よくもあらずとふくめたる詞也。其故に佗しの事やとのぶかたのいへること

ぢんにつき　齋信卿の着陣し給ふこと
かうなんいふ　清少がくのごとくいへば其朗詠を我にをしへ給へとこと
いみしくよくにせて
宣方の齋信のらうえいに似せてこと

たちにたるなり
局にたゝずみうたひしとの心こと
たれぞとにくからぬけしきにてとひ給へれば彼たそととへる清少のけしきのいとほしくて。此習ひて詠じたる事をあざれてかたるぞとこと

うへをいひ出て。いまだ三十のごにおよばずといふ詩を。清少詞こと
齋信のよく詠じ給ひしこと人にはにずをかしうずし給ふなどいへば。などかそ詠こと齋信のらうえいし給ふこと宣方の詞
れにおとらん。まさりてこそせめとてよむに。さらにわろ宣方の朗詠こと清少の詞こと
くもあらずといへば。わびしの事や。いかで。あれがやう宣方の詞齋信のやうにらうえいせで殘念さこと
にずんぜでなどの給ふ。三十のごといふ所なん。すべてい清少の詞齋信のらうえいをほむること
みしうあいぎやうづきたりしなどいへば。ねたがりて。わ宣方こと
らひありくに。ぢんにつき給へりける折に。わきてよび出齋信卿を宣方のこと
て。かうなんいふ。猶そこをしへ給へといひければ。わら宣方の詞其所こと齋信をさしていへり齋信卿こと
ひてをしへけるもしらぬに。つぼねのもとにて。いみしく清少のしらぬこと清少の詞こと
宣方のこと
よくにせてよむに。あやしくてこはたそととへば。ゐみご宣方こと
ゐになりて。いみしき事きこえん。かう〳〵きのふぢんに宣方の詞をかしき事をいはんこと齋信に朗詠をならひし事をいへり
つきたりしに。とひきてたちにたるなめり。誰ぞとにくか誰
らぬけしきにて思ひ給へればといふも。わざとさならひ清少によくきかれんばかりに
給けんをかしければ。これだにきけば出て物などいふを。隱さやうに習ひ給ひしを感ずること

宰相のとく見る事
清少の出て物いふも。齋信のらうえいををしへし功德を見ること
ものもにありながらうへになど
常は清少の局に有ても后宮の御前になど留守つかひて宣方にあはぬこと
右近のさうくわんみつ何
右近衛將曹光さまでは覺て其名を忘れしさまこと。諸官ニかみすけぞうさくわんとてあり。近衛づかさは大將をかみとして。中少將をすけとし。將監をぞう。將曹をさくわんとす。さうくわんはさくわんとおなじ

其ごは過ぬらん朱買臣がめを　是宣方の年齡をたはふれていふ詞こと。三十歳は過て四十餘五十歳にもあらんとの心こと。前漢の朱買臣が妻。買臣が貧きを疎みて去ん事を求しに。買臣笑曰。我年五十當ニ富貴一今已四十餘矣。女苦日久。待ニ我富貴一報ニ女功一と教へいさめし事こと。前漢書六十四に。朱買臣が傳あり。其事なこと

宣方の詞
宰相の中將の德見る事。そなたにむかひてをかむべしなイ四方
どいふ、ものもにありながら。上になどいはするに。これを
詠ぜらるればこと　宣方の朗
うちいづれば。誠はありなどいふ。おまへにかくなど申せ實は局に在しまして出合こと
后宮こと
ば。わらはせ給ふ。內の御物いみなる日。右近のさうくわ
んみつなにとかやいふものして。たゝうがみにかきてお宣方よりのせうそくのさまこと清息の詞こと參んとするをこと
こせたるを見れば。さんぜんとするを。けふは御物いみに
てなん三十のごにおよばずばいかゞといひたれば。かへ清少の返事の詞こと　かの朗詠はいかゞきゝしぞとの心こと
りごとに。其ごは過ぬらんしゆばい臣がめををしへけん妻こと
年にはしもと書てやりたりしを。又ねたがりて。うへの御帝に宣方此清少の
返事を申上らるゝこと
前にもそうしければ。宮の御かたにわたらせたまひて。い定子の御方に帝おはしましてこと清少
前漢書をしりたるを御感の詞こと
かでかゝる事はものしぞ。四十九に成ける年こそさはい
ましめけれとて。のぶかたはわびしういはれにたりといたること
ふめるはとわらはせ給ひしこと。ものぐるはしかりける宣方をさしていふなり
君かなと覺しか」

こきでんには
弘徽殿女御義子の事ゑ。閑院太政大臣公季公の御むすめ。一條院の女御ゑ

おほしまいし
[増]濵按。おほしまいしは。おほしましいにゑ。こは音便ゑ。ましてをまいてといふにおなじ。初卷雁などまいてとあるなど思ふべし

御とのゐなど　宿直ゑ。御番仕る事ゑ。中宮へ御見まひの事をかくいへるゑ

さるべきさまに女房など　清少などのあへしらひ給はれば。物うくて疎遠になりたるとゑ

うちふしやすむ所の
彼うちふしがむすめ左京の事を秀句にいへるゑ

すべて物きこえずかた人とたのみ
清少は口さがながらず我方人とたのみしにとゑ

人のいひふるしたるさまにとりなし給ふ
世の人も此事いひふるすに。それとおなじさまに清少の取なしいひなさるゝとゑ

是より別段ゑ
こきでんとは閑院の太政大臣の女御とぞきこゆる。其御かたに。うちふしといふものゝむすめ。左京といひてさふらひけるを。源中將かたらひて。おもふなど人々わらふころ。宮のまきにおほしまいしにまゐりて。時々は御とのゐなどつかふまつるべけれど。さるべきさまに女房なども
てなし給はねば。いと宮づかへおろかにさぶらふ。とのゐも給り態とし給はゞ眞實に宮づかへせんとゑ
所をだに給ばりたらんば。いみしうまめにさぶらひなんなどいひゐ給ひつれば。人々げになどいふほどに。まことに人はうちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりにはしげくまゐりたまふなる物をとさしいらへたりとて。
宣方の詞ゑすべて物きこえず。かた人とたのみきこゆれば。人のいひふるしたるさまに取なし給ふなど。いみしうまめだちて
宣方のさまゑうらみ給ふ。あなあやし。いかなる事をかきこえつる。更に聞とゞめ給ふ事なしなどいふ。かたばらなる人をひき

さるべき事もなきを
清少の詞には更に聞とむる事もなきにうらみ給ふは。樣子こそあるらめとゑ。恨み腹立をほとほりと云ゑ

[増]濵按。ほとほりは。今俗にアツクナルといふに同トく。腹たちいかるをいふならん是もかのいはせ給ふ

清少のをしへていはするを。のぶかたのうらみ給ふゑ

殿上人のわらふをて
殿上人も此事によりて笑ふ故又清少に此うらみをいひ出しとゑ

さてはひとりを恨み
殿上人も笑ふとならば清少一人此うらみをふべきにもあらぬを。あやしくかこち給ふとゑ

むかしおぼえてふよう成
昔の傳は有ながら不用に成くだりし心ゑ

うげんべりのたゝみ
纈纈緣疊ゑ

ぢずりの物　白き絹に花田色のこもんなどすりたるゑ

ゑトの目くらき
衛士繪師清濁二義なるべし

[増]ゑトは。禁庭にありて守衛する士ゑ

ゑびそめのはひかへり
蒲陶染薄紫ゑ。紫は桂の灰をさす物なれば其色のさめたるを灰かへるといふゑ

ゆるがせば。傍觀の詞ゑ。さるべきことともなきをほとほり出給。さまことそあらめとて花やかにわらふに。是もかのいはせ給ふならんとていと物しとおもへり。清少のことばゑ更にさやうの事をなんいひ侍らぬ。人のいふだににくき物をといひて。ひきいりにしかば。後にも猶人にはぢがましき事云つけたるとうらみて。宣方のうらみ給ふことばゑ殿上人のわらふとていひ出たるなりとの給へば。清少の詞ゑてはひとりをうらみ給ふべくもあらざめる。あやしなどいへば。その丶ちはたえてやみ給ひにけり」左京と中絶とゑ

むかしおぼえてふようなる物
うげんべりのたゝみのふりてふし出きたる。きぬのふし出しとゑからゑの屏風のおもてそこなはれたる。地摺ゑ藤のかゝりたる松の木かれたる。ぢずりの物花かへりたる。はなだの色さめしとゑゑしのめくらき。きちやうのかたびらのふりぬる。帽額ゑもかうのなくなりぬる。七尺の長かもトの年へて色かはりしとゑかづらのあかくなりたる。ゑびぞめのおり物のはひかへ

青山堂藏版

八十五段

浮草水草蔭りて
誰取つくろふ物もなき心をふくめたり

夜かれがち　夜離ゝ
六位のかしらしろき
若きは末の昇進の類もあれど。老たるほたのもしげなきゝ
人の事なしがほに
人の事を請取て。其事を成就せんとするさまゝ
經は不斷經
たゆむたゆむまゝきのたのみがたき心なるべし

八十六段

宮のほとりのまつり
たとへば春日八幡なと遠き所も。其儀式はくらまのつゝらなり
九折ツヽラヲリ。今鞍馬に七曲といふ道ゝ。
近き道をまがりのぼれは遠き也

八十七段

りたる。色ごのみの老くづをれたる。面白き家の木だち
燒亡のさまゝ
やけたる。池などはさながらあれど。うき草みくさしげり
て」

たのもしげなきもの

心みじかくて人忘れがちなるむこのよかれがちなる。六
位のかしらしろき。空ことする人のさすがに人の事なし
がほに大事うけたる。一番末のまけもあるべき心ゝにかつすぐ六。六七八十なる人
のこゝちあしうして日ごろになりぬる。風吹イはやきにはあげた
るふね。經はふだんぎやう」

ちかくてとほき物

宮のほとりのまつり。おもはぬはらから兄弟ゝ親族ゝのぞくの中。く
らまのつゝらをりといふみち。まはすの晦日。む月一日の
ほど」

とほくてちかき物

八十八段

ごくらく　阿彌陀經に。西方過二十万億佛土一有二世界一名曰二極樂一と說き。又阿彌陀佛去此不遠ともとける心なるべし
舟のみち　三四十里の道も風よき時は一日一夜にもゆく心にや
男女の中　男は陽。女は陰。たぐひことなる物ながら。夫婦合躰の理遠くて近し

ほりかねの井　武藏ゝ
山の井さしも淺き
万葉「淺香山影さへ見ゆる山のゐの淺き心は我おもはなくに」大和物語には淺くは人をおもふ物かはと有。陸奥ゝ。猶あまたあり
あすかゐみもひも寒し
催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし陰もよしみもひも寒しみま草もよし」花鳥餘情云。あすかゐのうたの陰もよしは木陰ゝ。みもひもは寒水ゝ。みまくさは馬草也。一說飛鳥井は京にある清水ゝ。二條万里小路に有と云
玉の井
[增]山城の國相樂郡にあり
せうしやうのゐ　少將井と書。烏丸の東。大炊御門の南と拾芥にあり
[訂]原本せうしやうゐとあり。今イ本によりてのもトを補ひつ
櫻井　山城水無瀨の近邊也。待宵の小侍從の舊跡ある所ゝ
きさきまちのゐ　后町は。常寧殿にありと拾芥に見ゆ。井も有しにや
千貫の井　八雲に。ちぬきのゐとあり

八十九段

受領は　國司の事ゝ
紀伊守　上國なれば。從五位下也。和泉は下國にて從六位下ゝ。官位令ニ有

九十段

やどりのつかさの權守
環翠軒。舟橋從三位の。職原抄の私抄云。宿

ごくらく。舟の路。男女の中」

井は

ほりかねのゐ。はしりゐは。走井近江ゝ相坂なるがをかしき。山のゐ。
さしも淺きためしになりはじめけん。あすかの井。みもひも
さむしとほめたることをかしけれ。玉の井。八雲に山城云々せうしやうの
井。櫻井。きさきまちの井。千貫のゐ」

受領は

紀伊守。和泉」

やどりのつかさのごんのかみは

九十一段

官とは。官外記などの五位したるが。頓て顯職に任じがたきを。外國等にしばし任ず。これは官を宿す義也。職原抄云。權守者近代多是遙授也。環翠軒云。遙授とはいるかにさづかる也。國の守は四位五位の者先任じて則任におもむくを。權守は。其國へはおもむかず。これ遙授の儀之。又曰權守は地下の五位六位これに任ず。又春の除目の時。參議雲客などの兼官になる事も有。それは別事之下野。甲斐。越後。およそ諸國に大國上國中國下國とてあり。大國と上國には權守あり。中下國には權守なし。此草紙の五ヶ國は皆上國之。權守勿論有

大夫　侍の叙爵せしを大夫といふ之。環翠云。八省の丞左右衛門尉など五位に成たる時。中務大夫。式部大夫など云之。侍の面目也云々

式部太夫　式部丞は。相當六位なるを。五位に叙して叙爵したるを。式部大夫といふなり

左衛門大夫　左衛門大尉は六位之。叙爵して左衛門大夫といふ之

史大夫　左右大史は正六位上之。五位になりて史大夫といふべし叙爵すると之

かうふりえて云々

[訂]是よりは例の筆すさび之。原本には。上につゞけてあれど。今前後の例にならひて別行とせり

紫がはしていよす

伊豫簾をむらさきの革にてかけたると之

おやの家しうとは更之

是より彼門つよくさせなどいひし事の心づきなきに付て。住べき家は假初にて少荒たるやうなるがよき事をいふとて。其のしなくをさまゝ書つゞけたり

下野。甲斐。越後。筑後。阿波」

大夫は

式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人おもひかくべき事にもあらず」

かうふりえて何のたゆふ。權の守などいふ人の。板屋せば受領の權守之前註

き家もたりて。また小檜垣などあたらしくし。車やどりにくるを引たて。庭のひろからぬ之前におもひかくべき事にもあらずといひし首尾之

どかはするこそいとにくけれ。庭いときよげにて。紫がはしていよすかけわたして。布障子之ぬのさうじばりて住居たる。よるは門つよくさせなど事おこなひたる。いみしうおひさ行さきのたのいひ付る之

きなく心づきなし。おやの家。しうとはさらなり。見の家はいふも更之しうとと伯父之兄之をぢ。あ

おのづからむつましううち知たる受領自然したしく知たる國守の家。又は其國守の住國へ行て留守に住人もなくいたづらにあるなど借て住もよからんとの心之

宮ばらなどの屋あまた

宮達ある所を宮ばらといふ之。伊勢物語にそこ成ける宮原にとあるにおなし。源氏に宮腹の中將とあるは別の事之

[增]こは殿原奴原などいふときのほらと同意

にてだちなどいふにおなじ

つかさ待出てのち

其家に住べき程の官に至り。身の威勢付て後にすむこそよけれと之

いとよもぎしげり

[訂]原本に糸よもぎとかけるは。糸を假字に用ゐたるなれど。頗はしきやうなれば今改めつ

所々すなごの中より青き

圖詠ニ庭增ニ氣色ノ晴砂綠。又續レ砂草只三分許などもいへるさまと

きはゝ〳〵しき　急度する心之

宮づかへ人の里なども

是より親なき宮仕へ人の里亭の事をいふ之。宮づかへする餘情にて。にきはゝしきやうなれど。父母なきはたよりなく悲しとの心之

出給ひけるもしらで

思ひ人のかの宮つかへ人に音信の調之。退出をもしらでとく見まゐざりしと之

になどのすまぬいへ。其さるべき人のなからんは。おのづからむつましうちしりたる受領。又國へ行ていたづらなる。さらずは女院宮ばらなどの屋あまたあるに。つかさまち出て後。いつしかとよき所尋出て住たるこそよけれ」

女のひとりすむ家などはたゞいたうあれて。ついぢなどもまたからず。池などのある所は。みくさゐる。庭などいとよもぎしげりなどこそせねども。所々すなごの中よりあをき草見えさびしげなるこそ哀なれ。物かしこげになだらかにすりして。門いたうかため。きは〳〵しきはいとうたてこそおぼゆれ」

宮づかへ人の里なども。親どもふたりあるはよし。人しげく出いり。おくのかたにあまたさま〳〵のこゑおほくきこえ。馬のおとしてさわがしきまであれどかなし。されど忍びてもあらばれても。おのづから。出給ひけるをしらで

うたてさわがしう
夜中までさわがしと家主などの心もとなくおもふさまと。是も親なき人の里亭なれば。家守などの心に任せてつよく守るが侘しき事をいふと

なまふせかしげに思ひて
防の字と。彼さひ來てある人を防ぎいさはしげに門守のいふと

このかく今や出ると
人出給ひなばとくさせといひつけられし門守などの。客は出給へるやとのぞきうかゞふを。客の供人のわらひてまれなどするといさいろに出ていはぬも
色に出ておもふふしなどいはぬとてもと

夜ふけぬみかどあやふかなる　夜更て門の用心もあやうきに。とく寢て門さゝせんとてれたるもありと。イいぬるもありは。早く歸りて門さゝせんとていにしと。此本可然にや

ども。又いつかまゐり給ふなどもいひにさしのぞく。心がけたる人は。いかゞはと門あけなどするを。うたてさわがしうあやふげに。夜なかまでなど思ひたるけしきいとにくし。おほ御門はさしつやなどとはすれば。まだ人のおはすれば。家主のいひ付る詞と　防の字と　答ると　人出給

逢見る躁

もやこゝろかけし人のさまと

門守の答と客のおはすればさゝすと

すればなど。なまふせがしげに思ひていらふるに。人出給ひなばとくさせ。此ごろはぬす人いとおほかりなどいひたる。いとむつかしう。うちきく人だにあり。此人のともなるものども。このかく今や出るとたえずさしのぞきて

よそ人のうちきくもむづかしきさと　句　此客人の供と

門守などのさまをさしていふと

けしき見る物どもを。わらふべかめり。まねうちするもきゝまれし笑ふを門守のきゝたらばとと

門守などのぞくさまを供の人

是より彼來こふらふ

人の事を云と　てはいかにいとゞきびしういひとがめん。いと色に出ていはぬも。おもふ心なき人は。必きなどやする。されど

健なる人の詞と

健と きすくなる人と　すくよかなるかたは。夜ふけぬ。御門もあやふかなるといひてぬるもあり。まことに心ざしことなる人は。はやなど

眞實におもふ人の事と

早歸給へと

逐と追やる心と　あまたたびやらはるれど。猶居あかせば。たび〳〵ありく

あけぬべきけしきをめづらかに　此客の猶歸らで夜あかさんずるけしきを門守がめつらかなる人かなとおもふと

こよひいさうとあけひろげて

古語未勘

[訂]諸本此所に説なし。然して濱臣も一言の説なきはいさいぶかし。弘按。こは衍文なるべし。考るにらいさうは。古鈔本にらいさぞに作る。然らばうはその誤なる事は知られたり。然していはは筆誤にはあらざるか。さてはこよひらはさぞとよむべし。即ち今宵等は然ヤウニゾといふ義と。是にて文意明瞭なるべし

おやそひぬるはなほこそ
親の守る人は。門守のむつかしきより猶つゝましくこそあれと

けにきくにはさぞあらん
兄なとの聞には猶おもふ人に逢事のつゝましからんと

何の宮うちわたりの
なんでふ其宮かたの殿原。禁中などの殿はらの忍びてきし人の歸りたりしのちも

人の出ぬるのちも
かの忍びてきし人の歸りたりしのちもと

人のうへなどもいひ哥など
れいられぬほどに。かたへの人に人の上をかたり。哥物かたりをもして。人のいふをもきく〳〵れいりたると

門守が心と

に。あげぬべきけしきをめづらかに思ひて。いみしき御門をとよひらいさうとあけひろげてと聞いひ事するとえごちて。あぢきなく曉あかつきにぞさすなる。門守をにくめると　いかゞにくき。句　まゝしき親の事と　おやそひぬるはなほこそあれ。まことならぬば。いかに思ふらんとさへ自由なるまゝとふくめたり。句　兄人と　つゝましうて。せうとのいへなども。げにきくにはさぞあらん。夜中あかつきともなく。門いと心がしこくもなく。可畏と門さすをそれもなくてと

何の宮内わたりの殿ばらなる人々の出あひなどして。かうしなどもあげながら。冬の夜をゐあかして。人のいでぬるのちも見いだしたるこそをかしけれ。有明などはましていとをかし。笛などふきて出ぬるを。彼かへる人の吹と　我はいそぎてもねられず。人のうへなどもいひ。哥などかたりきくまゝに。ねいりぬるこそをかしけれ」

雪のいとたかくはあらで。うすらかにふりたるなどはいとこそをかしけれ。又雪のいとたかく降つみたる夕ぐれ

あはれなるもをかしきも
世の中の哀なる事面白き事などをもゝ

なんでふ事にさはり
何といふ事の故障にて。只今まゐりしといふゝ
けふこん人を
拾遺集「山里は雪ふりつみて道もなしけふこむ人を哀とはみん」兼盛のうたゝ

あけぐれのほどに
昧爽。文選。夜明んとてほのぼのしくらくなるゝ

より。はしちかうおなじ心なる人二三人ばかり。火をけなかにすゑて。物がたりなどするほどに。くらうなりぬれば。こなたにては火もともさぬに。大かた雪の光いとしろう見えたるに。火ばしたてはいなどかきすさびて。あはれなるもおかしきもいひあはするこそをかしけれ。よひも過ぬらんとおもふほどに。くつのおとちかうきこゆれば。あやしと見出したるに。時々かやうの折。おぼえなく見ゆる人なりけり。けふの雪をいかにと思ひきこえながら。なんでふことにさはり。其所にくらしつるよしなどいふ。けふこん人をなどやうのすぢをぞいふらんかし。ひるよりつる事どもをうちはじめて。よろづの事をいひわらひ。うださし出たれど。かたつかたのあしばたもながらあるに。かねのおとのきこゆるまでになりぬれど。うちにもとにも。いふ事どもはあかずぞおぼゆる。あけぐれのほどにか

雪河の山にみてる
曉入二梁王之苑一雪滿二辞山一。謝靈運か自賦の詞
題詠にあり。梁孝王は漢文帝の御子ゝ。竹苑をひらきて雪の朝は鄒生枚叟などを召てあそび給ひし事文選の註にあり

村上の御時　六十二代天暦のみかどゝ
雪月花の時と　友
題詠。琴詩酒伴皆抛レ我。雪月花時最憶レ君。
これ文集にては樂天の殷協律をおもひて憶レ君とつくれりしに。今の兵衛藏人はかやうの折も我君を思ひ奉るとの心にていへるなるべし

かうをりにあひたる事なん
袋双紙云。俊頼云折ふしにかなひたる哥を詠するは讃にはまされる也。前齋宮歸京の時。供奉の人舟中にいねずして有間に。郭公一聲鳴たり。万人新しき哥をよまばやとおもふ時分に。女房の聲して「淀のわたりのまだ夜深きにと吟ずたり。人々感して忘がたかりけるとも也。

わたつみのおきに
沖を爐火にそへて。蛙の火にこがれたるをいはんとてよめるうたゝ

へるとて。雪何の山にみてるとうちずんじたるはいとをかしき物也。女房ばかりありてはの心ゝ女のかぎりしてはさもえゐあかさざらましを。只なるよりはいとをかしうすきたるありさまなどをいひ合せたる」
是より過たる事の物語ゝ
村上の御時雪のいとたかう降たりけるを。やうきにもらせ給ひて。梅の花をさして月いとあかきに。是に哥よめ。いかゞいふべきと。兵衛の藏人にたびたりければ。雪月花のときとそうしたりけるこそ。いみしうめでさせ給ひけれ。
村上の勅定ゝ
うたなどよまんにはよのつねも也。かうをりにあひたる事なんいひがたきとこそおぼせられけれ。おなじ人を御供にて殿上に人さふらはざりけるほど。たゞずませおはしますに。すびつのけふりのたちければ。かれは何のけふりぞ見てことおぼせられければ。見て歸りまゐりて」
見て來よと勅言ゝ　兵衛藏人哥ゝ
わたつみのおきにとがるゝ物見ればあまのつりしてか

へるなりけり」

とそうしけるこそをかしけれ。かへるのとび入てこがるゝなりけり」

みあれのせんじ五寸ばかりなる殿上人形之わらはのいとをかしげなるをつくりて。みづらゆひ。髻也ひんづらゆふえさうぞくなどうるはしくして。名かきてたてまつらせたりけるに。ともあきらのおほきみとかきたりけるをこそいみしうせさせ給ひけれ」

みあれのせんじ

今昔物語云。御形の宣旨といふ人は。優にやさしくかたちもめでたかりけり。皇太后宮の女房也。註御堂の中姫。三條院の御時皇后宮と申たるが女房云々。愚案。後拾遺集の作者大和宣旨と同人なるべし。作者部類云。中納言惟仲女。三條院皇后宮女房。大和守義忠爲レ妻之故號二大和一とあり

[増]万歳抄云。みあれのせんじは。源氏權卷なる齋院宣旨の類なるべし。みあれは齋院のしろしめす事なれば。齋院の女官をかくいふならん

中巻終

明治二十六年六月六日印刷
明治二十六年六月十日發行

訂正増補者
東京市小石川區竹早町十三番地 鈴木弘恭
東京市京橋區南傳馬町一丁目十二番地 吉川半七（電話千九十五番）

著者故人北村季吟相
續人北村元部理代人

版權所有
發行者 東京市小石川區大門町二十五番地 青山清吉（青山堂本店）（電話千二百六番）
印刷者 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工場（電話十九番）
發行所 東京市神田區通新石町廿一番地 青山堂支店（雁金屋）
賣捌人 東京市日本橋區本材木町二丁目 林平次郎

版權所有
（定價金三十錢）

關西大賣捌書林

大阪市南區心齋橋南一丁目　**松村九兵衛**

各府縣賣捌所

大阪久寶寺町　前川善兵衛
同　備後町　吉岡平助
同　備後町　梅原龜七
同北久太郎町　柳原喜兵衛
京都寺町通　若林書店
同　新町通　便利堂
同　三條通　大谷書店
同　寺町通　梅原支店
熊本新二丁目　長崎二郎
神戸相生橋東　熊谷久榮堂
佐賀白山町　河内壯助
飛驒高山　桝屋重兵衛
岐阜米屋町　三浦源助
愛知名古屋本町　川瀨代助
同　同　片野東四郎
靜岡新通一丁目　勝見儀助
石川金澤　近田太三郎

新潟新潟市　林富吉
同　長岡　目黑十郎
長野善光寺前　西澤喜太郎
同　小諸　小山佐傳治
山梨甲府八日町　五明堂
群馬前橋本町　煥乎堂
宮城仙臺國分町　金港堂
岩手盛岡中橋通　便益堂
山形八日町　五十嵐太右衛門
秋田大町　本間金之助
北海道函館　魁文社
福島福島町　萱間左右太
栃木宇都宮町　正々堂
茨城水戸上市泉町　川又銀藏
同　古河町　高木文正堂
千葉佐原　朝野利兵衛
同　東金　多田屋書店

鈴木弘恭先生訂正增補

北村季吟翁抄訂正

增補枕草子春曙抄

東京書林　青山清吉藏版